

恒武西宮遺跡 7

Tsunetake-nishimiya Site
The 32nd Excavation Report

浜松市教育委員会

2022年11月

Hamamatsu Municipal Board of Education, November, 2022



恒武西宮遺跡 7

2022

浜松市教育委員会



B区全景（南西から）

巻頭図版 2



A区全景（南東から）



C区全景（北東から）



A区 SK289遺物出土状況（南西から）



B区 SK128遺物出土状況（南東から）



主要出土遺物

例 言

- 1 本書は、静岡県浜松市東区恒武町 225-1、226-1、227-1、227-2 において実施した恒武西宮遺跡 32 次調査の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、自動車整備センター新設工事に先立ち実施した。現地の発掘調査作業、整理等作業及び報告書刊行は、事業主体である静岡トヨタ自動車株式会社からの依頼を受けて、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が実施し、浜松市から委託を受けた株式会社アーキジオ実務を補佐した。調査にかかわる費用は、全額静岡トヨタ自動車株式会社が負担した。
- 3 発掘調査の面積と期間は、以下のとおりである。
- 4 32 次調査 調査面積 1,400 m²
調査期間 現地調査 令和 4 年 1 月 12 日～令和 4 年 3 月 25 日
整理期間 令和 4 年 7 月 11 日～令和 4 年 11 月 30 日
- 5 現地調査は、川西啓喜（浜松市市民部文化財課）が担当し、田中昌樹（株式会社アーキジオ）が実務を補佐した。また、春本和浩（同）、楠原崇（同）、河野潤（同）が作業に加わった。整理作業は川西が担当し、田中が実務を補佐した。
- 6 本書の執筆は、第 1 章 1、第 3 章 2 を川西、第 1 章 2～4、第 2 章、第 3 章 1 を田中が行った。現地における写真撮影は、田中が担当し、一部を川西が行った。遺物写真撮影は田中、首藤有里（株式会社アーキジオ）が行った。本書の編集は、川西が担当し、田中が実務を補佐した。
- 7 調査にかかわる緒記録及び出土遺物は、浜松市市民部文化財課が保管している。
- 8 本書の作成においては、鈴木敏則氏よりご教示を得た。記して謝意を表したい。
- 9 本書で報告する遺構の略号は下記の通りである。
溝：SD 土坑：SK 掘立柱建物：SH 小穴：SP 不定形遺構・性格不明遺構：SX
- 10 本書で報告する土器の断面と、種別の関係は以下の通りである。
須恵器 ■■■ 土師器 □ 陶器 ■■■ 磁器 ■■■

目次

卷頭図版

例言

第1章 序論	1
--------	---

1 調査に至る経緯	1
2 地理的・歴史的環境	2
3 調査の方法と経過	5
4 恒武西宮遺跡の調査歴	6

第2章 調査成果	9
----------	---

1 調査の概要	9
2 A・B区の調査	11
3 C区の調査	49
4 D区の調査	60

第3章 総括	61
--------	----

1 発掘調査の成果	61
2 恒武西宮遺跡の変遷	63

遺物観察表	67
-------	----

図版

報告書抄録

図版目次

巻頭図版

- 1 B区全景（南西から）
- 2-1 A区全景（南東から）
- 2-2 C区全景（北東から）
- 3-1 A区 SK289 遺物出土状況（南西から）
- 3-2 B区 SK128 遺物出土状況（南東から）
- 4 主要出土遺物

図版

- PL. 1 1 A区完掘全景（南西から）
- PL. 1 2 B区完掘全景（南西から）
- PL. 2 1 C区完掘全景（北東から）
- PL. 2 2 D区完掘全景（南から）
- PL. 3 1 B区 SD03, SD11 完掘状況（北から）
- PL. 3 2 B区 SD66 完掘状況（北東から）
- PL. 3 3 B区 SD66 須恵器高環(2) 出土状況（北西から）
- PL. 3 4 B区 SD66 須恵器平瓶(3) 出土状況（西から）
- PL. 4 1 A区 SD239 完掘状況（東から）
- PL. 4 2 A区 SD242 滑石製勾玉(19) 出土状況（北東から）
- PL. 4 3 A区 SE208 土層断面（西から）
- PL. 5 1 B区 SK29 完掘状況（北から）
- PL. 5 2 B区 SK29 土層断面（西から）
- PL. 5 3 B区 SK29 土師器甕(29) 出土状況（西から）
- PL. 5 4 B区 SK30 完掘状況（北西から）
- PL. 5 5 B区 SK80 完掘状況（西から）
- PL. 6 1 B区 SK128 土層断面（西から）
- PL. 6 2 B区 SK128 完掘状況（西から）
- PL. 7 1 A区 SK198 完掘状況（東から）
- PL. 7 2 A区 SK204 完掘状況（西から）
- PL. 7 3 A区 SK206・SK266 完掘状況（南から）
- PL. 8 1 A区 SK221 遺物出土状況（西から）
- PL. 8 2 A区 SK221 完掘状況（西から）
- PL. 8 3 A区 SK255 遺物出土状況（北西から）
- PL. 9 1 A区 SK280 完掘状況（北西から）
- PL. 9 2 A区 SK289 完掘状況（北西から）
- PL. 9 3 A区 SK289 土層断面（西から）

- PL. 9 4 A区 SK289 須恵器 (83 ~ 85) 出土状況 (西から)
- PL. 10 1 A区 SK294 遺物出土状況 (北東から)
- PL. 10 2 A区 SK295 土師器甕 (89) 出土状況 (東から)
- PL. 10 3 A区 SK296・SK302 遺物出土状況 (東から)
- PL. 11 1 A区 SK305 及び周辺 遺物出土状況 (西から)
- PL. 11 2 A区 SK296, SK301 土師器台付甕出土状況 (北から)
- PL. 11 3 A区 SK305 土師器甕 (111) 出土状況 (北から)
- PL. 11 4 A区 SK305 周辺 土師器壺 (132) 出土状況 (北から)
- PL. 11 5 A区 SK305 周辺 土師器甕 (139) 出土状況 (北から)
- PL. 12 1 C区 SD342 完掘状況 (南東から)
- PL. 12 2 C区 SD345 完掘状況 (東から)
- PL. 12 3 C区 SH01 完掘状況 (北東から)
- PL. 13 1 主要出土遺物
- PL. 14 1 A・B区 SD66・242, SK28・68・128 出土遺物
- PL. 15 1 A・B区 SK204・206・221・255・280 出土遺物
- PL. 16 1 A・B区 SK289・294・296 出土遺物
- PL. 17 1 A・B区 SK296・301・302・304・305 出土遺物
- PL. 18 1 A・B区 SX47 C区 SD341・342・347、SK408、包含層 出土遺物

図表目次

挿 図

Fig. 1	調査対象地の位置	1
Fig. 2	恒武西宮遺跡周辺の遺跡分布図	3
Fig. 3	包含層掘削状況	6
Fig. 4	遺構検出状況	6
Fig. 5	遺構掘削状況	6
Fig. 6	恒武西宮遺跡の調査履歴	7
Fig. 7	基本層序柱状図	9
Fig. 8	調査区全体図	10
Fig. 9	A・B区 遺構配置図	11
Fig. 10	SD03・11 詳細図	13
Fig. 11	SD66, 242・243 詳細図	14
Fig. 12	SD239 詳細図	16
Fig. 13	SD260 詳細図	17
Fig. 14	SE208 詳細図	19
Fig. 15	SK25, 80 詳細図	20
Fig. 16	SK29, 30, 53, 108 詳細図	21
Fig. 17	SK128・142, 175, 198, 204 詳細図	23
Fig. 18	SK206・266, 221 詳細図	25
Fig. 19	SK255・287, 289 詳細図	26
Fig. 20	SK280, 294, 295・302・303 詳細図	28
Fig. 21	SK296・301 詳細図	30
Fig. 22	SK305 ほか遺物出土状況図	31
Fig. 23	A・B区小穴詳細図 (1)	33
Fig. 24	A・B区小穴詳細図 (2)	35
Fig. 25	A・B区小穴詳細図 (3)	36
Fig. 26	A・B区 SD51～260、SE208 出土遺物	38
Fig. 27	A・B区 SK25～176 出土遺物	40
Fig. 28	A・B区 SK204～289 出土遺物	43
Fig. 29	A・B区 SK294～305、SP179・293 出土遺物	45
Fig. 30	A・B区 SX47、包含層出土遺物	47
Fig. 31	A・B区 包含層出土遺物 (2)	48
Fig. 32	C区 遺構配置図	49
Fig. 33	SH01 詳細図	50
Fig. 34	SD341, 342, 345 詳細図	51
Fig. 35	SD347, 378, 419 詳細図	53
Fig. 36	SK359, 361, 381, 387, 397 詳細図	55

Fig. 37	SK401, 408 詳細図	56
Fig. 38	C 区 SD341 ~ 419、SK359 ~ 408 出土遺物	58
Fig. 39	C 区 包含層出土遺物	59
Fig. 40	D 区 遺構配置図	60
Fig. 41	恒武西宮遺跡 32 次調査区の変遷	63
Fig. 42	恒武西宮遺跡周辺の古墳時代の様相	64
Fig. 43	恒武西宮遺跡周辺の中世の様相	65

挿 表

Tab. 1	恒武西宮遺跡調査履歴一覧	8
--------	--------------	---

第1章 序論

1 調査に至る経緯

恒武西宮遺跡は、浜松市東区恒武町及び貴平町に位置する古墳時代から戦国時代にかけての遺跡である。遺跡の位置する笠井地区は、広域で遺物の散布が認められることから、古くから遺跡が埋没している可能性が指摘されてきたが、発掘調査が実施されることはなく、長らく遺跡の様相は不明確であった。しかし、1990年代後半以降、道路建設工事等を中心に発掘調査が行われてきた結果、古墳時代及び戦国時代の集落跡や古墳時代前期の方形周溝墓等が確認され、遺跡の様相が明らかとなりつつある。恒武西宮遺跡の周辺には隣接して山ノ花遺跡、恒武西浦遺跡、恒武東覚遺跡が分布しているが、各遺跡との境界は明確に区分できるものではなく、これらの遺跡を総称して恒武遺跡群と呼ばれる。いずれの遺跡においても、これまでの発掘調査により古墳時代から戦国時代の遺構・遺物が確認されている。恒武西宮遺跡や恒武西浦遺跡では、古墳時代の掘立柱建物跡等が検出されており、集落が展開していたことがうかがえる。一方、山ノ花遺跡では大型の自然流路（恒武大溝）が検出されており、自然流路内からは、古墳時代中期の須恵器に加えて木製祭祀具や滑石製模造品などの祭祀関連の遺物が豊富に出土している。

令和2年（2020）に恒武西宮遺跡の埋蔵文化財包蔵地内において、静岡トヨタ自動車株式会社の自動車整備センターの新設工事が計画された。そのため、令和2年（2020）3月5日から6日にかけて遺跡の埋没状況を確認するため予備調査（29次調査）を実施したところ、計画地の全域において古墳時代から戦国時代の遺構・遺物が確認された。こうした結果を受けて、開発事業者と遺跡の取扱いについて協議を行った結果、建設工事により遺跡の保護が図れない部分について、記録保存のための本発掘調査を実施することになった。

本発掘調査は、静岡トヨタ自動車株式会社の依頼を受けて、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が行い、現地調査及び整理作業の実務を株式会社アーキジオが実施した。現地調査は令和4年（2022）1月12日から令和4年（2022）3月25日にかけて実施した。調査対象面積は約1,400㎡である。

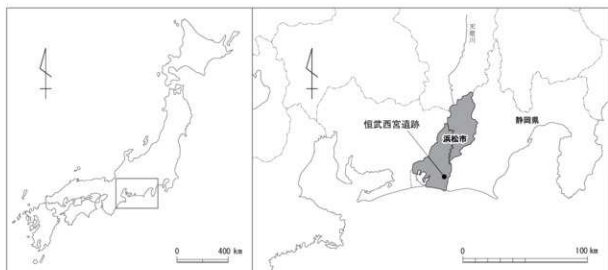


Fig.1 調査対象地の位置

2 地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

長野県の諏訪湖を水源とし遠州灘へと流れる全長約 216 km の長大な天竜川は、大部分が山岳地帯を流れ、天竜区以南から河口までの約 23 km の下流域で沖積平野（天竜川西岸に広がる沖積平野）を形成している。この沖積平野は、東の磐田原台地と西の三方原台地に挟まれており、天竜川はこの中を南流する。現在では、近世以降の河川改修により流路は直線的に固定されているが、『続日本記』によると、かつては「荒玉河（あらたまがわ）」と呼ばれ、幾度となく氾濫増水を繰り返し、流路の変更が絶え間なく行われており、鎌倉時代頃には本流が磐田原台地側に移ったと推測されている。このような経緯から、当流域では複雑な微地形が展開することとなった。

そしてこの沖積平野の中央に位置する本遺跡は、浜松市東区恒武町に所在する。恒武町は北に隣接する笠井町と同様、比較的安定した扇状地上にあり、この地の基盤層は過去の調査にて、旧天竜川の堆積物である礫層であることが確認されている。この基盤層の上に広がる扇状地の末端に本遺跡は所在し、当地より南側には比較的平坦な土地が広がっている。しかし、かつては天竜川の氾濫等により、本流を含め流路の変更が頻繁に行われていたことから、流路が網の目のように入り組んだ地形を形成していたと考えられる。そしてこれらの流路の間に安定した微高地が散在し、こうした場所に本遺跡を含め多数の遺跡が存在する。

(2) 歴史的環境

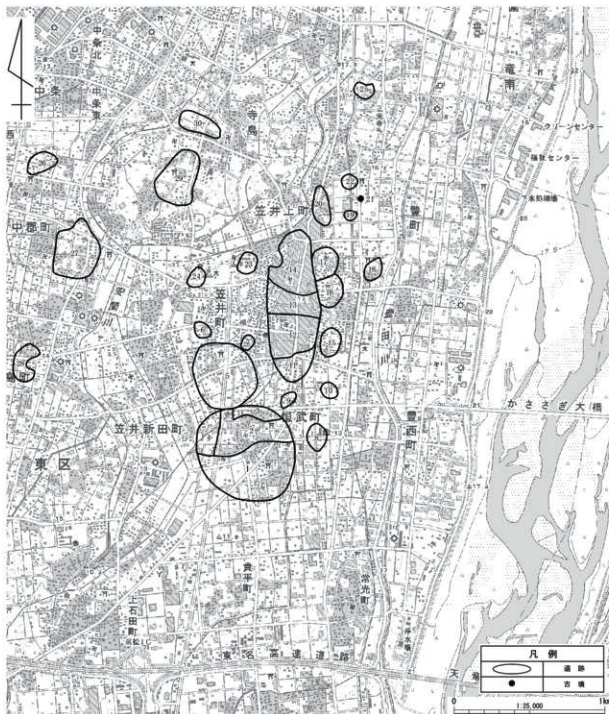
縄文時代以前 縄文時代以前の遺跡については、恒武町及び笠井町内において現状では確認することが極めて困難である。旧石器時代に関しては、後世の土砂が著しく堆積していることから、当時の生活状況を確認するには至っていない。また、縄文時代についても同様で、約 16,000 年前から始まったいわゆる「縄文海進」が、後に海退するに伴い、沖積平野の形成が始まったと考えられる。この時期はまだ当地の沖積平野は形成途上にあり、河道や湿地が天竜川の氾濫により交錯する景観であったとされることから、安定した平野では無かったと推測される。そのような状況から、当時の生活基盤は三方原台地上と考えられる。しかし、天竜川西岸に広がる沖積平野での発掘調査において縄文土器が出土する例があり、今後の類例増加によっては、当時代の景観復元に変更が加えられる可能性が高いと考えられる。

弥生時代 縄文海退が進むにつれ天竜川の西岸に広がる沖積平野が安定化し始めた事により、弥生時代になるといよいよ集落形成は激増する状況となる。

弥生時代前期では宮竹野際遺跡から、縄文時代晩期から弥生時代前期併行期の土器が出土しており、弥生時代中期から始まる本格的な水田造営に至る平野の利用状況を見る事ができる。

弥生時代中期になると宮竹野際遺跡を始め、海東遺跡、将監名遺跡、田見合遺跡等から弥生土器が出土している。特に将監名遺跡では膨大な出土遺物の中には西遠江の土器だけでなく、東遠江・三河・尾張からの搬入土器も出土しており、人と物の交流が認められる事や環濠を備える集落の規模などから、当時の拠点集落であったと考えられる。

弥生時代後期になると平野部の遺跡数は更に増加する事から、平野部への集落の進出が本格化する時期と考えられる。発掘調査により確認されたされた遺跡だけでも、越前遺跡、大蒲村東遺跡、海東遺跡、山寺野遺跡、将監名遺跡、寺西遺跡、天王中野遺跡、中田北遺跡、松東遺跡、森西遺跡、



- | | | |
|-----------|-------------|-----------|
| 1 恒武西宮遺跡 | 11 笠井東遺跡 | 21 蛭子森古墳 |
| 2 恒武西浦遺跡 | 12 笠井下組遺跡 | 22 八幡西遺跡 |
| 3 恒武東覚遺跡 | 13 笠井中組遺跡 | 23 御殿山東遺跡 |
| 4 山ノ花遺跡 | 14 笠井上組遺跡 | 24 御殿山遺跡 |
| 5 笠井若林遺跡 | 15 ハッ面遺跡 | 25 上石原遺跡 |
| 6 笠井町広野遺跡 | 16 宮前遺跡 | 26 橋爪遺跡 |
| 7 笠井西浦遺跡 | 17 大通西遺跡 | 27 万斛遺跡 |
| 8 茶ノ木田遺跡 | 18 服織神社境内遺跡 | 28 上大瀬遺跡 |
| 9 社口遺跡 | 19 八幡南遺跡 | 29 宮東遺跡 |
| 10 平松遺跡 | 20 隋国遺跡 | 30 寺島天神遺跡 |

Fig.2 恒武西宮遺跡周辺の遺跡分布図

山の沖積跡等が挙げられる。これらは恒武・笠井地区より南側の天竜川西岸に広がる沖積平野上に所在し、この時期になると非常に多くの集落が平野上に形成されていることが認められる。

一方恒武・笠井地区においては、これまで弥生時代の遺構や遺物の検出例が乏しい状況であったが、近年の発掘調査の増加に伴い、従来古墳時代以降の遺跡と考えられていた社口遺跡から、弥生時代中期後葉の長頸壺が完形で出土した。当該期の集落形成について当地区では低調と思われていたが、弥生時代の集落の様相に関して、今後の発掘調査の事例増加を待ちつつ再検討が必要と考えられる。

古墳時代 古墳時代が始まると、沖積平野における弥生時代後期に至るこれまでの濃密な遺跡分布から一変し、大規模な集落は姿を消し、小規模な集落が造営されると考えられる。この変化に伴い、恒武・笠井地区ではこれまでにない人間の文化活動の痕跡が確認されるようになる。恒武西宮遺跡では、出土遺物から古墳時代前期（元屋敷Ⅱ式）の方形周溝墓や葬送儀礼に伴う土器集積を確認し、大量の古式土師器が出土していることから、墓域や祭祀場としての性格が色濃くなる。

古墳時代中期になると、沖積平野を見下ろす丘陵や台地上に古墳が築かれるようになり、三方原台地東縁帯には総数500基を超える古墳が中期から後期にかけて築造され、これらは三方原古墳群と総称される。一方平野部では、山ノ花遺跡・恒武西浦遺跡で確認した大溝が、特筆すべき中期の遺構として挙げられる。これらの遺構からは多くの木製祭祀遺物や石製祭祀遺物、大量の土器が出土している。これらの調査結果から、山ノ花遺跡・恒武西浦遺跡には、有力な首長層が当地を治めつつ祭祀を取り仕切ったと考えられ、祭祀儀礼の様子的一端が知られることとなった。

古墳時代後期になると、恒武・笠井地区周辺では、豊町に立地する蛭子森古墳が特筆される。この古墳は直径23.6m、高さは現状で約3mを測る円墳で、玄室は右片袖式の横穴式石室である。玄室内に残された板石の状況から組合せ式石棺が安置されていたと考えられる。鳥裝飾付須恵器などの土器のほか、装身具である金環や勾玉、大刀や鉄鏃、馬具などの鉄製遺物が出土している。多くの古墳が丘陵などに築造されている中、天竜平野に築造された数少ない古墳として注目され、被葬者は群集墳を築造した諸氏とは隔絶した存在であったと考えられる。恒武西宮遺跡ではこの時期の集落も確認されており、本遺跡を中心とした古墳時代後期の人為的文化活動が頻繁に行われていたことがうかがえる。

古代 静岡県の西部は浜松市を含め律令体制下において遠江国に属したと考えられる。恒武・笠井地区およびその周辺には龜玉・長田・磐田郡の各部がおかれ、そのうち長田郡は和銅2年（西暦709年）に長上・長下の二郡に分割され、磐田郡は後世に豊田郡が分離されるが、これらの郡のうちいずれに古代の笠井地区が属していたかは明確には分かっていない。近世と古代の群境を同一視することにはいささかの問題もあるが、概ね古代から続く郡境が踏襲されていると判断すれば、恒武・笠井地区を分断するように近世の郡境が存在する。笠井町は長上郡に、恒武・貴平・豊西町は豊田郡に属していることがわかる。近世の郡境が天竜川の流路跡であった可能性が高いことや郡境が錯綜していることから、古代においても天竜川の流路跡を郡境とし、それが錯綜していたと考えられる。この時期の遺跡として笠井若林遺跡があり、堅穴建物跡・掘立柱建物跡を集中的に確認し、集落が営まれていたことが判明している。これらは奈良時代から平安時代に属している。また、恒武西宮遺跡でのこの時期の遺構や遺物は希薄であり、笠井若林遺跡を中心に人々が住んでいたと考えられる。

中世 中世において笠井地区周辺は、羽鳥荘と美箇御厨の領域に含まれると考えられるが、これらの荘園についての情報は極めて少なく実態について明らかにできていない。この時期の遺構につ

いては比較的多く見つかっており、御殿山遺跡や笠井若林遺跡、恒武東覚遺跡などから山茶碗などが出土している。また、恒武西宮遺跡では鎌倉時代の菊花双鳥鏡が採集されている。中世後半になると笠井地区の全域で遺構や遺物が確認されている。特に、恒武西宮遺跡や笠井若林遺跡では方形に区画した屋敷地跡が見つかっている。これらの区画は現在の地境とほぼ一致することから、このころに形成された地割が現在まで継承されていることがわかる。

3 調査の方法と経過

調査地区の設定 発掘調査を実施した区画は、自動車整備センター等の範囲であり、逆コの字や長方形の形状をした、3つの調査区からなる。国家座標に即して5mグリッドを設定した。工事対象範囲の北側に位置する逆コの字の調査区を北からA区(520㎡)・B区(550㎡)、B区の南側に隣接する長方形の調査区をC区(320㎡)、そしてC区の西側に位置する最も面積の小さい調査区をD区(4.5㎡)とそれぞれ呼称した。

表土掘削 全調査区の盛土・旧耕作土および擾乱は、平爪を装着した重機(バックホー)を使用して慎重に除去した。旧耕作土の下には、後世の削平による影響の一部を受けてはいるものの遺物包含層が存在し、その直下に遺構面が現れた。但し、遺物包含層は大きく2層(Ⅱa-1層、Ⅱa-2層)が堆積していたが、Ⅱa-1層については近世以降の地形変化や土地利用の影響により遺物量が少なかったため、表土掘削時に細心の注意を払いながら掘削を行った。

遺構精査 遺構の検出作業は鋤簾及び両刃鎌を使用して行った。遺構の調査は埋土の堆積状況を確認するため、小穴は半載し、溝状遺構は横断、土坑状遺構は長軸方向に土層観察用セクションベルトを設定し、各遺構の埋没状況の把握に努めながら調査を行い、土層断面の記録を取った。出土した遺物について重要と思われるものは取上げ番号を付し、トータルステーションを使用し取上げ地点の三次元座標記録を行った。また、特に重要と思われる遺物については出土状況図を作成した。

記録の作成 遺構の平面図および断面図、前述した遺物の出土状況図は、主としてトータルステーションを用い、CAD及び写真測量ソフトを用いて図化を行った。遺構は20分の1を基本として作図し、遺物に付いては10分の1で図面を作成した。

32次調査の経過 2022年1月12日からB区・A区・D区・C区の順で調査を行った。A区とB区は一つの調査区ではあったが、残土置場を確保するため、2区に分けて調査を行った。

調査の結果、B区では出土遺物から古代の土坑群や、掘立柱建物を構成する可能性が考えられる柱穴列、中世の溝数条を確認した。2月18日にローリングタワーを使用して遺構完掘状況の全景写真撮影を行なった。21日に調査区壁面の記録を行い、これを以てB区の調査を終了した。

A区の調査は翌22日より開始した。B区と隣接する事から状況は似ており、検出した遺構は掘立柱建物と考えられる遺構を除きほぼ同じ状況であったが、調査区東側において完形及びそれに近い遺物がまとまった状態で出土する土坑を数基確認した。3月16日にローリングタワーを使用し遺構完掘状況の全景写真撮影を行なった。17日に調査区壁面の記録及び遺物取上げを行い、これを以てA区の調査を終了した。

調査終了期日が迫ってきている事から、C区とD区の調査は同時進行で行う事とし、3月11日から開始した。C区はB区と状況が似ており、古墳時代から中世の土坑群や、掘立柱建物を構成する柱穴列、溝を数条確認した。遺構数はA・B区と比較すると少なかった。D区は小土坑、溝、ピツ

3 調査の方法と経過

トを少量確認した。14日にD区の全景写真撮影を以て調査を終了し、25日にはローリングタワーを使用しC区の遺構完掘状況の全景写真撮影を行った。同日補足調査を行い、これを以て全ての現地調査を終了した。

遺物整理作業として、3月7日より遺物洗浄作業を開始し、25日に全ての洗浄作業を終了した。注記作業は3月11日より遺物の乾燥が終了したものから順じ開始し、28日に全ての遺物注記作業及び遺物の収納作業が終了した。



Fig.3 包含層掘削状況



Fig.4 遺構検出状況



Fig.5 遺構掘削状況

遺物整理・報告書作成作業 令和4年7月12日から株式会社アーキジオの整理棟にて遺物の分類・接合・実測・トレース・写真撮影を行い、同年11月まで報告書作成作業を行った。

調査参加者

現地作業 石岡 幸・影山 文子・佐藤 政治・澤田 万里・鈴木 清・須部 公夫・辻 健治・永津 良子
藤原 豊廣

整理作業 内山 敦世・新保 利恵・櫻井 裕子・嶋田 育世・畑 シノブ・藤井 美紀・藤岡 美由紀
藤森 紀子・水島 絵里・森下 朋子

4 恒武西宮遺跡の調査歴

恒武西宮遺跡では、本報告書を作成した2022年11月までに34回の調査が行われている。古墳時代～中世の遺跡が確認されているが、主に古墳時代と戦国時代に遺跡の時期が集中している。過去34回の調査の中で特筆すべきものを以下に述べる。

1～2次調査は、県道浜松環状線の建設事に伴う調査で、主に古墳時代中期～後期の竪穴建物跡、掘立柱建物跡、自然流路跡などが確認され、調査地一帯が古墳時代の集落域であることが確認された。土坑内からは滑石製模造品がまとめて出土し、一般的集落とは異なる性質の遺跡である可能性が指摘された。戦国時代においては、掘立柱建物跡や区画溝が検出されており、当該期の

屋敷地が広がる事が確認された。

3次及び6次調査は、県道浜松環状線に接続する市道拡幅工事に伴う調査で、調査箇所は東側において、古墳時代前期の方形周溝墓と土器集積が確認された。元屋敷式期の良好な資料となったが、古墳時代前期の遺構はこの2基のみであった。古墳時代中期～後期では、建物跡や溝などが確認された。自然流路内からは、完形に近い状態の須恵器や土師器などが多量に出土した。また、戦国時代の屋敷地を囲む区画溝が広範囲で確認されている。

8次調査は、市道改良工事に伴う調査で、3次調査地の隣地でも実施された。古墳時代前期の遺物が出土しており、3次調査の方形周溝墓などに関連するとみられる。また、3次調査で確認された戦国時代の区画溝の続きが検出され、屋敷地が方形の区画で区切られていたことが確認された。

18次調査は、工場建設に伴い実施された。調査地西側で、集落の中心にあたる高位面が、東側で湿地状の堆積のみられる低位面を確認した。古墳時代前期と後期の遺構・遺物が確認され、特に高位面で古墳時代前期の堅穴建物跡が検出されたことは、恒武地区の古墳時代前期の集落に関する重要な調査成果といえる。堅穴建物跡の北東からS字変（C類）が出土していることから、集落は3世紀後半に形成されたとみられる。

21次調査は、物流センター建設工事に伴い実施された。古墳時代後期を中心とする豊富な遺構

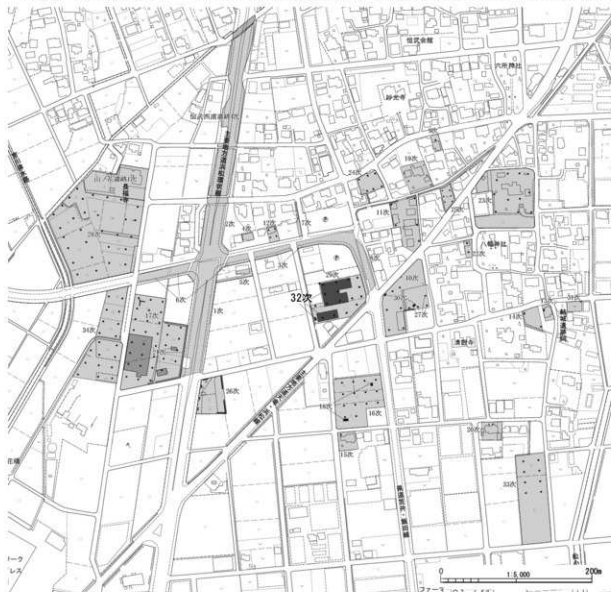


Fig.6 恒武西宮遺跡の調査履歴

と遺物が確認された。この時期の遺構として掘立柱建物のほか、過去の調査においても確認されている並行する3条の東西溝から、石製模造品・金銅製耳環・土師器・須恵器が出土した。また、これらの溝に先行する1条の南北溝から遺物の出土はなかったが、並行する土坑から有稜高坏が出土したことから古墳時代前期にまで遡る可能性が考えられる。

23次調査は、恒武西宮遺跡東側で実施された予備調査である。調査地東側の調査坑から、古墳時代前期の古式土師器がまとまって出土し、S字甕・高坏・長頸壺など複数の器種が確認できた。その他の調査坑でも、少ないながらも古式土師器が出土しており、調査地全域に古墳時代前期の遺物包含層があるとみられ、周辺に当該期の集落が存在すると考えられる。

小規模開発に伴う予備調査は遺跡内各地で実施されている。当初は古墳時代中期～後期や戦国時代の調査成果が目立っていたが、調査を重ねるごとに古墳時代前期の様相も明らかになってきている。既往の調査結果から恒武西宮遺跡の傾向として、古墳時代前期は遺跡の東側、古墳時代中期～後期は遺跡の西側に多く確認されている。奈良時代の遺構は遺跡の北側に数基確認されているが、全体的に古代の遺構・遺物は少ない。また、戦国時代においては、遺跡の全域で区画溝を中心とした遺構や遺物が確認されている。調査事例の増加に伴い恒武西宮遺跡は、遺跡の中心地は各時代で異なった場所にあることが明らかになりつつある。

Tab. 1 恒武西宮遺跡調査履歴一覧

次数	調査期間	調査面積	調査主体	主な時代	報告書	発行年
1次	1996.9～1997.3 2002.4～2002.5	3,670	(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所	古墳・奈良	『恒武西宮・西宮遺跡』 『恒武西宮遺跡Ⅲ・笠井若林遺跡Ⅱ』	2000 2005
2次	1998.10～1999.6	2,420	(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所	古墳・奈良	『恒武西宮遺跡Ⅳ・笠井若林遺跡』	2002
3次	1998.9～1999.1	1,700	浜松市教育委員会	古墳・戦国	『恒武西宮遺跡』	2002
4次	1999.5	88	浜松市教育委員会	古墳	『浜松市遺跡調査集報』	2003
5次	1999.12	100	浜松市教育委員会	古墳	『浜松市遺跡調査集報』	2003
6次	2000.10～12	1,200	浜松市教育委員会	古墳・戦国	『恒武西宮遺跡』	2002
7次	2000.11～12	40	浜松市教育委員会	戦国	『恒武西宮遺跡』	2002
8次	2007.11～12	390	(財)浜松市文化振興財団	古墳・戦国	『恒武西宮遺跡8次』	2009
9次	2007.12	4	浜松市教育委員会	古墳～中世	『浜松市遺跡調査概要』	2009
10次	2008.4	25	浜松市教育委員会	古墳・奈良	『平成21年度浜松市遺跡調査概要』	2011
11次	2010.9	20	浜松市教育委員会	古墳～鎌倉	『平成22年度浜松市遺跡調査概要』	2012
12次	2014.9	10	浜松市教育委員会	古墳・奈良	『平成26年度浜松市遺跡調査概要』	2016
13次	2015.6	5	浜松市教育委員会	古墳～中世	『平成27年度浜松市遺跡調査概要』	2017
14次	2016.3	8	浜松市教育委員会	古墳	『平成27年度浜松市遺跡調査概要』	2017
15次	2016.10	5	浜松市教育委員会	なし	『平成28年度浜松市遺跡調査概要』	2018
16次	2016.10	56	浜松市教育委員会	古墳	『平成28年度浜松市遺跡調査概要』	2018
17次	2017.3	148	浜松市教育委員会	古墳	『平成28年度浜松市遺跡調査概要』	2018
18次	2017.4	36	浜松市教育委員会	古墳	『平成29年度浜松市遺跡調査概要』	2019
19次	2017.8	12	浜松市教育委員会	古墳	『平成29年度浜松市遺跡調査概要』	2019
20次	2017.8	4	浜松市教育委員会	古墳	『平成29年度浜松市遺跡調査概要』	2019
21次	2017.11～2018.2	1,704	浜松市教育委員会	古墳	『恒武西宮遺跡6』	2018
22次	2018.5	8	浜松市教育委員会	戦国・江戸	『平成30年度浜松市遺跡調査概要』	2020
23次	2018.6	44	浜松市教育委員会	古墳・中世	『平成30年度浜松市遺跡調査概要』	2020
24次	2018.11	25	浜松市教育委員会	古墳・中世	『平成30年度浜松市遺跡調査概要』	2020
25次	2018.11	14	浜松市教育委員会	古墳・戦国	『平成30年度浜松市遺跡調査概要』	2020
26次	2019.4	53	浜松市教育委員会	古墳	『令和元年度浜松市遺跡調査概要』	2021
27次	2020.1	16	浜松市教育委員会	古墳	『令和元年度浜松市遺跡調査概要』	2021
28次	2020.2	120	浜松市教育委員会	古墳	『令和元年度浜松市遺跡調査概要』	2021
29次	2020.3	68	浜松市教育委員会	古墳	『令和元年度浜松市遺跡調査概要』	2021
30次	2020.6～7	38	浜松市教育委員会	古墳	『令和2年度浜松市遺跡調査概要』	2022
31次	2021.3	2	浜松市教育委員会	古墳	『令和2年度浜松市遺跡調査概要』	2022
32次	2022.1～3	1,400	浜松市教育委員会	古墳	本書	2022
33次	2022.2	32	浜松市教育委員会	なし	『令和3年度浜松市遺跡調査概要』	2023 刊行予定
34次	2022.3	76	浜松市教育委員会	奈良・平安	『令和3年度浜松市遺跡調査概要』	2023 刊行予定

第2章 調査成果

1 調査の概要

(1) 基本層序

今回の調査地点における基本層序は、予備調査（29次調査）及び近接する3・8次調査区の成果と整合を図った。基本層序は概ね3層に判別でき、Ⅲ層以下は厚く青灰色粘土層が堆積しており、その直下で基盤層である灰白色砂礫に至る。以下、A・B・C区西壁の基本層序を示す。

I 層

- 1 暗灰黄色粘土 現表土（水田耕作土）
- 2 暗灰黄色粘土 旧表土（旧水田耕作土）

Ⅱ a 層（包含層）

- 1 灰黄色シルト
- 2 灰黄色シルトに暗灰黄色粘土が混入
- 3 灰黄色シルトに灰黄褐色シルトが下位に混入
- 4 灰黄色シルトに灰黄褐色シルトが下位に混入（Ⅱ a-3層より黒みを帯びる）

Ⅱ b 層

- 1 灰黄色シルトに黒褐色粘質土ブロックが斑に混入（遺構検出面）
- 2 黄灰色シルトに黒褐色粘質土ブロックが斑に混入（遺構検出面）
- 3 黄灰色シルトに黒褐色粘質土ブロックが斑に混入
- 4 黒褐色シルトに灰白色シルトが斑に混入

Ⅲ層 オリーブ黒色粘土。遺構・遺物は確認されず。古墳時代以前の堆積層

Ⅱ a 層（包含層）からは、主に古墳時代から戦国時代までの遺物が出土しており、特に6世紀から7世紀にかけての遺物が顕著に見られる。遺構は、3・8・29次調査成果と同様にⅡ a 層及びⅡ b 層から掘り込まれており、下位ほど古い時代の遺構の傾向はみられるものの厳密に掘り込み面を把握することは困難であった。したがって、ある程度遺構のまとまりが確認できたⅡ b-1及びⅡ b-2層上面において遺構検出を行った。また、北から南に向かって緩やかに地形が下がっていることが確認された。

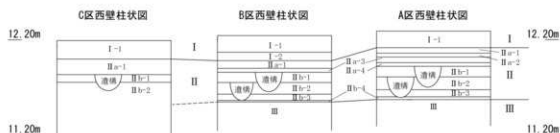


Fig.7 基本層序柱状図

(2) 検出遺構の概要

32次調査では下図のように遺構を確認した。基本層位で示したⅡb-1またはⅡb-2層の上面、標高11.8m付近にて遺構検出を行った。竹を敷設した直線状の暗渠を数条確認したが、それ以外では古墳時代から近世にかけての掘立柱建物跡1棟、溝99条、井戸1基、土坑138基、小穴139基、不明遺構4基、総計382基を確認した。掘立柱建物跡はC区で確認されたが、調査区東外へ広がるため、一部のみ確認された。井戸は素掘りで、A区西端付近で1基のみ確認された。溝についてはその多くが、東北東-西南西軸及び北北西-南南東軸を持つ事が確認された。土坑については大型のものが多く、数は少ないものの完形の遺物が出土するものもあった。小穴については各調査区で満遍なく確認されたが、中でもC区東端で、柱根痕を持つ2間のビット列を確認した。掘立柱建物と考えられるが、調査区東側外へ広がる様相を呈するのが明確な建物プランは確認出来なかった。

次に、各調査区ごとに確認した遺構について、主なものについて詳細を記す。A区及びB区については1つの地区として詳細を述べる。

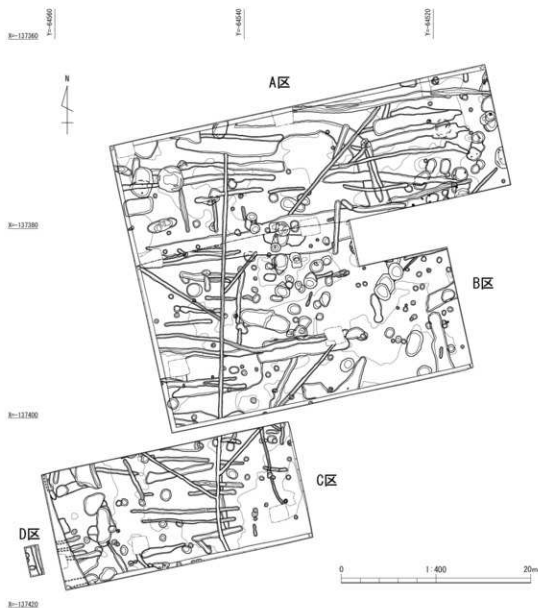


Fig. 8 調査区全体図

2 A・B区の調査

(1) 検出遺構

A・B区は開発範囲の北側に位置する。基本層序の項で述べた理由からⅡb-2層の上面で遺構検出作業を行い、主に古墳時代から戦国時代にかけての溝、井戸、土坑、小穴を確認した。以下に主要な遺構について述べる。

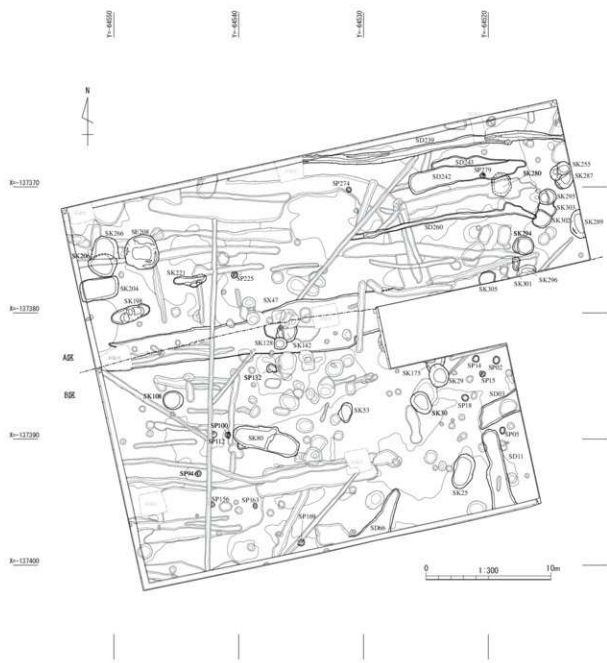


Fig.9 A・B区 遺構配置図

①溝

SD03 (Fig. 10) B区の東端に位置する。SD03は、東北東から西南西の軸を持つ溝で、 $W-21^{\circ}$ -S振れる。後述するSD11とはおおよそ直交しL字状に位置する。調査区東外へ延び、SK172を切る。残存長3.51m、最大幅1.63m、深さ0.14mを測る。断面は底面がおおよそ平坦で緩やかに立ち上がる。堆積土は1層からなり、ラミナや有機物を含んだ堆積層など恒常的に流水あるいは溜り水があったと考えられるような痕跡は確認出来なかった。出土遺物は、5世紀代の土師器の小片が出土しているがごく少量であり、混入したものと考えられる。幅広で浅い遺構の形状や埋土から、後述するSD11と同時期の15世紀代の遺構と捉えられる。また、遺構の配置や形状などからSD11とともに屋敷地を囲む区画溝と考えられる。

SD11 (Fig. 10) B区の南東側に位置する。SD11は、概ね南北方向の軸を持つ溝で、 $N-12^{\circ}$ -Wの角度で振る。前述したSD03とはおおよそ直交しL字状に位置にある。調査区南外へ延び、SP08、SK09、SP12、SD174を切る。残存長6.73m、幅1.65m、深さ0.22mを測る。断面は底面が平坦に近く緩やかに立ち上がる。堆積土は3層からなり、ラミナや有機物を含んだ堆積層など恒常的に流水あるいは溜り水があったと考えられる痕跡は確認出来なかった。出土遺物は5～7世紀代の須恵器片、土師器片が少量混じるが、小片のため図化できたものはないが、土師器内耳鍋体部片などの15世紀代の遺物が主体的に出土している。幅広で浅い遺構の形状、毎度や出土遺物から、SD11は15世紀の遺構と考えられる。また、遺構の配置や形状などからSD03と共に屋敷地を囲む区画溝と考えられる。

SD66 (Fig. 11) B区の南端中央付近に位置する。SD66は、北北東から南南西の軸を持つ溝で、 $N-26^{\circ}$ -E振れる。調査区南外へ延びるがC区では確認出来なかった。また南端西側はSK68に切られる。残存長3.94m、最大幅2.00m、深さ0.22mを測る。断面は底面がやや丸みを帯び緩やかに立ち上がる。堆積土は北側は2層から、南側は3層からなり、ラミナや有機物を含んだ堆積層など恒常的に流水あついは溜り水があったと考えられる痕跡は確認出来なかった。出土遺物は、口縁部と体部の一部が欠損した7世紀代の湖西産須恵器の平瓶 (Fig. 26-2) と、同じく7世紀代の全形のうかがえる湖西産須恵器の半球形坏部高坏 (Fig. 26-3) のほか、1層から5～6世紀代の土師器の高坏や甍片などが出土している。これらのことから、SD66は7世紀代の溝と考えられるが、本溝の詳細な性格は不明である。ただし、須恵器の平瓶と半球形坏部高坏はどちらも口縁部を上にした状態で出土していることから、流れ込みにより混入したものと考える難く、人為的に配されたものと考えられる。

SD242 (Fig. 11) A区の北東側に位置する。SD242は、ほぼ東西方向の軸を持つ溝で、 $W-10^{\circ}$ -Sの角度で振る。長さ9.46m、幅1.54m、深さ0.06mを測る。断面は底面が平坦に近く、緩やかに立ち上がる。堆積土は1層からなり、SD241、SD243、SP279、SK280、SD281を切っている。溝の深さが浅いことから、溝の上部は後世の地形改変の影響により、大部分が削平されたものと考えられる。出土遺物は5世紀代の土師器の高坏片と溝中央付近の北端からは、祭祀行為に使用されたと考えられる滑石製の勾玉型石製品 (Fig. 26-19) がある。小片のため図化できたものはないが、く字形口縁内耳鍋片などの戦国時代の遺物が主体的に出土していることから、5世紀代の遺物は混入したものと考えられる。遺構の形状、堆積土や出土遺物から、SD242はSD243との切り合い関係からやや新しいものの、15～16世紀の溝であると考えられる。また後述するSD239の南に近接することから、道路に伴う遺構の可能性が考えられる。

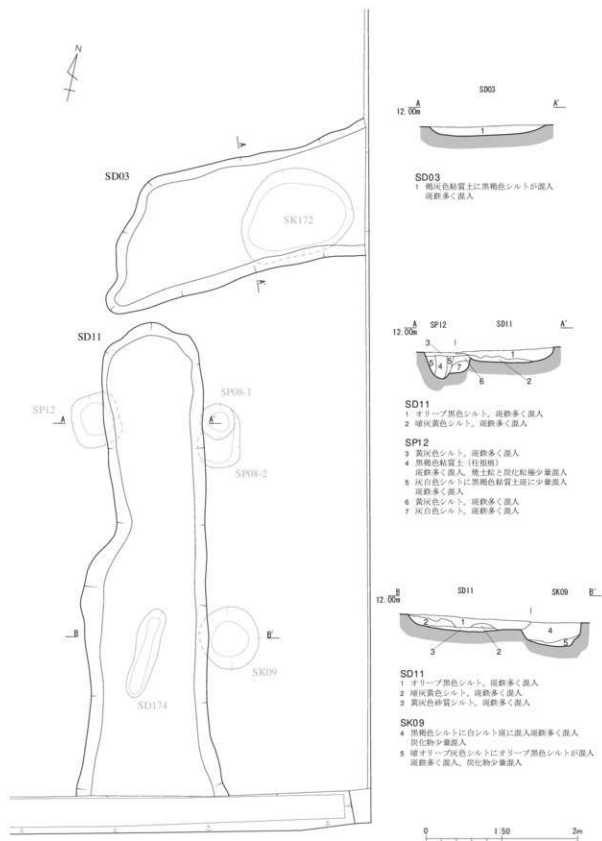


Fig. 10 SD03・11 詳細図

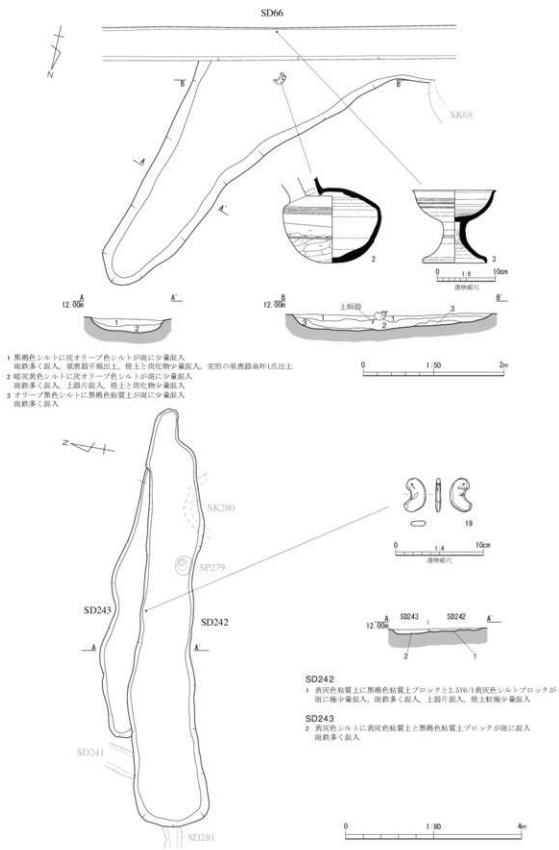


Fig.11 SD66, 242・243 詳細図

SD243 (Fig. 11) A区の北東側に位置する。SD243は、ほぼ東西方向の軸を持つ溝で、 $W-4^{\circ}-S$ の角度で振る。残存長6.13m、残存最大幅0.78m、深さ0.10mを測る。断面は底面が平坦に近く、緩やかに立ち上がる。堆積土は1層からなり、南側をSD242に切られる。溝の深さが浅いことから、溝の上部は後世の地形改変の影響により、大部分が削平されたものと考えられる。出土遺物は削平の影響を受けていたことからほとんど確認できなかったが、ごく少量ながら戦国時代のく字形口縁内耳鍋の小片が出土している。遺構の形状、堆積土、出土遺物及びSD242との切り合い関係から、SD243はSD242よりやや古い時期ではあるが、概ね15～16世紀の遺構と考えられる。

SD239 (Fig. 12) A区の北東端に位置する。SD239は、ほぼ東西方向の軸を持つ溝で、 $W-7^{\circ}-S$ の角度で振る。調査区東及び北外へ広がるため全容は不明であるが、残存長20.96m、最大幅0.90m、深さ0.39mを測る。断面は底面が丸みを帯び船底状を呈する。溝底面の比高差は東西間ではあまり無いが、東側で一段深くなる範囲が認められる。堆積土は西側では3層から、東側で5層からなり、SD106(竹暗渠)に切れ、SD241、SK250とSK251を切る。ラミナや有機物を含んだ堆積層など恒常的に流水あるいは溜り水があったと考えられる痕跡は確認出来なかった。西端は調査区北側外へ緩やかに北へ振りながら延び、東端は調査区東外へやや南へ振りながら延びる。出土遺物は、5世紀の土師器の高坏片、6～8世紀代の須恵器の坏身底部片、坏蓋のつまみ片、高坏片、甕片や土師器の甕片、小型鍋片、12世紀の山茶碗片などがあるが、戦国時代のく字形内耳鍋片(Fig. 26-17)や内耳鍋片(Fig. 26-18)、天目茶碗の小片など当該期の遺物が多く出土する事から、15～16世紀の遺構と考えられる。また、遺構の形状及び検出位置と溝の延伸方向から、隣接して行われた恒武西宮遺跡3次調査及び8次調査において確認されたSD32及びSD05と同一遺構とみられ、SD239は道路側溝の可能性が高いと考えられる。

SD260 (Fig. 13) A区の東側に位置する。SD260は、ほぼ東西方向の軸を持つ溝で、 $W-9^{\circ}-S$ の角度で振る。残存長14.83m、最大幅0.66m、深さ0.23mを測る。断面は底面がやや丸みを帯び船底状を呈する。堆積土は1層からなり、ラミナなどの流水の痕跡は確認出来なかった。SD106(竹暗渠)に切れ、SX229、SD257、SD275、SK302を切る。西端はSD106に切られるために途切れているが、SD260の延伸方向から、西に位置するSD207やSD216とは一連の溝の可能性が考えられる。溝の東端は北側に膨らんだ後、やや南に曲がっている。出土遺物は5世紀の土師器の高坏片や溝東端付近からは石製丸玉(Fig. 26-20)が出土しているが、7～8世紀の須恵器の坏蓋片や土師器片などが主体的に出土していることから、7～8世紀の溝と考えられる。なお、前述したSD239とは、溝間5.70m南の距離に位置し、形状や延伸方向がほぼ並行するなど酷似する点があり、15～16世紀の区画溝あるいは道路側溝の可能性も示唆されるが、出土遺物の年代に時期差があることから別遺構と捉えられる。

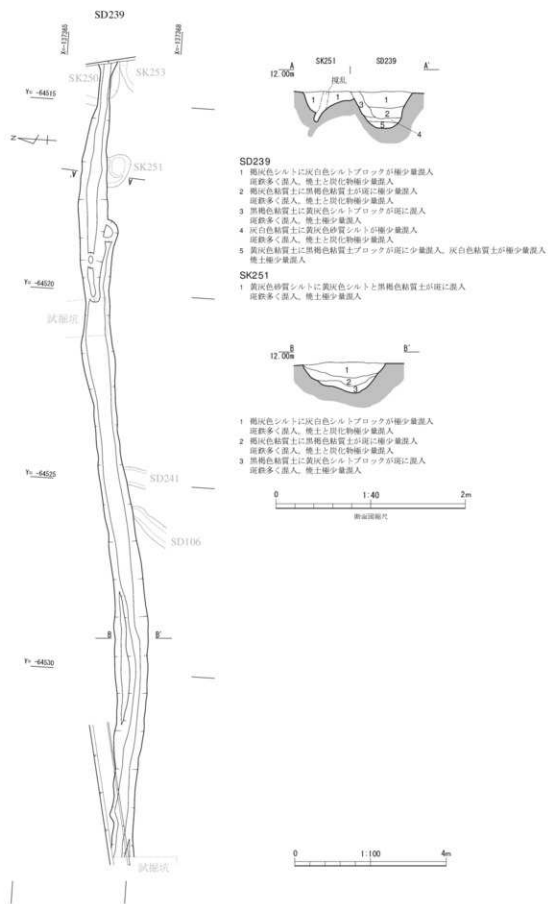


Fig. 12 SD239 詳細図

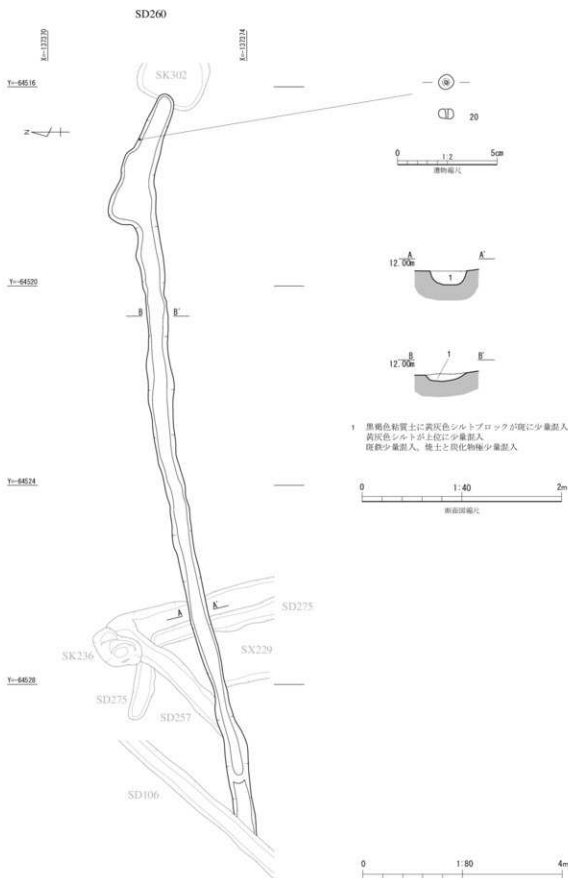


Fig. 13 SD260 詳細図

②井戸

SE208 (Fig. 14) A区の西端側に位置する。平面形態は円形を呈し、直径2.77m、深さ1.06mを測る。全遺構の中で最も深く掘られた遺構で、井戸枠や曲物を持たない素掘りの井戸である。断面は逆台形を呈し、堆積土は17層に分けられる。土層堆積状況から一度埋没した後に再度掘削して使用し、その後人為的に埋められたものと考えられる(1~12層)。SD207、213、216、217、SK214を切る。調査中に湧水しなかったことから、水源が枯れたことで廃棄したのと考えられる。出土遺物は、8世紀代の須恵器の皿、有台坏身、蓋、つまみ蓋、土師器の皿、10世紀代の灰釉陶器の甕及び土錘が出土している。このことから一度埋没した時期は8世紀で、最終的に廃棄した時期は10世紀と考えられる。また出土遺物からSE208廃棄の際には、祭祀儀礼は行わなかったと推察される。

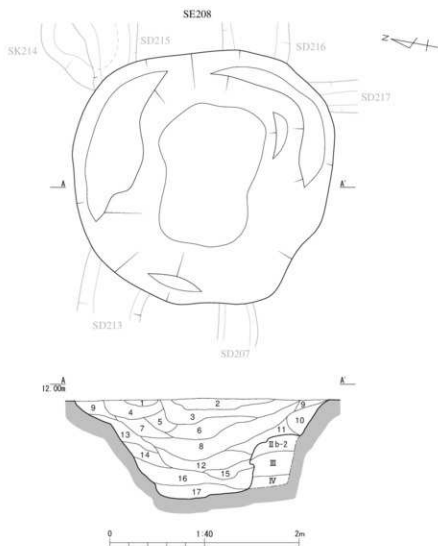
③土坑

SK25 (Fig. 15) B区の東端に位置する。平面形態は楕円形を呈し、北北東-南南西方向に軸を持つ。長軸2.81m、短軸1.53m、深さ0.40mを測る。断面は底面に平坦面をもち、逆台形状に緩やかに立ち上がる。堆積土は3層からなる。出土遺物は主に2層より、6~7世紀代の須恵器坏身、土師器甕、高坏、須恵器を模倣した坏蓋、カゴメ痕が付いた甕などである。平面形態から当初は土坑墓の可能性を想定したが、土層の堆積状況や出土遺物から判断し、6~7世紀の廃棄土坑と考えられる。

SK29 (Fig. 16) B区の北東側に位置する。平面形態は円形を呈し、おおよそ南北方向に軸を持つ。長軸1.83m、短軸1.55m、深さ0.80mを測る。断面の形状は逆台形を呈し、堆積土は7層からなる。東側の一部をSD170(竹暗渠)に切られているが、SK175、176を切る。隣接して位置する同規模の土坑、SK30、175、176の中では、掘削深度が最も深い。遺物は、5~7世紀の須恵器の坏身、高坏、土師器の甕、小型甕などが出土しており、破片では有るもの出土量は多い(Fig. 27-27~29)。床面から出土した土師器の甕の底部(Fig. 27-29)が7世紀代の遺物であることから、SK29は7世紀の廃棄土坑と考えられる。

SK30 (Fig. 16) B区の北東側に位置する。平面形態は楕円形を呈し、北西-南東方向に軸を持つ。長軸1.89m、短軸1.45m、深さ0.49mを測る。断面は逆台形を呈し、堆積土は3層からなる。SD170(竹暗渠)に切れ、SK176を切る。出土遺物は、須恵器の坏蓋(Fig. 27-30)、甕、土師器の高坏、甕把手など破片のみではあるが、出土量は多い。遺物の年代は、5~7世紀代のものであるが、主体となるのは7世紀前半である。1点のみ戦国期の内耳鍋片が出土しているが、1層からの出土であることから後世に混入したのと考えられる。出土した遺物から、SK30は7世紀前半の廃棄土坑と考えられる。

SK53 (Fig. 16) B区の中央やや東寄りに位置する。平面形態はやや不整形な楕円形を呈し、おおよそ南北方向に軸を持つ。長軸1.58m、短軸1.07m、深さ0.28mを測る。断面は概ね逆台形を呈するが、北側は緩やかに傾斜しながら南に向かって下がり、南側は垂直気味に立ち上がる。堆積土は4層からなり、SK54に切られる。中央には稲刈り後の藁を干す際の「はさ穴」が確認できる。出土遺物は、5~6世紀の土師器の甕口縁部片やカゴメ痕が付いた土師器の甕底部片が出土している(Fig. 27-33・34)が主体となるのは6世紀代の遺物である。SK53は出土遺物の年代から6世紀の廃棄土坑と考えられる。



- 1 黄灰色シルトに黒褐色粘質土ブロックが面に混入
底砂多く混入。焼土と炭化物少量混入。
- 2 黄灰色シルトに黒褐色粘質土ブロック、黒褐色粘質土ブロックと黄灰色シルトがそれぞれ面に少量混入
底砂多く混入。焼土と炭化物少量混入。
- 3 黄灰色シルトに黒褐色粘質土ブロックと黄灰色シルトブロックが面に混入
底砂多く混入。焼土と炭化物少量混入。
- 4 黄灰色粘質土に黒褐色粘質土ブロックが面に多く混入
底砂多く混入。焼土と炭化物少量混入。
- 5 黒褐色粘質土に灰白色粘質土が混入
底砂多く混入。焼土と炭化物少量混入。
- 6 灰白色シルトに灰白色粘質土ブロックと黒褐色粘質土ブロックが面に少量混入
底砂多く混入。焼土と炭化物少量混入。
- 7 灰白色粘質土に黒褐色粘質土ブロックが面に多く混入
底砂多く混入。焼土と炭化物少量混入。
- 8 灰白色シルトに灰白色粘質土ブロックが面に少量混入。黒褐色粘質土ブロックが面に多く混入
底砂多く混入。土器片混入。焼土と炭化物少量混入。
- 9 黄灰色シルトに黄灰色シルトと黒褐色シルトが面に極少量混入
底砂多く混入。炭化物少量混入。
- 10 灰白色シルトに黒褐色粘質土が面に混入
底砂多く混入。炭化物少量混入。
- 11 黄褐色シルトに、灰白色シルトが面に少量混入
底砂多く混入。
- 12 灰白色シルトに、黄褐色シルトと黒褐色粘質土が面に混入。黒褐色粘質土ブロックが極少量混入
底砂多く混入。炭化物少量混入。
- 13 黄灰色シルトに黄褐色シルトが面に混入
底砂多く混入。炭化物少量混入。
- 14 黒褐色粘質土に灰白色砂質シルトが面に混入。黒褐色粘質土ブロックが極少量混入
底砂多く混入。炭化物少量混入。
- 15 黒褐色粘質土に灰白色砂質シルトが面に混入。黒褐色粘質土ブロックが極少量混入
底砂多く混入。
- 16 黄灰色砂質シルトに黒褐色粘質土ブロックが面に極少量混入
底砂多く混入。
- 17 灰白色砂質シルトに黒色土ブロックが面に混入
底砂多く混入。

Fig. 14 SE208 詳細図

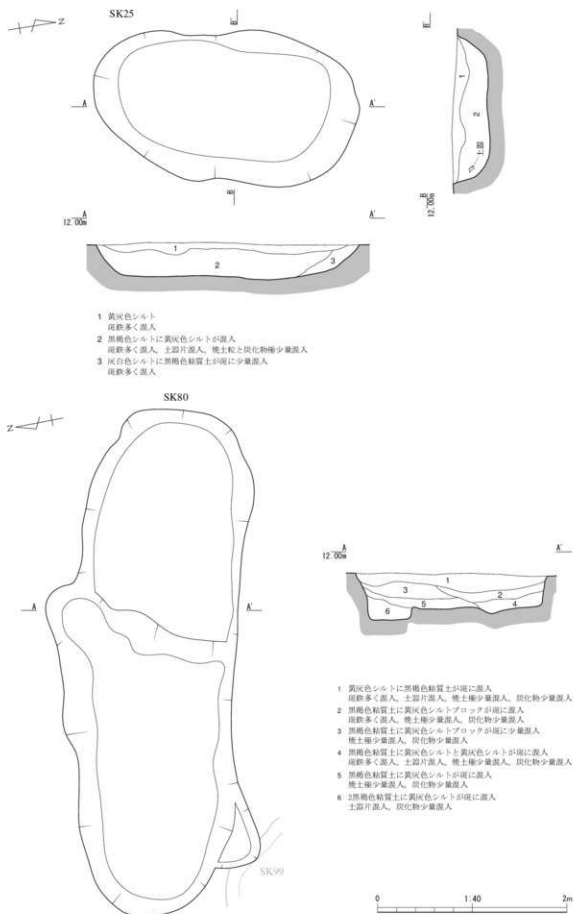


Fig. 15 SK25, 80 詳細図

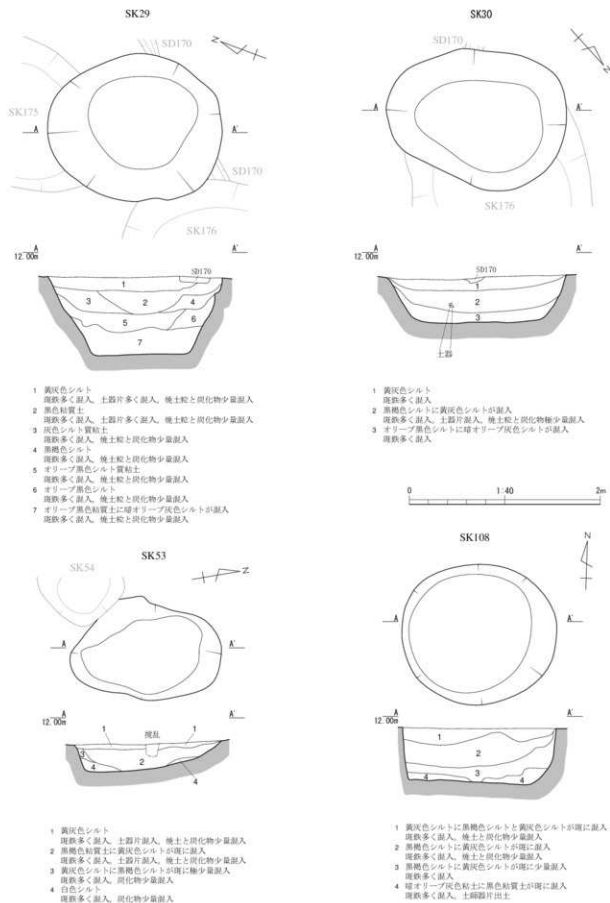


Fig. 16 SK29, 30, 53, 108 詳細図

SK80 (Fig. 15) B区の中央やや西寄りに位置する。平面形態はやや不整で細長い隅丸方形を呈し、西北西-東南東方向に軸を持つ。長軸5.37m、短軸2.02m、深さ0.50mを測る。断面はおおよそ逆台形を呈する。堆積土は6層からなり、中央付近から西側は東側と比べ0.30m程度低くなっており、SK99を切る。出土遺物は破片が中心ではあるが、全ての遺構の中で最も多い。須恵器の無蓋高坏、坏身、坏蓋、壺口縁部、土師器の駿東型坏底部、小型甕、壺、鉢、甌把手、叩石など5～7世紀の遺物が多岐に渡って出土している (Fig. 27-38～46)。主体となる遺物の年代がおおよそ7世紀代を示す事から、SK80は7世紀代の廃棄土坑と考えられる。今回の調査で確認した土坑の中で最も大きな土坑であるが、掘削当初は溝と想定していた事から、長軸方向での土層観察ベルトを設定しなかったため、本来は2つの土坑(2・4層と3・5・6層)が切り合っていた可能性が考えられる。

SK108 (Fig. 16) B区の北西側に位置する。平面形態はほぼ円形を呈し、おおよそ東西方向に軸を持つ。長軸1.03m、短軸0.93m、深さ0.57mを測る。断面の形状は、底面が平底であり、方形を呈する。西側は概ね垂直に立ち上がるが、東側はやや膨らみながら立ち上がる。堆積土は4層からなる。出土遺物は、須恵器の高坏蓋、坏身、有台坏身、土師器の甕、壺、高坏の破片が出土している。床面から出土した土師器の甕底部 (Fig. 27-48) などが7世紀代の遺物であることから、SK108は7世紀の廃棄土坑と考えられる。

SK128 (Fig. 17) B区の中央北端に位置する。平面形態はほぼ円形を呈し、おおよそ東西方向に軸を持つ。長軸1.03m、短軸0.93m、深さ0.57mを測る。断面の形状は、底面がやや丸みを帯びた船底状を呈し、堆積土は3層からなる。北側はSD127とSK142を切る。出土遺物は、6世紀の須恵器の坏蓋、5～7世紀の土師器の甕、壺、高坏の破片が出土している。最下層の3層内からは、口縁部を南に向けた横位の状態で、7世紀の土師器の壺 (Fig. 27-51) が完形で1点出土していることから、SK128は7世紀代の遺構と考えられる。この完形の土師器壺は、出土状況から人為的に配置された上で埋め戻されたと推測される。この様な出土状況は全遺構中SK128だけであり、祭祀的な性格が考えられるが、その他に祭祀をうかがわせる遺物が出土していない事から推測の域を出ない。また、壺の内部に堆積した土を丁寧に水洗いしたが、骨を含む有機物や玉類などは出土しなかった。

SK142 (Fig. 17) B区の中央北端に位置する。平面形態はおおよそ楕円形を呈し、東西方向に軸を持つ。長軸は残存1.84m、短軸は残存1.56m、深さ0.43mを測る。断面は床面は平坦で、北側は一段高くなるが、SK126とSK128に切られるため、正確な断面形状は不明である。また、西側が最も深く掘り込まれている。SD127を切る。出土遺物は、5～7世紀の土師器の甕、高坏、坏の破片のほか、7世紀の渥美式製塩土器片が1点出土している (Fig. 27-54)。SK128に切られている事から、6～7世紀の廃棄土坑と考えられる。

SK175 (Fig. 17) B区の北東端に位置する。平面形態はSK28とSK29に切られており、また北側は調査区外へ広がるため詳細は不明だが、検出面での形状は、半円形を呈し、東西方向に軸を持つ。残存長軸1.47m、短軸1.08m、深さ0.39mを測る。断面は逆台形を呈するが、東側は緩やかに立ち上がる。堆積土は4層からなる。出土遺物は少量ではあるものの、6世紀代の須恵器の坏蓋や土師器の甕片が出土している。出土遺物とSK29に切られている事から、SK175は6世紀の廃棄土坑と捉えられる。

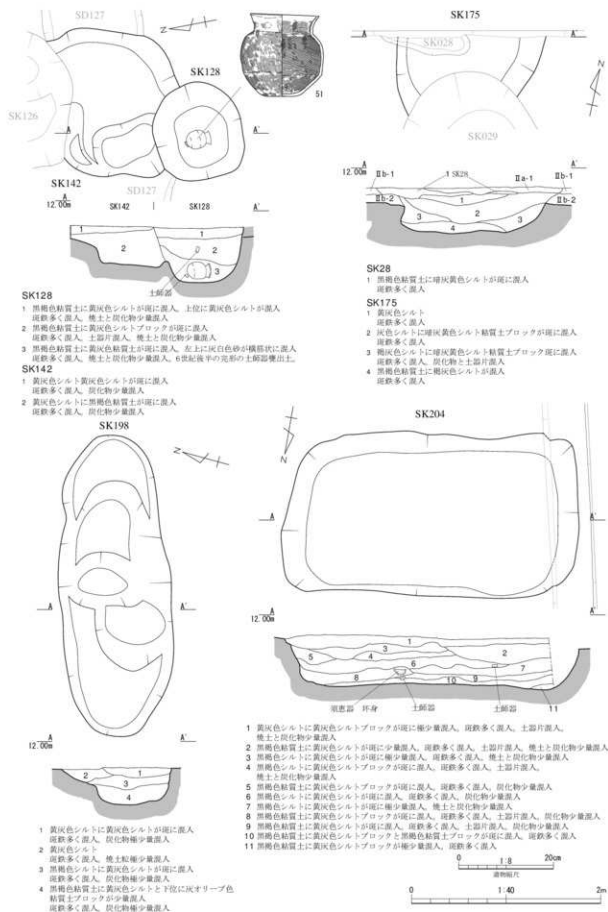


Fig. 17 SK128・142, 175, 198, 204詳細図

SK198 (Fig. 17) A区の南西端に位置する。平面形態は縦長の楕円形を呈し、西南西-東北東方向に軸を持つ。長軸3.18m、短軸1.19m、深さ0.38mを測る。断面は底面が丸みを帯びた船底状を呈し、中央付近が最も深く掘り込まれている。堆積土は4層からなる。出土遺物は、7世紀の土師器の甕及び坏の小破片が出土しているのみで、出土量が少ない事から詳細は不明であるが、埋土の特徴などから6~7世紀代の遺構と捉えられる。

SK204 (Fig. 17) A区の西端に位置する。平面形態は隅丸方形を呈し、西南西-東北東方向に軸を持つ。長軸3.15m、短軸1.73m、深さ0.58mを測る。断面は逆台形を呈するが、中央付近が丸く膨らみ、東西端が深くなる。堆積土は11層からなる。出土遺物は多く、5世紀の石製有孔円盤片 (Fig. 28-64)、土師器の駿東型壺、6~7世紀の須恵器の坏身、坏蓋、土師器の甕、壺、鉢、高盤型土製品の脚部、灰軸陶器 (0-53型式)、14世紀の常滑片口鉢など多岐に渡り出土している (Fig. 28-57~64)。遺物の主たる年代はおおよそ7世紀と考えられ、その時期以外の遺物に付いては、混入したものと考えられる。今回の調査で確認した遺構の中で隅丸方形を呈するものはSK204のみである。特殊な平面形状から、当初、中世の土坑墓の可能性も考えたが、墓と断定出来るような土層堆積ではなく、またそれに関する遺物も出土していない事から、7世紀の廃棄土坑と捉えておく。

SK206 (Fig. 18) A区の西端に位置する。平面形態は卵型を呈し、東西方向に軸を持つ。長軸2.32m、短軸1.83m、深さ0.43mを測る。断面は底面がやや丸みを帯びる船底状を呈する。堆積土は8層からなる。中央付近をSD207に切られ、北側のSK266を切る。土層の堆積状況から、一度埋めた後 (7・8層) 改めて掘削した可能性が考えられる (3~6層)。あるいはSK206の中で、もう1基土坑の切り合いが存在する可能性が考えられる。出土遺物は5世紀から戦国期までと多岐に渡り、須恵器と土師器の小破片が多数出土している。その中でも須恵器の高坏脚部、把手付鉢、坏蓋、長頸壺口頸部、無台長頸壺、土師器の甕、高盤型土製品、16世紀代の灰軸緑釉皿などが挙げられる (Fig. 28-65~69)。ただし、遺構検出時にSK266との切り合いが確認出来なかったため、一つの遺構として掘削し遺物を取り上げたことから、遺物はSK266と一緒に一括で取上げている。遺物の主たる年代はおおよそ7世紀で、長頸壺口頸部と無台長頸壺 (Fig. 28-66・67) が床面から出土していることから、SK206は7世紀の廃棄土坑と考えられる。

SK266 (Fig. 18) A区の西端に位置する。平面形態は楕円形を呈し、南北方向に軸を持つ。残存長軸2.20m、短軸2.06m、深さ0.38mを測る。断面は底面が丸みを帯びる船底状を呈する。堆積土は3層からなり、水平堆積をしている。南側に近代以降の杭痕が確認出来る。SK206に切られ、SD207, SD209, SD213を切る。出土遺物はSK206で述べた通り、SK206と一緒に一括で取り上げている事から詳細については不明であると言わざるをえないが、調査時の状況ではSK206と比較して小破片が多く出土している。切り合い関係からSK206より若干古いと考えられるが、7世紀頃の遺構と捉えておく。

SK221 (Fig. 18) A区の西側に位置する。平面形態は細長く、やや南側に膨らむ不整形を呈し、東西方向に軸を持つ。長軸2.63m、短軸0.90m、深さ0.30mを測る。断面は底面がやや丸みを帯びる船底状を呈する。東側はSD226に切られており、南側はSD220に切られるが一段高くなっている。堆積土は5層からなり、土層堆積状況から人為的に埋められたものと考えられる。出土遺物は、5世紀代の須恵器の高坏、短脚高坏坏部 (Fig. 28-70)、5世紀後半~6世紀の完形の土師器の小型鉢 (Fig. 28-71)、甕片、高坏片などである。土層堆積状況や出土遺物から、6世紀代の廃棄土坑と考

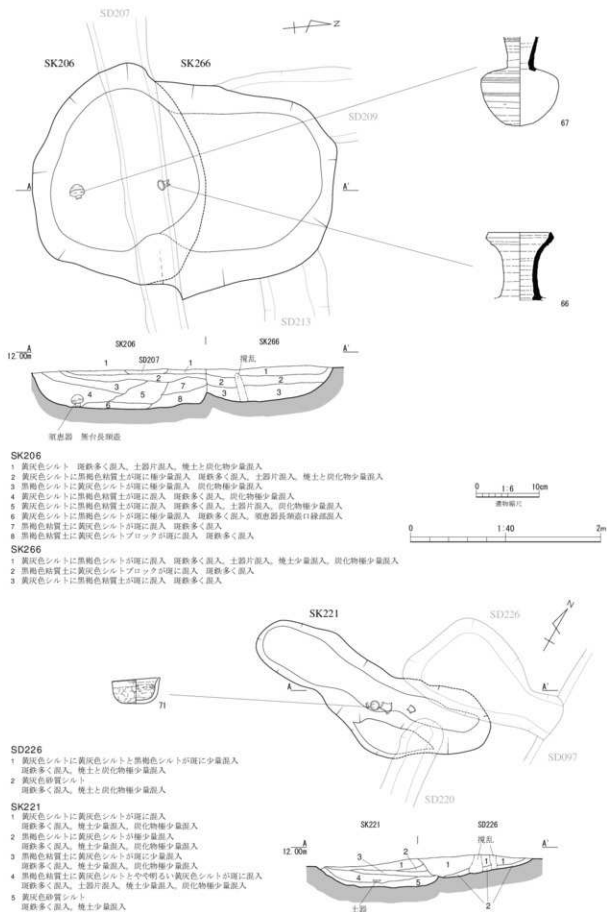


Fig.18 SK206・266, 221詳細図

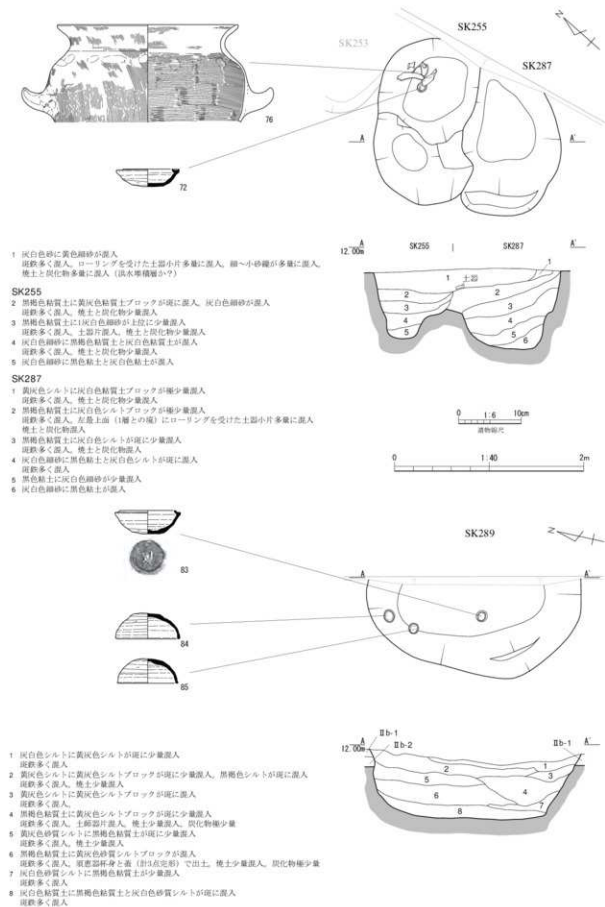


Fig.19 SK255・287, 289詳細図

えられる。

SK255 (Fig. 19) A区の東端に位置する。平面形態は楕円形を呈し、北東-南西方向に軸を持つ。長軸1.77m、短軸0.92m、深さ0.71mを測るが、北東側の一部は調査区外へ広がる。断面は底面が丸みを帯びる船底状を呈し、南東側はSK287を切っており一段高くなっている。また北東側が最も深く、南西側より0.13m深い。堆積土は4層で水平堆積しているが、最上層の1層は洪水により流されてきた堆積層と考えられ、ローリングを受けた遺物小破片が多量に混入している。出土遺物は、7世紀の須恵器の坏身、坏蓋、高坏脚部、土師器の甕、甕、把手付鍋、大型鍋、甌、桃核1点などである (Fig. 28-72~77)。ただし、遺構検出時にSK287との切り合いが確認出来なかったため、一つの遺構として掘削し遺物を取り上げたことから、遺物はSK287と一括で取上げている。土層堆積状況や出土遺物から、7世紀の廃棄土坑と考えられる。

SK280 (Fig. 20) A区の東側に位置する。平面形態はやや不整な楕円形を呈し、おおよそ南北方向に軸を持つ。長軸1.93m、短軸1.54m、深さ0.31mを測る。断面は底面がやや丸みを帯び船底状を呈する。SD242とSD250に切られる。堆積土は5層からなり、堆積状況から5層が自然堆積した後、人為的に埋められたと考えられる。出土遺物は底面から、6世紀の土師器の坏と高坏 (Fig. 28-79・80) や、直口壺体部片が出土している。他に7世紀の須恵器の広口長頸壺や土師器の台付甕口縁部 (Fig. 28-81) などが上層から出土している。土層堆積状況と出土遺物から、SK280は6世紀前半に開削され、7世紀に埋没したものと考えられる。廃棄土坑と考えられるが、出土遺物量がそれほど多くはない事から推測の域は出ない。

SK287 (Fig. 19) A区の東端に位置する。平面形態は北側をSK255に切られており、また北東側は調査区外へ広がるため本来の形状は不明であるが、検出面での形状は楕円形を呈し、北東-南西方向に軸を持つ。残存長軸1.46m、残存短軸1.05m、深さ0.85mを測る。断面は底面がやや丸みを帯びる船底状を呈し、SK255側と南東側が一段高くなる。堆積土は6層からなり、最上層1層は洪水により流されてきた堆積層と考えられ、ローリングを受けた遺物小破片が多量に混入している。また各層は、南から北へ向かって傾斜して堆積している。出土遺物は、SK255で述べた通り、SK255と一括で取り上げている事から詳細に付いては不明であるが、調査時の状況では1層と2層の境界から小破片が多く出土している。土層の堆積状況からSK255より若干古い、7世紀頃の廃棄土坑と考えられる。

SK289 (Fig. 19) A区の南東端に位置する。調査区東外へ広がるため本来の形状は不明であるが、現状平面形態は半円形を呈し、おおよそ南北方向に軸を持つ。長軸2.26m、残存短軸1.00m、深さ0.75mを測る。断面は底面がやや丸みを帯びているがおおよそ平坦であり、北側はやや膨らみながら立ち上がり、南側は直線的に広がりながら立ち上がる。堆積土は8層からなり、5~8層までは砂質シルトと粘質土が交互に水平堆積する。なお、土層堆積状況から3層及び4層については、調査区東外にある別遺構の堆積土の可能性が考えられる。出土遺物は、7世紀中頃の須恵器の坏身1点と坏蓋2点 (Fig. 28-83~85) が完形で出土している。坏身は正位置の状態で、坏蓋は裏返した状態でそれぞれ6層から出土しており、人為的に配置された可能性が考えられる。SK289はからは祭祀を思わせる遺物が出土していない事から推測の域を出ないが、7世紀の土坑で祭祀的な性格が考えられる。

SK294 (Fig. 20) A区の南東側に位置する。平面形態は円形を呈し、東西方向に軸を持つ。長軸1.70m、短軸1.41m、深さ0.34mを測る。断面は逆台形を呈するが、中央付近が丸く膨らみ、南北

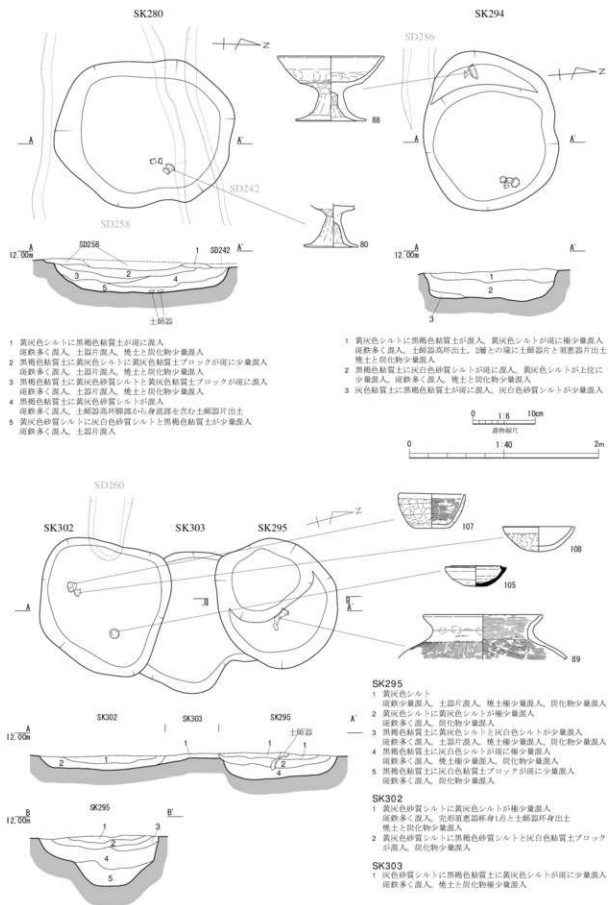


Fig.20 SK280, 294, 295・302・303 詳細図

端がやや深くなる。また西側は0.20m程高くなりテラスを持つ。堆積土は3層からなり、3層が自然堆積した後人為的に埋められたと考えられる。出土遺物は、5世紀後半の土師器の高坏 (Fig. 29-88)、6世紀の須恵器の坏蓋片、土師器の高坏片、有穿壺片、7世紀前半の須恵器の坏身 (Fig. 29-87) などが1層と2層の境界付近から出土している。SK294の用途は不明であるが、出土遺物の年代から7世紀前半頃の遺構と考えられる。

SK295 (Fig. 20) A区の東端に位置する。平面形態は円形を呈し、北西-南東方向に軸を持つ。長軸1.44m、短軸1.24m、深さ0.57mを測る。断面は、底面はやや丸みを帯びた船底状を呈し、東側は0.30m程高くなりテラスを持つ。堆積土は5層からなり、4~5層を人為的に埋めた後、1~3層は自然堆積したと考えられる。SK303を切る。出土遺物は、7世紀の須恵器の坏身、高坏、土師器の壺口縁部 (Fig. 29-89)、甕片、多数の坏片などが出土している。土層の堆積状況と遺物の出土状況から、7世紀の廃棄土坑と考えられる。

SK296 (Fig. 21) A区の南東側に位置する。平面形態は北側をSD297に、西側をSK298とSK299に切れ、SK301を切る。南側は調査区南外へ広がるため、現状不整形を呈し、軸方向は現状東北東-西南西ではあるが、北北東-南南西の可能性もある。長軸2.81m、残存短軸1.10m、深さ0.42mを測るが、断面図に掛かっていない南東側では深さ0.70mを測る。堆積土は5層からなるが、1~2層は洪水による堆積層の可能性が高いことから、本来のSK296はこの南東側の深い範囲のみの可能性が考えられる。出土遺物は1層からローリングを受けた7世紀の須恵器や土師器の小破片が多量に出土している中で、3層内から同じく7世紀代の須恵器の坏身、坏蓋、広口壺、暗文が施された土師器の坏身、台付甕、鉢、砥石などが出土している (Fig. 29-90~99)。4層以下から遺物が出土していない。SK296の用途に付いては不明であるが、周辺の土坑の様相から7世紀頃の遺構と考えられる。

SK301 (Fig. 21) A区の南東側に位置する。平面形態は縦長の楕円形を呈し、南北方向に軸を持つ。長軸1.05m、短軸0.49m、深さ0.48mを測る。断面は船底状を呈する。SK296とSD297に切られる。堆積土は4層からなり、それぞれ水平堆積をしている。出土遺物は1層からのみで、7世紀の土師器の台付甕体部と台部が出土している (Fig. 29-103・104)。しかしこれらの遺物は完形ではなく、また出土した高さがSK296の2~3層に位置する事から、洪水によって流されてきたものと考えられる。SK301の用途に付いては不明であるが、SK296との切り合い関係から7世紀の遺構と見られ、周辺の土坑の様相から廃棄土坑の可能性が推測される。

SK302 (Fig. 20) A区の東端に位置する。平面形態は隅丸方形を呈し、北東-南西方向に軸を持つ。長軸1.35m、短軸1.33m、深さ0.15mを測る。断面は底面はほぼ平坦で緩やかに立ち上がる。SK260に切れ、SK303を切る。堆積土は2層からなるが、本来の土坑上部は後世の地形改変の影響で削平されたと考えられる。出土遺物は、5~6世紀の土師器坏身、7世紀前半の須恵器の坏身、7世紀の土師器の坏身、鉢 (Fig. 29-105~108) などが出土している。土層の堆積状況と遺物の出土状況から、7世紀の廃棄土坑と考えられる。

SK303 (Fig. 20) A区の東端に位置する。SK295とSK302に切られているため平面形態は現状不整形である。残存長軸1.50m、残存短軸1.00m、深さ0.12mを測る。堆積土は1層のみで、SK302と同様、土坑本来の上部は削平されたものと考えられる。遺物が確認されず、残存部も少ないが、SK303を切るSK295及びSK302と埋土の状況が酷似していることから、同時期の7世紀の遺構と捉えられる。

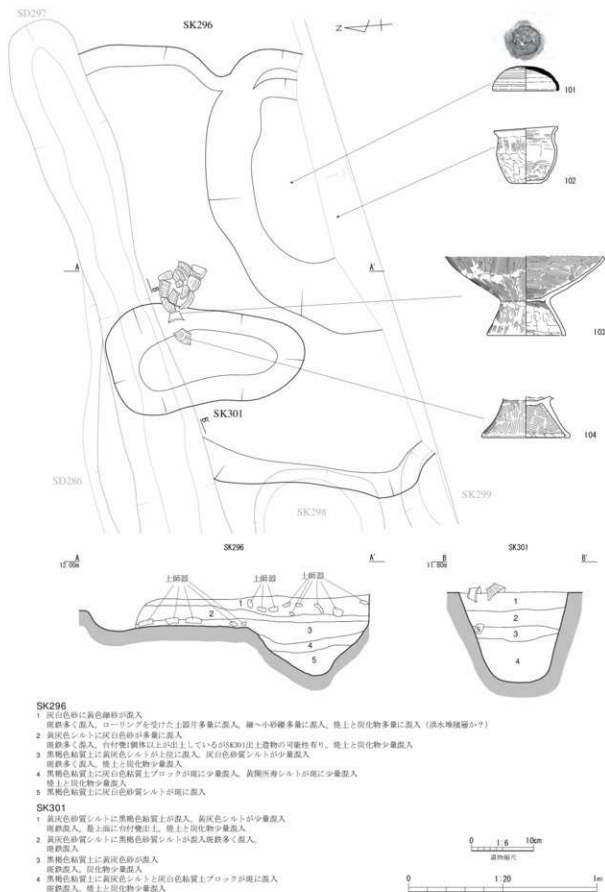


Fig. 21 SK296・301詳細図

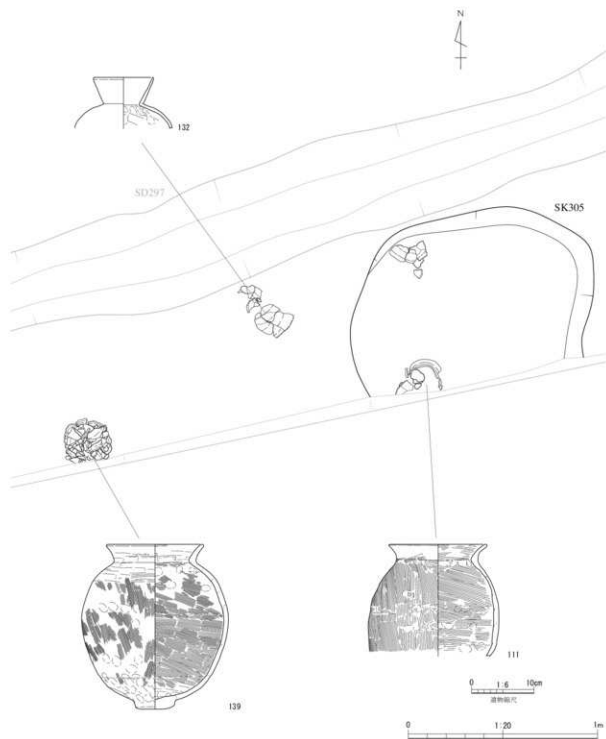


Fig. 22 SK305 ほか遺物出土状況図

SK305 (Fig. 22) A区東側の南壁沿いに位置する。調査区南外へ広がるため詳細は不明であるが、現状平面形態は円形を呈し、北東-南西方向に軸を持つ。残存長軸1.36m、残存短軸0.89m、深さ0.08mを測る非常に浅い土坑である。出土遺物は、5世紀の土師器甕、壺底部、6～7世紀の土師器の長胴甕 (Fig. 29-111) が出土している。また西側の遺構外から、5世紀の土師器の平底甕 (Fig. 31-139)、直口壺、壺体部が出土しているが、これらの遺物は遺構検出面より高い位置から出土していることから、人為的に配されたものではなく、洪水によって流されてきたものと考えられる。SK305は6～7世紀の土坑と考えられるが、詳細な用途は不明である。

④小穴

SP02 (Fig. 23) B区の北東隅に位置する。平面形態は概ね円形を呈し、長軸0.55m、幅0.50m、深さ0.47mを測る。断面は北方向に向かい浅くなり、底面がやや丸みを帯びる船底状を呈する。堆積土は3層からなり、柱根及び柱根痕は明瞭に確認出来なかったが、1層についてはその可能性が考えられる。出土遺物は、小片のため図化できたものはなかったが、5～6世紀の土師器片と7世紀の須恵器の坏身片、土師器片が出土している。主体となる遺物の年代から7世紀の遺構と考えられる。

SP05 (Fig. 23) B区の東端に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長軸0.56m、幅0.42m、深さ0.20mを測る。断面は北方向に向かい浅くなり、丸みを帯びた底面から南側はおおよそ垂直方向に立ち上がる。堆積土は2層からなり、柱根及び柱根痕は明瞭に確認出来なかったが、1層については中央付近が幅0.11mで一段深くなっていることから、この部分は柱根痕の可能性が考えられる。小片のため図示できたものはないが、土師器片が出土している。出土遺物から6世紀代の遺構と考えられる。

SP14 (Fig. 23) B区の南東側北東隅に位置する。平面形態はおおよそ円形を呈し、長軸0.56m、短軸0.53m、深さ0.11mを測る。断面は底面がおおよそ平坦で、逆台形状を呈する。堆積土は2層からなり、柱根及び柱根痕は確認出来なかった。遺物は出土していないが、埋土の特徴から6～7世紀ころの遺構と考えられる。

SP15 (Fig. 23) B区の南東側北東隅に位置する。平面形態は南西方向にやや膨らんでいるが、おおよそ円形を呈し、長軸0.50m、短軸0.46m、深さ0.15mを測る。断面は底面がやや丸みを帯びる船底状を呈する。堆積土は2層からなり、柱根及び柱根痕は明瞭に確認することが出来なかったが、東側が一段深くなっており、柱根痕の可能性が考えられる。出土遺物は、小片のため図化できたものはなかったが、少量の土師器片が出土している。出土遺物の年代から6世紀代の遺構と考えられる。

SP18 (Fig. 23) B区の北東隅に位置する。平面形態は円形を呈し、長軸0.55m、短軸0.51m、深さ0.37mを測る。断面は東側がやや深くなる。堆積土は4層からなり、柱根及び柱根痕は明瞭に確認出来なかったが、土層堆積状況から、3及び4層は柱根埋設後の埋土であり、2層を抜き取り後の埋土と捉えれば、2層内に柱根が存在した可能性が考えられる。出土遺物は、僅かに15世紀の内耳鍋片が出土しているが1層からの出土であり、混入したものと見られる。主体となるのは、5～6世紀の須恵器片、土師器の高坏脚部片などが出土している。このことから、SP18は5～6世紀の遺構と考えられる。

SP94 (Fig. 23) B区の西側に位置する。平面形態は円形を呈し、長軸0.48m、短軸0.45m、深さ0.23mを測る。断面は深くなるほど幅が狭くなるが概ね船底状を呈する。堆積土は2層からなり、柱根及び柱根痕は明瞭に確認出来なかったが、西側が一段深くなっていることから、この部分に柱根が存在していた可能性が考えられる。出土遺物は、小片のため図化できたものはないが、5世紀の土師器の高坏脚部片や6～7世紀の土師器の小片が出土している。主体となる遺物の年代から7世紀代の遺構と考えられる。

SP100 (Fig. 24) B区の中央やや西側に位置する。概ね東側半分をSD101に切られるが平面形態は円形を呈し、長軸0.49m、短軸0.44m、深さ0.25mを測る。断面は北側に比べて南側は緩やかに立ち上がる。堆積土は2層からなり、1層が柱根痕と考えられる。柱根の直径は検出面で0.23m、

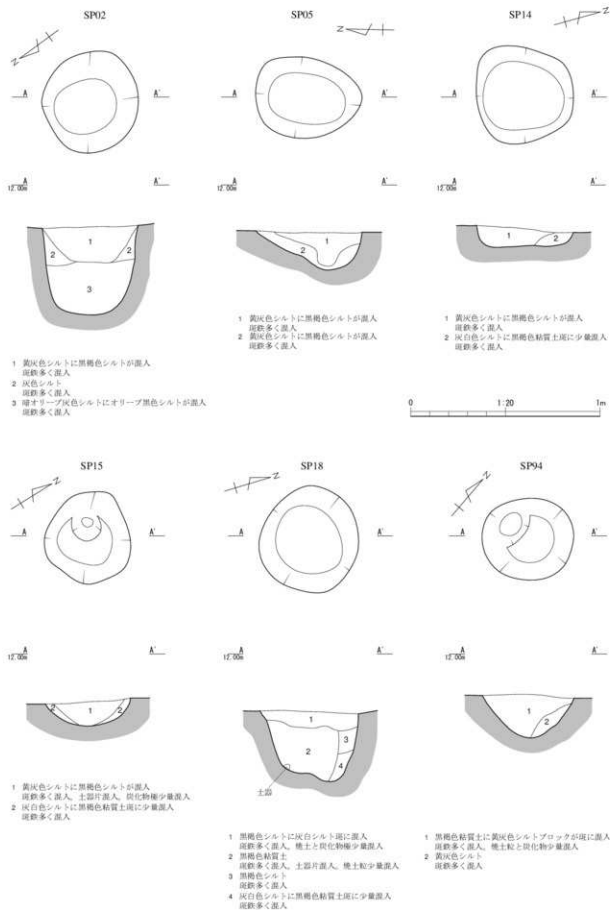


Fig. 23 A・B区小穴詳細図(1)

中段付近で0.10mを測る。1層が南に傾いているのは、柱根を抜き取った際の影響と考えられる。後述するSP112においても柱根痕が確認されているが、周辺からはその他に関連するような小穴は検出できなかった。掘立柱建物などの可能性も考えられるが、現状では遺構の性格は不明と言わざるを得ない。出土遺物は、6世紀の土師器の甕片、壺片などが出土していることから、6世紀の遺構と考えられる。

SP112 (Fig. 24) B区の中央やや西側に位置する。西側の一部を竹暗渠であるSD97に切られるが、平面形態はおおよそ円形を呈していたと考えられる。長軸0.51m、残存短軸0.39m、深さ0.36mを測る。断面形態は船底状を呈し、北側ではやや垂直気味に立ち上がる。堆積土は3層からなる。2層が柱根痕であり、直径は0.10mを測る。2層が南に傾いているのは柱根を抜き取った際の影響と考えられる。出土遺物は、僅かではあるが、6世紀の土師器の甕片などが出土していることから、6世紀の遺構と考えられる。

SP132 (Fig. 24) B区の中央付近の北側に位置する。平面形態は不整形を呈し、東側に大きく膨らんでいることから、柱根を抜き取る際にSP132を広げた可能性が考えられる。長軸0.87m、短軸0.75m、深さ0.29mを測る。断面形態は逆台形を呈し、堆積土は5層からなる。2層と3層が柱根痕と考えられるが判然としない。また、2層は直径0.09mを測るにぶい黄橙色粘質土であり、他の柱根痕埋土と異なるため、2層は後世の杭痕の可能性も考えられる。出土遺物は、小片のため図化できたものはないが、5世紀の土師器の甕片と6世紀の土師器の坏片が出土していることから、5～6世紀の遺構と考えられる。

SP156 (Fig. 24) B区の南西側に位置する。近世以降と考えられるSX91掘削後に検出した。竹暗渠であるSD97に切られるが、平面形態はおおよそ円形を呈していたと考えられる。長軸0.37m、残存短軸0.29m、深さ0.28mを測る。上部をSX91に削平されているが、しっかりと掘り込まれた小穴である。断面形態はやや幅の狭い船底状を呈する。堆積土は2層からなる。1層が柱根痕であり、直径は検出面で0.12m、最大径0.14mを測る。1層がやや北に傾いているのは柱根を抜き取った際の影響と考えられる。出土遺物は、6世紀の土師器の坏小片が出土していることから、6世紀の遺構と考えられる。

SP163 (Fig. 24) B区の中央やや西側に位置し、近世以降と考えられるSX91を完掘した後に検出した。平面形態はやや細長い楕円形を呈する。上部はSX91に削平されていたため、本来の規模は不明であるが、検出面で長軸0.40m、短軸0.31m、深さ0.13mを測る浅い小穴である。断面はやや丸みを帯びた船底状を呈する。堆積土は2層からなり、1層は柱根痕の可能性が考えられる。柱根の直径は検出面で0.17mを測る。SP163からは、遺物は出土していないが、埋土の特徴から6世紀代の遺構と推察される。

SP169 (Fig. 24) B区の南端中央付近に位置する。一部をSD69に切られるが、平面形態はほぼ円形を呈し、長軸0.56m、短軸0.48m、深さ0.37mを測る。断面形態は船底状を呈し、堆積土は水平堆積する3層からなるが、柱根及び柱根痕は確認出来なかった。出土遺物は、小片のため図化できたものはないが、5世紀代の土師器の高坏などが出土している。出土遺物の年代から、5世紀代の遺構と考えられる。

SP225 (Fig. 25) A区の中央やや西側に位置する。平面形態は円形を呈し、長軸0.51m、短軸0.45m、深さ0.34mを測る。断面形態は北東側に階段状に広がるが底面付近は船底状を呈する。堆積土は4層からなり、1層が柱根痕と考えられ、検出面で直径0.12mを測る。柱根痕は中心から少し外れており、また、埋土の特徴が他の柱根痕と比べて、若干差異が見られるため、後世の杭痕の可能性も考えられ

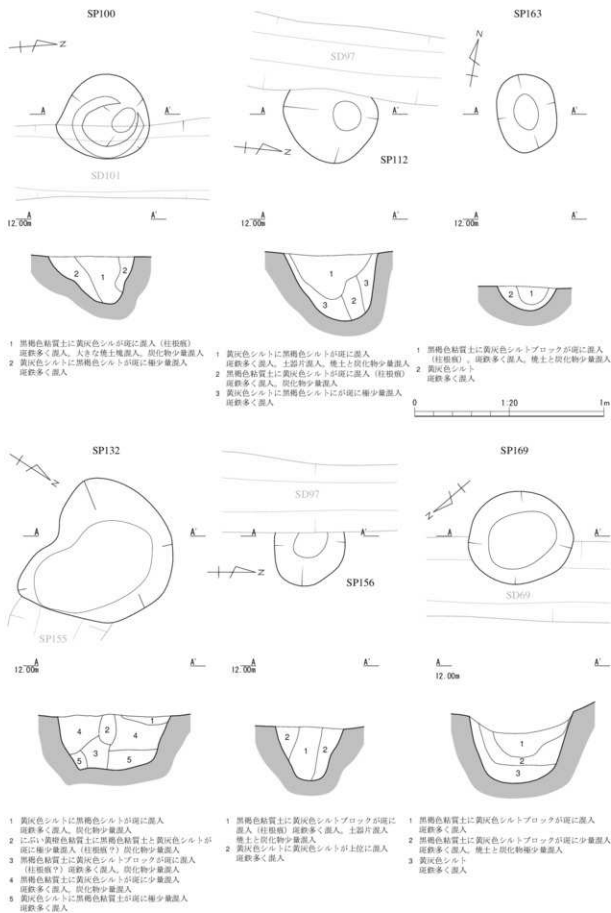


Fig. 24 A・B区小穴詳細図(2)

2 A・B区の調査

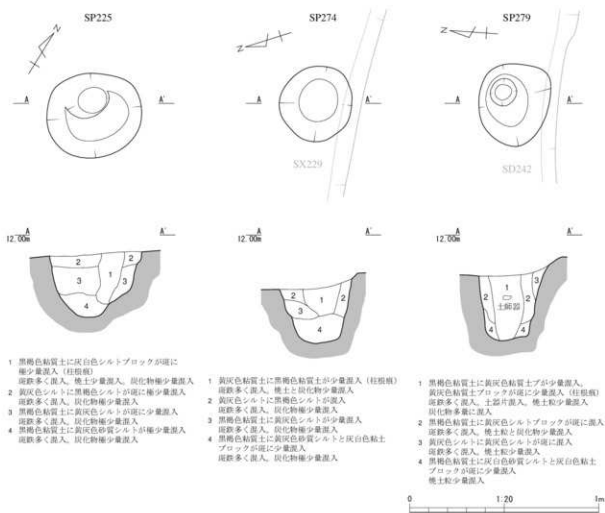


Fig. 25 A・B区小穴詳細図 (3)

る。2～4層はおおよそ水平堆積をしている。遺物は、僅かに土師器の小破片が出土しているのみであることから帰属時期は不明である。

SP274 (Fig. 25) A区の中央やや北側に位置し、近世以降と考えられるSX229を完掘した後に検出した。平面形態は円形を呈し、長軸0.41m、短軸0.38m、深さ0.34mを測る。断面形態は底面がやや丸みを帯びた船底状を呈するが、南側ではやや垂直に立ち上がる。堆積土は4層からなり、1層が柱根痕と考えられ、検出面で直径0.20mを測る。土層堆積状況はSP02と似ており、柱根痕は小穴の中央付近で止まっている。遺物は出土していないが、埋土の特徴からSP02と同時期の7世紀代の遺構と捉えられる。

SP279 (Fig. 25) A区の東側に位置し、SD242を完掘後に検出した。平面形態はおおよそ円形を呈するが、南東側が膨らむ。長軸0.44m、短軸0.41m、深さ0.40mを測る。断面形態は方形ないしは逆台形を呈する。堆積土は4層からなり、1層が柱根痕と考えられ、検出面で直径0.17mを測る。1層はほぼ垂直に堆積している事から、柱根は抜き取られずそのまま廃棄されたか、地表に露出した部分のみ切り取り再利用された可能性が考えられる。出土遺物は、5世紀の土師器甕と考えられる小破片が1層から1点のみ出土している。出土した遺物は限られているが、5世紀の遺構と考えられる。

(2) 出土遺物

A・B区では、古墳時代から戦国時代の遺物が出土した。7世紀代の遺物が主体であるが、5世紀～6世紀前半の遺物も一定量確認された。奈良時代から戦国時代の遺物も確認したが、出土量は僅かであった。また、遺物は包含層を中心に出土しており、破片が多く、遺構内からの出土品も完形品となるものは僅かであった。また、注目される遺物としては、5世紀代の初期須恵器や勾玉形、白玉などの滑石製模造品が確認された。

SD51 (Fig. 26) 1は籠目がついた土師器で、器種は甕と考えられる。内面は粗いハケで調整されており、5世紀後半～6世紀前半の遺物と考えられる。

SD66 (Fig. 26) 2は7世紀前半の湖西産須恵器の平瓶と考えられる。口縁部を欠損している。肩部に2条、体部に1条の沈線が施されている。底部は回転ヘラケズリの後、静止ヘラケズリで調整されている。3は湖西産須恵器の半球形坏部高坏である。7世紀代の典型的な高坏で、ほぼ完形品である。口唇部には内傾面があり、坏部外面に3条の沈線、脚部に1条の沈線が施されている。脚端は下に折り曲げられており、受口状をなす。

SD69 (Fig. 26) 4は土師器の坏である。須恵器の坏蓋を忠実に模倣したいわゆる蓋模倣坏で、6世紀前半の遺物と考えられる。

SD73 (Fig. 26) 5は須恵器の坏身片である。口唇部は立ち上がりが高く、内傾面が認められる。6世紀前半の遺物と考えられる。

SD95 (Fig. 26) 6は須恵器の甕と考えられる口縁部片である。外反しない口縁部であり、一般的なものではないが、6～7世紀代の遺物と考えられる。

SD144 (Fig. 26) 7は6～7世紀代の土師器の甕である。口唇部はヨコナデ、外面には指頭瓦痕が残る。口縁部は複合口縁状に肥厚し、外面はタテハケ、内面はヨコナデが施される。

SD147 (Fig. 26) 8は須恵器の坏蓋である。天井部と口縁部の境にある稜は明瞭で、口唇部には水平な端面を有する。色調はやや明るい青灰色であり、5世紀後半の遺物と考えられる。9・10は5世紀後半の土師器の高坏坏部である。いずれも脚部は欠損しており、坏部のみが残る。10は大型の製品で、坏底部の稜には高い突帯が付けられている。

SD149 (Fig. 26) 11は土師器の鉢である。5世紀末頃の製品と見られ、口唇部は外反し、体部は碗形を呈する。

SD150 (Fig. 26) 12はやや大型の土師器甕である。口縁部以下を欠損するが、台付甕とみられる。頸部がくの字形に折れ、口唇部に向けて細く作られおり、6世紀代の遺物と考えられる。

SD216 (Fig. 26) 13は須恵器の有台坏身であるが、高台部を欠損している。底部はケズリ調整が施され、丸みを帯びている。底部が膨らみ厚みを持つことから、底部は高台の下にはみ出していたと推定される。8世紀前半の湖西産の製品と考えられる。14は土師器の甕底部である。体部は内外面ともハケで調整が施されており、底部は薄く、平底である。15は土師器の鉢である。口縁部の破片であり、内湾する。14と15は、いずれも8世紀前半頃の遺物と考えられる。

SD226 (Fig. 26) 16は7世紀代の土師器の台付甕である。口縁部は外反し、外面はタテハケとオサエ、内面は粗いヨコハケが施されている。

SD239 (Fig. 26) 17・18は土師器の内耳鍋である。口縁部は「く」の字状に外反する。17は耳が残るが、18は欠損している。体部内外面はハケが施されており、内面にはオサエがみられる。

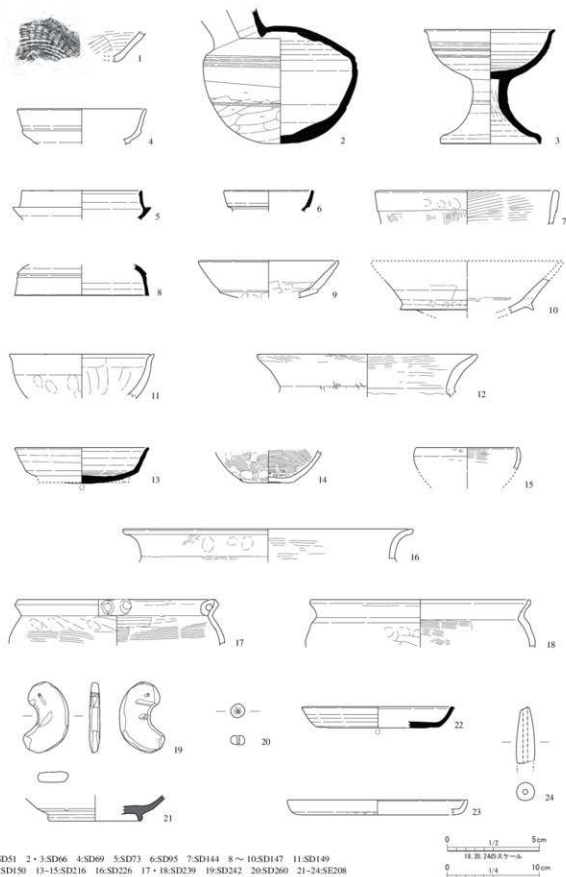


Fig. 26 A・B区 SD51～260、SE208 出土遺物

外面にはススが附着し、内面にはコゲ色の部分が認められる。17・18は形態的特徴から15世紀後半～16世紀前半の遺物と考えられる。

SD242 (Fig. 26) 19は勾玉形の滑石製模造品である。一般的な装身具の勾玉と比べて扁平であり、作りも粗い。祭祀遺物と見られる。相伴する遺物はないが、5世紀代の遺物と考えられる。

SD260 (Fig. 26) 20は5～6世紀代の石製丸玉である。片面穿孔で紐ずれが認められる。

SE208 (Fig. 26) 21は灰軸陶器の碗である。大型の碗と見られ、底部はケズリ調整が施され、三日月形の高台がつけられている。内面には自然軸が確認できるものの、施軸ははっきりしない。形態的な特徴から9世紀末～10世紀前半の遺物と考えられる。22は須恵器の皿で、湖西窯産の製品と見られる。23は全面赤彩された土師器皿である。22と23はいずれも8世紀中葉～後半の遺物と考えられる。24は土鍾の破片である。直径1cmほどが残存し、細長い紡錘形を呈する。

SK25 (Fig. 27) 25は土師器の甕である。口縁部はくの字状に外反し、6～7世紀代の遺物と見られる。

SK28 (Fig. 27) 26は淡緑色の滑石製白玉である。稜を有した白玉で、断面形は六角形を呈する。稜のある白玉は古い時期に多く見られ、5世紀代の遺物と考えられる。

SK29 (Fig. 27) 27は7世紀前半の須恵器の坏身で、湖西窯産と考えられる。28は7世紀代の須恵器の碗か高坏坏部である。口唇部は丸く、内湾形を呈する。29は7世紀代の土師器の長胴甕である。内外面にハケが施され、底部は平底に作られている。

SK30 (Fig. 27) 30は須恵器の坏蓋である。天井部と口縁部の境は、稜と沈線で区画される。天井部外面にケズリ調整、内面に内当て具の痕跡がある。31は土師器の鉢である。器形は断面逆台形で、口縁部は少し内湾し、底部は平底である。内外面ともハケ、口縁部はナデで調整されている。30と31はいずれも7世紀前半の遺物と考えられる。

SK50 (Fig. 27) 32は5世紀代の土師器の甕である。口縁部はくの字形に作られ、内外面はオサエと板ナデ調整が施されている。

SK53 (Fig. 27) 33は6世紀代の土師器の甕である。口縁部は、くの字形を呈するが外反が弱く、口唇部は細くなる。外面は斜め方向のハケ、内面は横方向のハケが施されている。34は土師器の甕である。底部には龍目がみられ、6世紀前半頃の遺物と考えられる。

SK57 (Fig. 27) 35は土師器の高坏である。口縁部は内碗し、口唇部は丸く作られる。器形から5世紀代の遺物と考えられる。

SK59 (Fig. 27) 36は5世紀中頃～6世紀前半の土師器の壺である。口縁部は直立して開き、口唇部は尖頭形を呈する。

SK68 (Fig. 27) 37は土師器の手づくね鉢である。口縁部は内湾形を呈し、底部はやや厚手であるが、平底に作られている。7世紀代のものと考えられる。

SK80 (Fig. 27) 38は須恵器の坏身である。口縁部の立ち上がりは低く、短い形状を呈する。底部はケズリ調整が施され、「一」のヘラ記号が認められる。形態的特徴から7世紀中頃の湖西窯産の製品と考えられる。39は土師器の甕である。体部を欠損するため明確な区別はできないが、長胴甕か、器の高の短い甕とみられる。頸部は括れ、口縁部は先細りに作られている。7世紀代の遺物と考えられる。40は土師器の小型甕である。頸部は緩やかに括れ外反する。7世紀代のものと考えられる。41は鉢形に近い器形ではあるが、土師器の甕である。内外面にハケ調整がみられ、口縁部はヨコナデが施される。7世紀代の遺物と考えられる。42は土師器の甕の把手である。43は

2 A・B区の調査

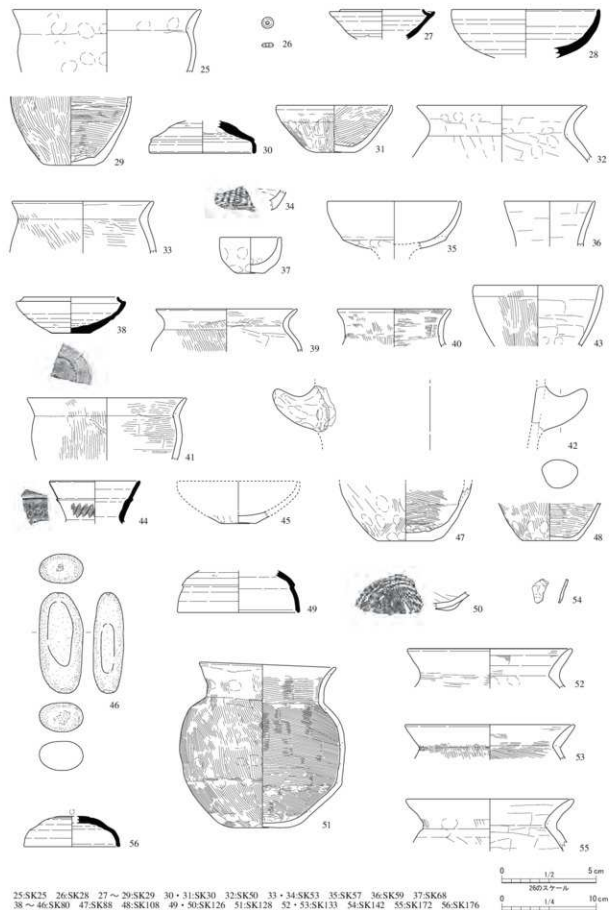


Fig. 27 A・B区 SK25～176 出土遺物

7世紀代の土師器の鉢である。口唇部は丸く作られ、外面はハケ、内面はナデあるいは板ナデで調整されている。44は須恵器の壺である。口縁部は中位で屈曲してから開くが、甕と比べると開きは小さく、屈曲部外面は突帯状を呈する。頸部には滑らかに施された櫛描波状文が見られ、5世紀後半の遺物と考えられる。45は土師器の坏身である。底部片であり、口縁部及び体部の大半が欠損する。底部には植物の圧痕があり、胎土には白色の軽石が認められる。5世紀後半のもので、駿河東部からの搬入品と考えられる。46は叩石である。細長い川原石を使用し、両端には叩き痕が認められるが、年代は不明である。

SK88 (Fig. 27) 47は6～7世紀代の土師器の甕である。器壁は厚く作られ、平底を呈する。外面にはハケとオサエ、内面はナデとハケが施されている。

SK108 (Fig. 27) 48は7世紀代の土師器の長胴甕である。器壁は薄く、内外面はハケ調整である。底部は平底で、体部と同じく薄い作りである。

SK126 (Fig. 27) 49は須恵器の坏蓋である。天井部と口縁部の境には稜があり、口唇部には内傾面をもつ。胎土はチャートや石英粒を含み粗い。特徴から6世紀前半の遺物であり、有玉窯産と考えられる。50は土師器の甕である。底部は四角形で、角の部分が厚くなっている。外面には籠目がみられ、6世紀前半の遺物と考えられる。

SK128 (Fig. 27) 51は完形の土師器の壺である。口縁部は体部高に比べて長く、緩やかに外反する。内外面はハケ調整がみられ、口縁部はヨコナデが施される。底部は平底で、体部下半に稜を有する。7世紀代のものと考えられる。

SK133 (Fig. 27) 52と53は5世紀代の土師器の甕である。口縁部はくの字形に作り、口唇部に向けて先細りする。内外面にはハケ調整がみられ、52の内面にはオサエが認められる。

SK142 (Fig. 27) 54は製塩土器と考えられる土師器の体部片である。ピンク色の塩焼けや層状剥離は認められないが、極端に薄い粗製の土師器であり、体部中央が少し括れていることから、製塩土器と判断した。東三河の渥美式製塩土器と見られ、器壁が薄いことから7世紀後半～8世紀前半頃の遺物と推定される。

SK172 (Fig. 27) 55は土師器の甕である。口縁部はやや厚く作られ、くの字形を呈する。内外面ともに板ナデ調整がみられるが、やや粗い作りである。5世紀代のものと考えられる。

SK176 (Fig. 27) 56は須恵器の坏蓋である。天井部はケズリ調整で、内面には内当て具の痕跡を残す。形態的特徴から7世紀中頃の湖西窯産の製品と考えられる。

SK204 (Fig. 28) 57は14世紀後半～15世紀の常滑窯産の片口鉢である。口唇部は端面をもち、上端は上に少し突出する。58は、湖西窯産須恵器の坏身である。7世紀初頭の遺物と考えられる。59と60は7世紀代の土師器の鉢である。59は口縁部にはヨコナデが施され、口唇部はやや細く丸い形状をなす。外面はハケ、内面は板ナデ調整が施される。60は、口縁部が屈曲し、口唇部は丸く仕上げられている。61は土師器の甕である。口縁部はやや厚い作りであり、ハケ後ヨコナデ調整が施される。7世紀代の遺物と考えられる。62は7世紀代の土師器の甕である。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は上に摘み上げられている。63は高坏あるいは高盤の脚部とみられるが、小型であることから土製品の可能性もある。64は滑石製模造品である。有孔円盤あるいは双孔円盤と考えられ、孔を境に半分を欠損している。5世紀代の遺物で、祭祀遺物と考えられる。

SK206 (Fig. 28) 65は瀬戸美濃窯産の縁軸皿である。口縁部周辺には灰軸が施軸されている。16世紀後半の遺物と考えられる。66は須恵器の長頸壺である。口唇部は受口状で、その直下には段

が見られる。7世紀の湖西窯産の製品と考えられる。67は須恵器の無台長頸壺である。口縁部の上半は欠損する。底部はケズリ調整が施され、丸い形状を呈する。肩部には2条の沈線が施され、頸部と体部にも沈線が施される。7世紀代の湖西窯産のものと考えられる。68は土師器の高坏もしくは高盤の脚部と考えられるが、小型であることから土製品の可能性もある。脚端はヨコナデ調整とオサエが施される。69は須恵器の高坏である。脚部の破片であり、後述するSK221の70と同一個体の可能性が高い。

SK221 (Fig. 28) 70は須恵器の無蓋短脚高坏である。SK206から出土した69とは同一個体の可能性が高いことから、69・70は図上にて復元した。坏部は比較的深い作りで、外面には滑らかな櫛描波状文が施されている。口縁部は少し外反し、わずかに端面を有する。把手は断面形が円形をした小さなものである。脚部は、緩やかにハの字形に外反し、端部がやや肥厚し丸みをもつ。透かしは長方形で、4方向と推定される。色調はやや白いが、5世紀後半の陶邑窯からの搬入品と思われる。71は土師器の小型鉢である。厚手な作りで、内面には口縁部下に稜がある。5世紀後半～6世紀代の遺物と考えられる。

SK255 (Fig. 28) 72と73は須恵器の坏身である。口縁部の立ち上がりは受部を少し上回る程度であり、扁平化が顕著である。72の底部にはケズリ調整が施されている。いずれも7世紀中頃の湖西窯産の製品と考えられる。74は7世紀代の須恵器の高坏である。脚部以外は欠損しているが、半球形坏部高坏と考えられる。75は7世紀代の土師器の甕である。口縁部はヨコナデが施され、外面はタテハケ、内面はヨコハケと一部オサエがみられる。76は土師器の把手付鉢である。体部の下半部から底部にかけて欠損する。把手は角形を呈し、先端部はやや上向きに先細る。口縁部は外反し、ヨコナデ調整が施される。7世紀代のものと考えられる。77は7世紀代の土師器の甕である。口縁部は複合口縁状に厚く作られ、ヨコナデ調整が見られる。内外面はハケ調整が施される。

SK271 (Fig. 28) 78は須恵器の坏身である。口唇部には僅かに内傾面が見られる。口縁部は大きく立ち上がり、やや厚手な作りである。6世紀前半の湖西市峠場窯産の製品と推定される。

SK280 (Fig. 28) 79は土師器の坏身、80は土師器の高坏脚部である。79は口径が14cmと大型で、底部が丸く、内湾する口縁部が付く。80の高坏脚部は小型化したものであり、ハの字形に外反する。いずれも6世紀前半の遺物と考えられる。81は7世紀代の土師器の台付甕である。口縁部は緩やかに外反し、内外面にハケ調整がみられる。

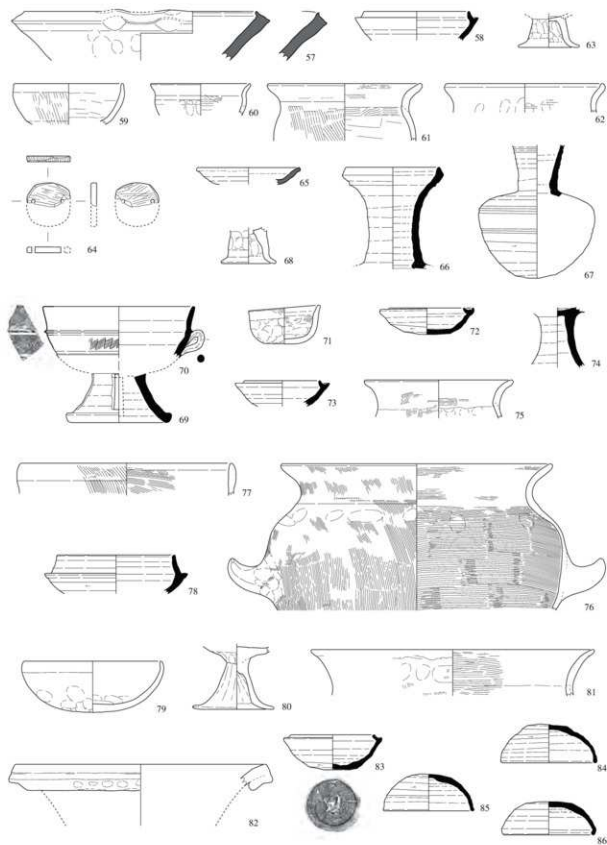
SK288 (Fig. 28) 82は土師器の折返口縁部壺である。胎土には白灰色の軽石が含まれており、東駿河からの搬入品の可能性がある。5世紀代のものと考えられる。

SK289 (Fig. 28) 83～86は須恵器である。83は坏身、84～86は坏蓋である。83の底部には「一」のヘラ記号が施されている。84と86の天井部内面には内当て具痕が認められる。85の天井部と口縁部の境には沈線が施されている。いずれも7世紀中頃の湖西窯産の製品と考えられる。

SK294 (Fig. 29) 87は須恵器の坏身である。口縁部の立上りは比較的高く、やや深い作りである。7世紀前半の遺物と考えられる。88は5世紀後半頃の土師器の高坏である。一部欠損するが、口縁部から脚部まで全体形がうかがえる。坏部は屈曲し、稜を有をもつ。脚部はハの字形に開き、内外面ともに板ナデが施される。

SK295 (Fig. 29) 89は土師器の外反口縁部壺である。口縁部はヨコナデ調整、内外面はともにハケがみられる。7世紀代的大型壺の典型である。

SK296 (Fig. 29) 90～92は須恵器の坏身、93と94は須恵器の坏蓋である。いずれも7世紀中



57 ~ 64:SK204 65 ~ 69:SK206 70・71:SK221 72 ~ 77:SK255
 78:SK271 79 ~ 81:SK280 82:SK288 83 ~ 86:SK289



Fig. 28 A・B区 SK204 ~ 289 出土遺物

頃の湖西窯産の製品と考えられる。90の底部にはヘラケズリ調整が施されており、板目痕も見られる。91と92は口縁部の立ち上がりは受部より僅かに上に出るだけであり、扁平化が顕著にみられる。底部はともに未調整であるが、92の底部には「×」のヘラ記号がある。93と94は天井部は丸く、ケズリ調整が施されている。94の天井部内側には内当て具跡が認められる。95は7世紀代の須恵器の広口壺である。口唇部の下には段を有し、口唇部には外傾面を持つ。96は土師器の坏身である。内面には放射状に暗文が施されている。7世紀代の畿内系土師器とみられる。97は土師器の鉢である。口縁部は内湾し、底部を欠損している。外面は部分的にハケ調整がみられ、内面は全面にハケ調整が施される。7世紀代のものである。98は7世紀代の土師器の台付甕である。脚台部の端面は折り返されており、内外面ともにハケ調整が見られる。99は砂岩製の砥石の残欠である。2面に使用痕が確認でき、表面には錆が付着している。

SK298 (Fig. 29) 100は5世紀代の土師器の甕である。口縁部がくの字形に屈折し、先細りした口唇部を持ち、口縁部は内外面ともにヨコナデが施される。外面には一部にススが付着している。

SK301 (Fig. 29) 101は須恵器の坏身である。底部はケズリ調整が施され、「一」のヘラ記号がみられる。102は7世紀代の土師器の小型鉢である。頸部は括れ、甕に近い形状をなす。103と104は土師器の台付甕である。ハの字形に開く台部の先端は、ともに内側に折り返されている。内外面ともにハケ、一部板ナデ調整で仕上げられている。いずれも7世紀代の遺物と考えられる。

SK302 (Fig. 29) 105は須恵器の坏身である。底部にはケズリ調整が施されるが、使用による摩滅も認められる。7世紀中頃の湖西窯産の製品と考えられる。106と107は土師器の鉢である。口縁部内外面はヨコナデ調整で、体部外面は粘土紐とオサエの痕跡を残す。ともに7世紀代のもので考えられる。108は土師器の坏身である。口縁部はヨコナデ調整で、外面はオサエが残る。底部が厚く丸底を呈し、5世紀後半から6世紀前半の遺物と考えられる。

SK304 (Fig. 29) 109は、土師器の高坏である。口縁部が外反する深い作りの坏部であり、5世紀中頃の遺物と考えられる。110は白色の凝灰岩製の砥石である。4面とも使用痕が見られるが、半分ほどを欠損している。

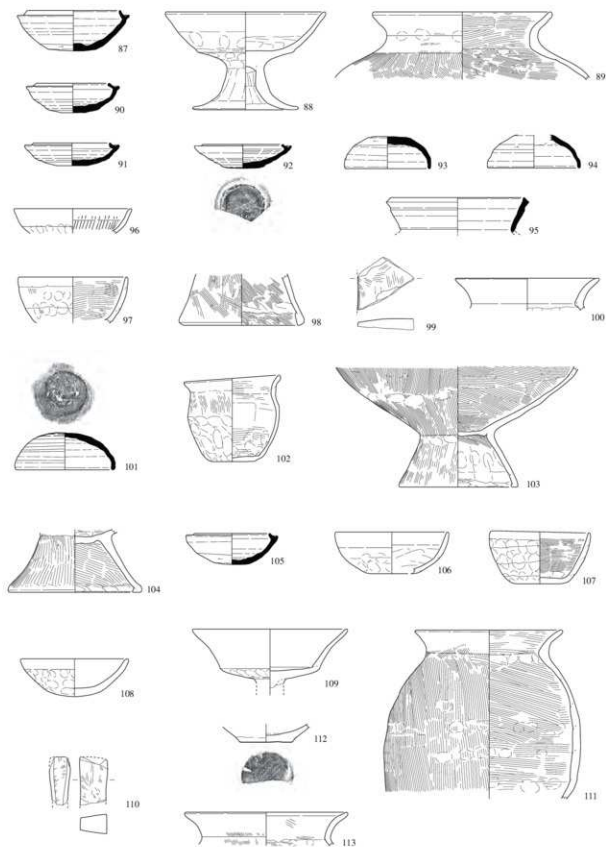
SK305 (Fig. 29) 111は土師器の長胴甕である。頸部の折れが強いことから、7世紀前半のものと考えられるが、6世紀代に遡る可能性もある。口縁部にはヨコナデが施され、外面はタテハケ、内面はヨコハケがみられる。

SP179 (Fig. 29) 112はカワラケである。底部に静止糸切痕がみられ、やや大型の製品である。14～15世紀代の遺物と考えられる。

SP293 (Fig. 29) 113は土師器の甕である。口縁部の破片であり、頸部は強く外反する。口唇部はやや細く作られ、端部は丸く仕上げられている。6世紀後半～7世紀前半の遺物と考えられる。

SX47 (Fig. 29) 114は16世紀頃の天目茶碗である。口縁部は真上に屈曲し、体部と比べて細く作られる。底部はケズリ出しで、暗灰色の鉄釉が施されている。115は14世紀代の羽釜の口縁部片である。口唇部端面は窪み、鐙の端面は沈線状となっている。116と117は、直径1cm程の細長い紡錘形の土錘であり、中世のものと考えられる。

包含層 (Fig. 30・31) 118～131は須恵器である。118～120は須恵器の坏身である。口縁部はやや高く立ち上がり、口唇部は端面を有している。6世紀前半の有玉窯産の製品と考えられる。119は口縁部はおおむね真上に立ち上がり、口唇部には内傾面を有する。受け部の下が窪み、やや厚い作りである。6世紀前半の遺物と考えられる。120は須恵器の坏身である。最大径は13.2cm



87~88.SK294 89.SK295 90~99.SK296 100.SK298 101~104.SK301
105~108.SK302 109~110.SK304 111.SK305 112.SP179 113.SP293

0 1/4 10cm

Fig. 29 A・B区 SK294~305、SP179・293出土遺物

とやや大きく、口縁部の立上りも比較的高い。底部には「三」状のヘラ記号があり、内面には薄い同心円のスタンプ文が認められる。6世紀後半のものである。

121～124は須恵器の杯蓋である。121は口唇部に内傾面をもち、天井部はケズリ調整が施されている。口縁部と天井部の境は弱い稜と幅広い沈線で区画されている。形態的特徴から5世紀末～6世紀初頭の遺物と考えられる。122と123は、口唇部は丸く仕上げられ、天井部と口縁部の境に沈線が施されている。122の天井部には「×」のヘラ記号がみられる。いずれも7世紀中頃の湖西窯産の製品と考えられる。

125は須恵器の無蓋高杯である。杯部の破片であり、口唇部と脚部を欠損する。杯部には2条の突帯が施され、突帯の下には櫛状工具による波状文がみられる。5世紀後半の遺物と考えられ、陶邑窯からの搬入品の可能性がある。126は須恵器の半球形杯部高杯である。小型ではあるがやや深く厚い作りであり、口唇部には内傾面がある。7世紀代の湖西窯産の製品と考えられる。

127は須恵器の壺口縁部である。2つの破片は接合しないが、同一個体の口縁部と頸部の破片である。口唇部には端面をもち、すぐ下に突帯を有している。頸部中位にも小突帯があり、その上下には滑らかな櫛描波状文が施文されている。5世紀後半のものと考えられ、陶邑窯からの搬入品の可能性がある。128は須恵器の口縁部片である。初期須恵器の壺の口縁部のように、器種は不明である。129は須恵器の壺である。体部の上半から口縁部が欠損している。底部には高台が付けられており、断面は不定形な三角形に作られている。底部の中央にはケズリ調整が施されており、板目が残る。7世紀末～8世紀前半のものと考えられる。130は7世紀代の須恵器の壺蓋である。摘みはボタン状であるが、上半部を欠損している。口縁部は内湾し、端部は丸く仕上げられている。

131は須恵器の甕である。口唇部は端面をもち、その直下に突帯を有している。外面はナデ調整で無文であるが、平行タキ目がわずかに残る。外面は青灰色、内面は茶色で、5世紀後半のものと考えられ、陶邑窯からの搬入品の可能性がある。

132～143は土師器である。132は土師器の直立口縁部壺である。口縁部は長く直線的なもので、体部を大きく欠損するが扁球形あるいは球形であったと推定される。5世紀代のものと考えられる。133は5世紀代の土師器の壺である。口縁部は折返口縁部であり、口唇部は丸く仕上げられている。体部から底部を欠損しているが、頸部で折れて、体部は球形であったと考えられる。134は土師器の壺である。底部は平底で、底面には木葉痕が残る。5世紀代のものと考えられ、胎土には軽石が含まれており、駿河東部から搬入されたものと推定される。

135は土師器の碗である。口縁部は幅広い内傾面を持ち、丸く仕上げられている。5世紀代のものと推定される。

136～138は土師器の高杯である。136は杯部に稜を持ち、口縁部はやや内湾して開く。内外面とも板ナデの後に、ナデ調整が施されている。器形から5世紀代のものと考えられる。137と138は脚部である。137はハの字状に開き、外面はタテ板ナデ、内面はケズリ調整が施されている。138は長脚ではあるが、脚端部を欠損する。外面は板ナデとナデ、内面はケズリ調整である。形態的特徴から137は5世紀後半、138は6世紀代の遺物と考えられる。

139～142は甕である。139は5世紀代の平底甕である。口縁部はくの字形に屈曲し、口唇部は丸く仕上げられている。体部はやや細長い球形を呈し、底部は安定の悪い突出した平底である。140は直線的な口縁部で、口唇部は端面をもち、少し上に突出する。口縁部の形状から7～8世紀代の伊勢型丸底長胴甕と推定される。141は平底の長胴甕であり、7世紀代の遺物と考えられる。

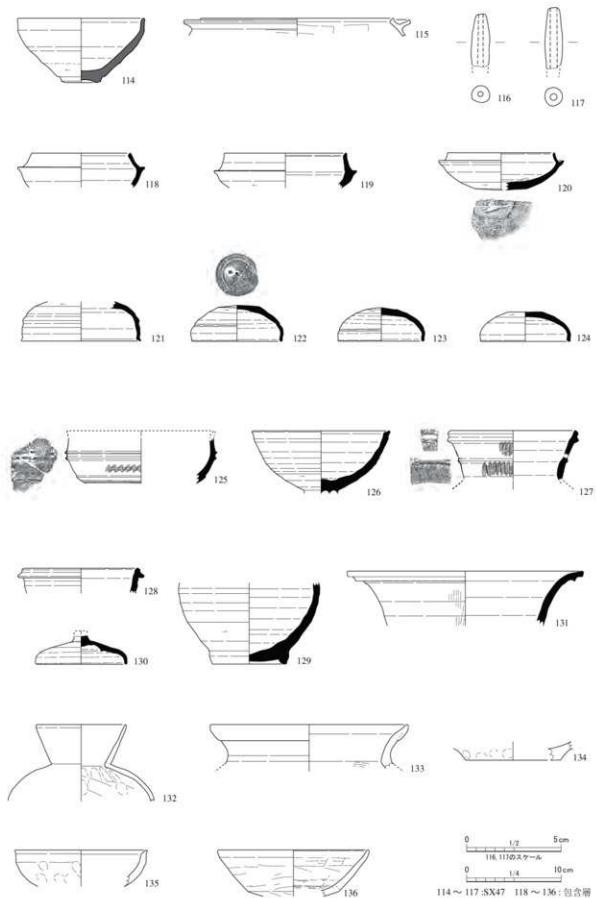


Fig. 30 A・B区 SX47、包含層出土遺物

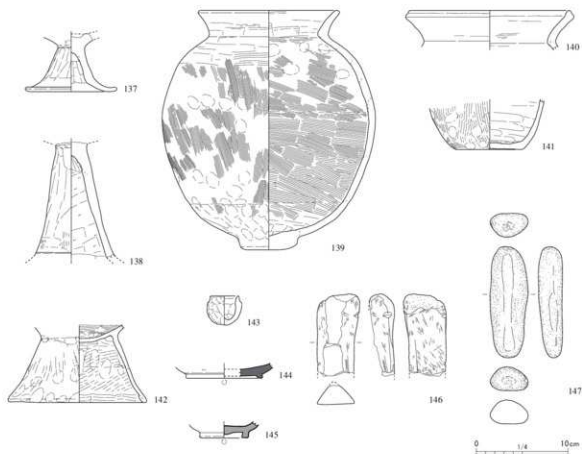


Fig.31 A・B区 包含層出土遺物 (2)

142は台付甕の脚台部である。端部は内側に折り返されている。体部及び台部の内外面はハケ調整が認められるが、体部と比較して台部は粗いハケが施される。7世紀代のものである。

143は土師器の手ずくね鉢である。球形に近い体部から少し括れて、短い口縁部が直立する。7世紀代の遺物と考えられ、祭祀遺物とみられる。

144は灰軸陶器の碗である。底部はケズリ調整が施され、やや扁平な角高台が付けられている。猿投窯編年のK14 窯式に比定され、9世紀前半のものと考えられる。

145は中国青磁の碗である。鎗蓮弁文が施されており、13世紀代のものと考えられる。

146は白色凝灰岩製の砥石である。長期間使用されたとみられ、断面形は三角形にすり減るが、端面には自然面を残す。半分を欠損する。147は緑色片岩の細長い川原石を利用した叩石である。使用痕は認められるが、長期間使用されたものではない。

3 C区の調査

(1) 検出遺構

C区は開発範囲の南東側に位置する。基本層序の項で述べた理由から、II b-1層の上面で遺構検出作業を行い、主に古墳時代から戦国時代にかけての溝、土坑、小穴を確認した。以下に主要な遺構について述べる。

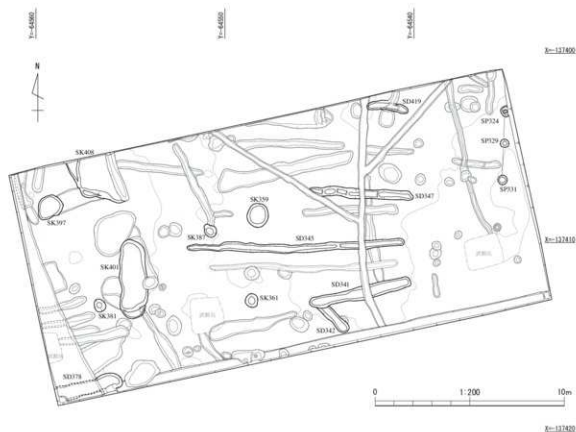


Fig. 32 C区 遺構配置図

①掘立柱建物

SH01 (Fig. 33) SH01は調査区の東端に位置する。現状 SP324、SP329、SP331の3基の小穴で構成されるが、調査区東外へ広がるため、桁間と梁間については不明であるもの、おおよそ南北方向に2間を測る。建物の規模は南北に3.64m、各柱間の間隔はSP324とSP329で1.70m、SP329とSP331で1.94mを測る。SP324の東側は調査区外に及んでいるため、本来の形状は不明ではあるもの、各小穴は円形から楕円形を呈すると考えられる。

SP324は、長軸0.60m、残存短軸0.38m、深さ0.36mを測る。断面形態は中央(1層)が深くなり、しっかりと掘り込まれている。堆積土は5層からなる。1層が柱根痕であり、直径は検出面で0.26m、中央付近で0.19mを測る。1層はほぼ垂直に堆積している事から、柱根は抜き取られずそのまま廃棄されたか、地表に露出した部分のみ切り取り再利用された可能性が考えられる。

SP329は、長軸0.46m、残存短軸0.43m、深さ0.16mを測る。断面形態は底面中央が丸みを帯びた

SP324

- 1 黒褐色粘質土に黄灰色砂質シルトブロックが斑に混入 (柱根痕)
頭鉄多く混入、土器片混入、焼土と炭化物少量混入
- 2 黒褐色粘質土に灰白色シルトが混入
炭化物極少量混入
- 3 黒褐色粘質土に黄灰色シルトが斑に混入
頭鉄多く混入、焼土と炭化物少量混入
- 4 黄灰色砂質シルトに黒褐色粘質土が斑に極少量混入
灰白色粘質土ブロックが極少量混入
- 5 黄灰色シルトに黒褐色粘質土が斑に極少量混入
灰白色粘質土ブロックが極少量混入
頭鉄多く混入、土器片混入、炭化物極少量混入

SP329

- 1 黒褐色粘質土に灰白色シルトが斑に混入
頭鉄多く混入、焼土と炭化物少量混入
- 2 黄灰色シルトに黒褐色粘質土が斑に極少量混入
灰白色粘質土ブロックが極少量混入
頭鉄多く混入

SP331

- 1 黒褐色粘質土に黄灰色砂質シルトブロックが斑に混入 (柱根痕)
頭鉄混入、焼土と炭化物少量混入
- 2 黄灰色砂質シルトに黒褐色粘質土が斑に極少量混入
頭鉄混入、炭化物極少量混入
- 3 黒褐色粘質土に黄灰色砂質シルトが斑に少量混入
頭鉄混入、炭化物極少量混入
- 4 黄灰色シルトに黒褐色粘質土が少量混入
灰白色粘質土ブロックが少量混入
頭鉄混入、炭化物極少量混入

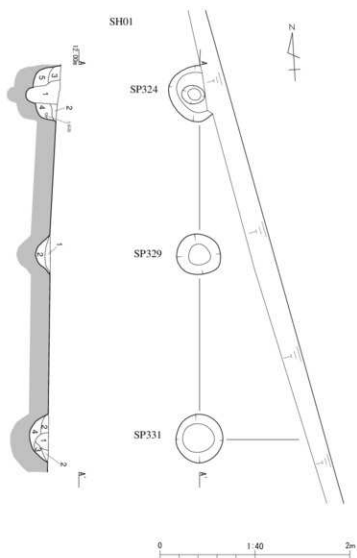


Fig. 33 SH01 詳細図

船底状を呈する。堆積土は2層からなるが、柱根や柱根痕は確認出来なかった。

SP331は、直径0.51m、深さ0.20mを測る。断面形態は底面が丸みを帯びた船底状を呈する。堆積土は4層からなる。1層が柱根痕であり、直径は検出面で0.19mを測り、下に行くほど細くなる。1層はほぼ垂直に堆積している事から、柱根は抜き取られずそのまま廃棄されたか、地表に露出した部分のみ切り取り再利用された可能性が考えられる。

出土物は、SP324から7世紀の土師器の甕、壺、鉢の小片が、SP329及びSP331からは5～6世紀代の土師器の甕や杯の小片がごく僅かに出土している。いずれも図化できたものはないが、7世紀代の遺物が主体となることから、SH01は7世紀の遺構と考えられる。

②溝

SD341 (Fig. 34) C区中央南側に位置する。SD341は東北東-西南西の軸を持つ溝でE-13°-N振れる。中央付近は竹暗渠であるSD421に切れ、SD343を切る。長さ5.45m、最大幅0.75m、深さ0.20mを測る。断面は底面がやや丸みを帯びる船底状を呈し、堆積土は1層のみである。出土遺物は、5世紀代の土師器の杯 (Fig. 38-149)、滑石製白玉1点 (Fig. 38-150)、7世紀代の須恵器

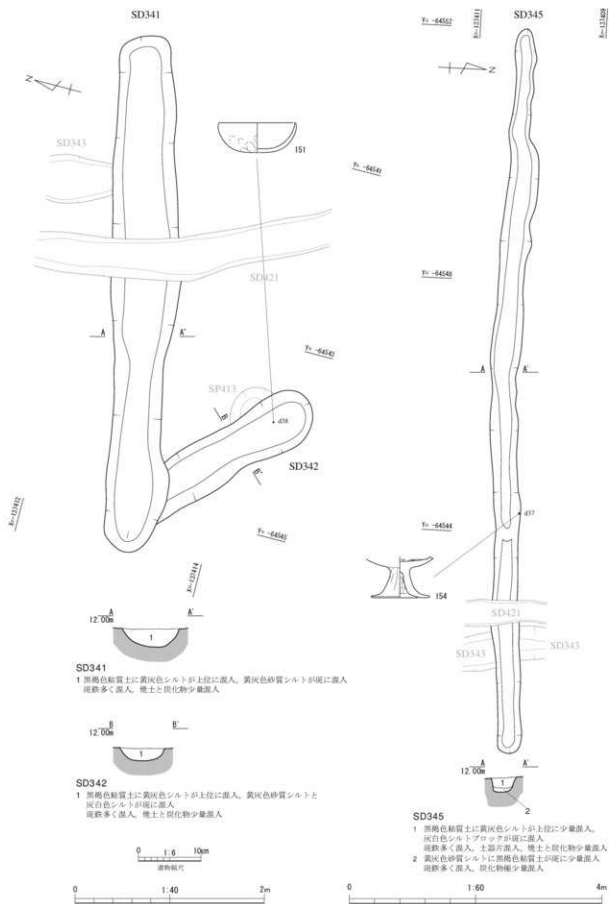


Fig.34 SD341, 342, 345詳細図

の坏蓋 (Fig. 38-148) などが出土している。主体となる遺物の年代から、SD341は7世紀の溝と考えられる。

SD342 (Fig. 34) C区の南端付近に位置する。SD342は北西-南東方向の軸を持つ溝で、S-43°-E振れる。西端はSD341に切れ消失している。SP413を切る。残存長1.95m、最大幅0.59m、深さ0.13mを測る。断面は底面がやや丸みを帯びる船底状を呈し、堆積土は1層のみである。出土遺物は、5世紀後半～6世紀前半の土師器の坏 (Fig. 38-151) 等が出土している。

SD345 (Fig. 34) C区の中央付近に位置する。SD345は、ほぼ東西方向に軸を持つ溝で、W-2°-S振れる。東端付近は竹暗渠であるSD421に切れ、SD343を切る。長さ11.47m、最大幅0.47m、深さ0.24mを測る。断面は逆台形を呈し、堆積土は2層からなる。東側と比べ西側の方が0.08～0.10m程深い。出土遺物は、6世紀前半の土師器の高坏坏部と脚部 (Fig. 38-153, 154)、6世紀代の坏、高坏、鉢 (Fig. 38-152, 155, 156) などが出土している。主体となる遺物の年代から、SD345は6世紀前半の溝と考えられるが、本溝の詳細な性格は不明である。なお、SD345と同軸方向で同規模幅の溝は、後述するSD347をはじめとして同調査区内において数条検出されている。含まれる遺物も小片のみではあるが、5～6世紀のものに限られる。これらが一連の溝であるなら、耕作に関する溝の可能性が考えられる。

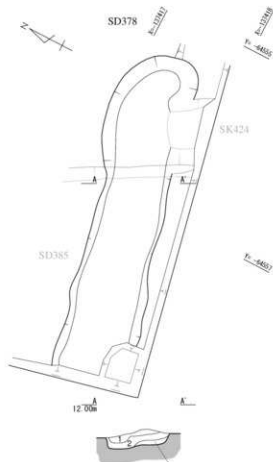
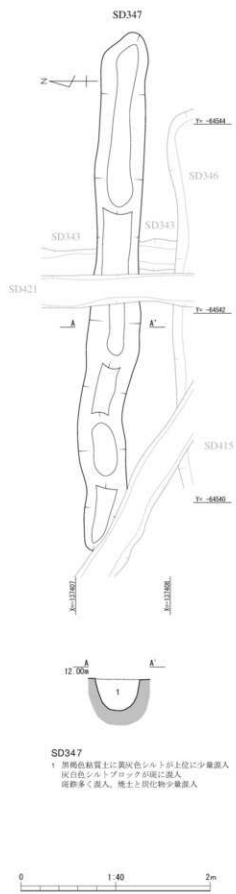
SD347 (Fig. 35) C区の中央付近に位置する。SD347は、ほぼ東西方向の軸を持つ溝で、W-4°-N振れる。中央付近と西端は竹暗渠であるSD415及びSD421に切れ、SD343を切る。長さ5.50m、最大幅0.56m、深さ0.32mを測る。断面は底面が丸みを帯びた船底状を呈する。堆積土は1層からなる。底面は中央東側が最も高く、それ以外は高低差が見られる。出土遺物は、5世紀の須恵器の無蓋高坏、6世紀初頭の須恵器の坏蓋片、土師器の甕、5世紀代とみられる土製棗玉 (Fig. 38-157) などが出土していることから、SD347は5～6世紀代の溝と考えられる。SD345もSD347と同軸方向で同規模幅であることから、耕作に関する溝の可能性が考えられる。

SD378 (Fig. 35) C区の南西隅に位置する。SD378は、東北東-西南西方向の軸を持つ溝で、W-15°-S振れる。南東隅はSK424に、西半分はSD385に切られる。残存長3.47m、最大幅0.78m、深さ0.20mを測る。断面は底面がおおよそ平坦で北側がやや低くなるが、概ね逆台形を呈する。堆積土は3層からなる。1層上面は上部に膨らみを持つびつな形をしているが、SD385及び南壁サブトレンチ掘削時に削平された影響である。底面は西から東へ向かって低くなる。出土遺物は、土師器の甕、瓶 (Fig. 38-158) などが出土していることから、SD378は6～7世紀の溝と考えられる。

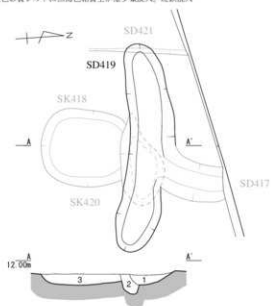
SD419 (Fig. 35) C区の北端でやや東側に位置する。SD419は、ほぼ東西方向に軸を持つ溝で、W-8°-N振れる。南はSK420を切る。SD417との切り合いについては確認出来なかった。長さ2.20m、最大幅0.47m、深さ0.15mを測る。断面は底面がやや丸みを帯びながら、北側へ緩やかに立ち上がる。底面は中央付近で一度高くなるものの、東側と西側で高低差は2cm程度とほぼ平坦である。堆積土は1層からなる。出土遺物は、5世紀後半～6世紀前半の底部に籠目痕のある土師器の甕の底部片 (Fig. 38-161) が1点出土している。このことから、SD419は5世紀後半～6世紀前半の溝と考えられる。

②土坑

SK359 (Fig. 36) C区のほぼ中央付近に位置する。円形を呈し、南北方向に軸を持つ。長軸1.26m、残存短軸1.12m、深さ0.23mを測る。断面は底面が平坦で逆台形を呈する。堆積土は2層からなり、

**SD378**

- 1 黒褐色粘質土に黄灰色シルトが硬に極少量混入。黄灰色シルトブロックが極少量混入
底砂混入。焼土と炭化物極少量混入
- 2 黒褐色粘質土に黄灰色砂質シルトが硬に混入。底砂混入。焼土と炭化物極少量混入
- 3 黄灰色砂質シルトに黒褐色粘質土が極少量混入。底砂混入

**SD419**

- 1 黒褐色粘質土に黄灰色シルトが上位に少量混入。黄灰色砂質シルトが極少量混入
底砂多く混入。土器片混入。焼土極少量混入。炭化物少量混入
- 2 黒褐色粘質土に灰白色砂質シルトブロックが硬に混入。黄灰色砂質シルトが極少量混入
底砂多く混入。焼土と炭化物極少量
- 3 黄灰色シルトに黒褐色粘質土が硬に混入黄灰色砂質シルトが少量混入
底砂混入。焼土と炭化物少量

Fig. 35 SD347, 378, 419 詳細図

人為的に埋められた形跡は見られない。出土遺物は、5世紀代の土師器の甕 (Fig. 39-162) 等が出土している。このことから、SK359の帰属時期は5世紀代と考えられるが、出土遺物が少なく用途は不明である。

SK361 (Fig. 36) C区の中央やや南側に位置する。平面形態は円形を呈し、南東隅がやや膨らむ。長軸0.73m、短軸0.66m、深さ0.20mを測る。断面は底面がやや丸みを帯びる船底状を呈する。堆積土は1層からなる。出土遺物は、5世紀後半～6世紀前半の土師器の坏 (Fig. 39-163)、甕片、高坏片が出土している。このことからSK361は、5世紀後半～6世紀前半の小振りの廃棄土坑と考えられる。

SK381 (Fig. 36) C区の西端付近に位置する。平面形態は円形を呈し、おおよそ南北方向に軸を持つ。長軸0.69m、短軸0.59m、深さ0.49mを測る。断面は中央底面が一段深くなり、おおよそ垂直方向に立ち上がる。堆積土は5層からなり、1と3～5層は水平堆積をするが、2層はビット状に落ち込む事から、再度掘削された可能性が考えられる。出土遺物は、5世紀代の土師器の甕 (Fig. 39-164)、坏片、高坏片が出土している。このことからSK361は、5世紀代の小振りの廃棄土坑と考えられる。

SK387 (Fig. 36) C区の中央やや西側付近に位置する。平面形態はおおよそ円形を呈するが、北西側にやや膨らむ。北北西-南南東方向に軸を持ち、SD389を切る。長軸0.76m、短軸0.61m、深さ0.32mを測る。断面は船底状を呈し、堆積土は1層からなる。出土遺物は、6世紀初頭の須恵器の甕や土師器の甕 (Fig. 39-165) 等が出土していることから、SK387は6世紀初頭の小振りの廃棄土坑と考えられる。

SK397 (Fig. 36) C区の西側に位置する。平面形態はおおよそ楕円形を呈する。北東-南西方向に軸を持ち、SD320を切る。長軸1.44m、短軸1.25m、深さ0.22mを測る。断面は底面がやや丸みを帯びた船底状を呈し、堆積土は2層からなる。出土遺物は、5～7世紀の土師器小片と土師器の甕の底部 (Fig. 39-166) が出土している。主体となる遺物の年代から、SK397は7世紀代の廃棄土坑と考えられる。

SK401 (Fig. 37) C区の西端付近に位置する。平面形態は細長い円形を呈する。おおよそ南北方向に軸を持ち、SK402に切られ、SK400とSK406を切る。長軸4.19m、短軸1.45m、深さ0.16mを測る。遺構の上部は、後世の地形改変の影響で削平を受けたものと考えられる。南端はテラスを持ち、一段高くなっている。断面は底面がほぼ平坦であるが、北側は凹凸が見られる。堆積土は2層からなる。出土遺物は、5世紀の土師器の甕片、高坏片、焼成の甘い6世紀前半の須恵器の坏蓋、甕片、土師器の甕片、鉢片、高坏片、甗片が出土している (Fig. 39-167～170)。遺構の形状が他の廃棄土坑と異なるため、明確な用途は不明瞭であるが、主体となる遺物の年代からSK401は6世紀前半の遺構と考えられる。

SK408 (Fig. 37) C区の北西端付近に位置する。平面形態は調査区北壁外へ広がるため不整形であるが、現状台形状を呈する。おおよそ南北方向に軸を持ち、SD409に切られ、SD320を切る。残存長軸2.62m、残存短軸2.17m、深さ0.24mを測る。断面は底面がやや凹凸が見られ、南側は緩やかに立ち上がる。西側はテラスを持ち一段高くなる。堆積土は4層からなるが、土層堆積状況から1層と2層は別遺構の可能性もある。出土遺物は、5世紀末の須恵器の坏身 (Fig. 39-171) や7世紀初頭の坏蓋 (Fig. 39-172) 等が出土している。主体となる遺物の年代から、SK408は7世紀初頭の廃棄土坑と考えられる。

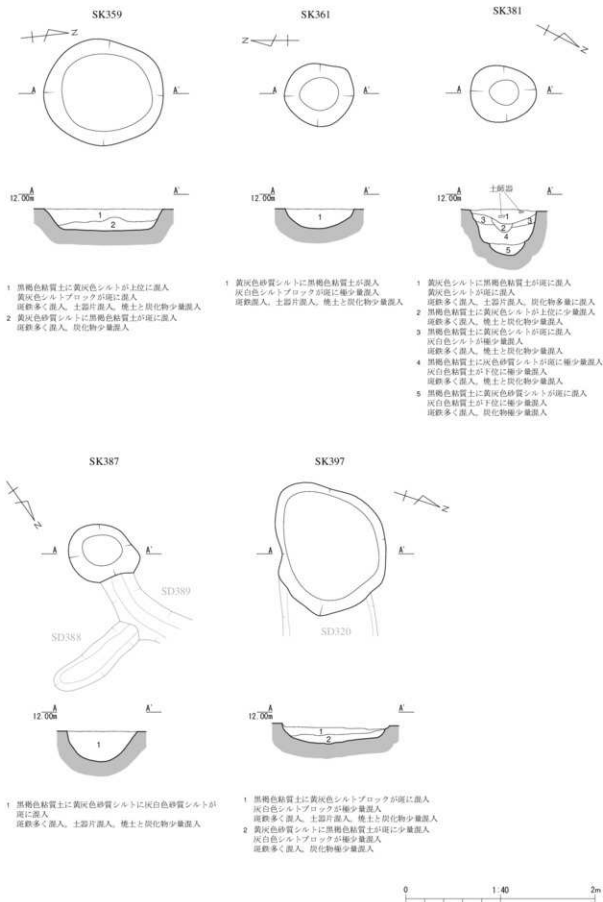


Fig. 36 SK359, 361, 381, 387, 397 詳細図

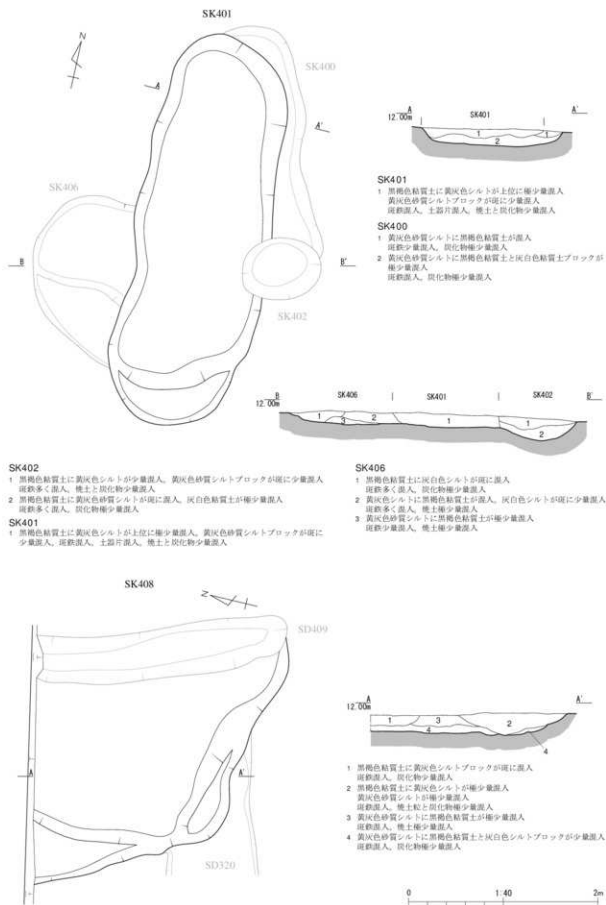


Fig.37 SK401, 408 詳細図

(2) 出土遺物

C区における出土遺物は、A・B区と比べて少量であった。C区では、A・B区において主体的であった7世紀代の遺物も一定量確認されたが、5世紀～6世紀代のものが主体を占める。特筆される遺物としては、遺構に伴うものだけではなく、5世紀の滑石製模造品や7世紀代とみられる石製紡錘車が確認された。

SD341 (Fig. 38) 148は須恵器の坏蓋である。7世紀中頃の湖西窯産と考えられる。149は土師器の坏身である。断面形は弓状を呈するが、丸い底部から少し屈曲を強めて口縁部に至る。5世紀後半～6世紀前半の遺物と考えられる。150は厚みのある滑石製白玉である。5世紀頃のものと考えられる。

SD342 (Fig. 38) 151は5世紀後半～6世紀前半の土師器の坏身である。口縁部は緩やかに内湾し、底部は丸く、やや深い作りである。

SD345 (Fig. 38) 152は土師器の坏身である。口縁部は内湾し、底部は平底を呈する。口縁部はヨコナデが施され、体部外面にはオサエがみられる。6世紀前半の遺物と考えられる。153と154は土師器の高坏である。153は坏部の破片である。やや内湾するものの直線的に開き、口唇部は細く端部は丸く仕上げられる。154はハの字状に開く脚部である。いずれも6世紀前半のものと考えられる。155は土師器の小型壺である。口縁部はやや緩やかにくの字形に開く。体部の内外面にはハゲ調整がみられるが、粗い作りである。6世紀前半のものと推定される。156は6世紀代の土師器の大型鉢である。器壁は厚く、底部は欠損しているが平底と推定される。内外面とも板ナデ調整が施されている。

SD347 (Fig. 38) 157は土製の甗玉である。約半分が欠損しており、元々の長さは3cm、直径は1.1cmほどと推定される。5～6世紀代のものと考えられる。

SD378 (Fig. 38) 158は6～7世紀代の土師器の甗である。底部の破片であり、内面にはハケとオサエが施されている。

SD382 (Fig. 38) 159は土師器の甗である。口縁部はくの字状に屈曲し、口唇部は先細りする。器壁は比較的薄い作りで、内外面ともにハケを残す。形態的特徴から6世紀代の遺物と考えられる。

SD415 (Fig. 38) 160は5世紀代の土師器の壺である。口縁部は僅かに段を持ち、複合口縁状を呈する。また、細片のため図示できなかったが、鉄滓1点が出土した。

SD419 (Fig. 38) 161は土師器の底部である。底部には籠目の瓦痕がみられる。5世紀後半～6世紀前半の遺物と考えられる。

SK359 (Fig. 38) 162は5世紀代の土師器の甗である。口縁部はくの字状に外反し、口唇部は先細りする。

SK361 (Fig. 38) 163は土師器の坏身である。口縁部は内湾し、口唇部は丸く仕上げられる。5世紀後半～6世紀前半のものと考えられる。

SK381 (Fig. 38) 164は5世紀代の土師器の甗である。口縁部はくの字状に屈曲し、口唇部は先細り、端部を丸く仕上げる。

SK387 (Fig. 38) 165は土師器の甗である。5世紀代の遺物とみられるが、頸の折れがやや弱いことから6世紀代に下る可能性もある。

SK397 (Fig. 38) 166は7世紀代の土師器の甗である。底部は平底で、器壁は薄い。内外面とも

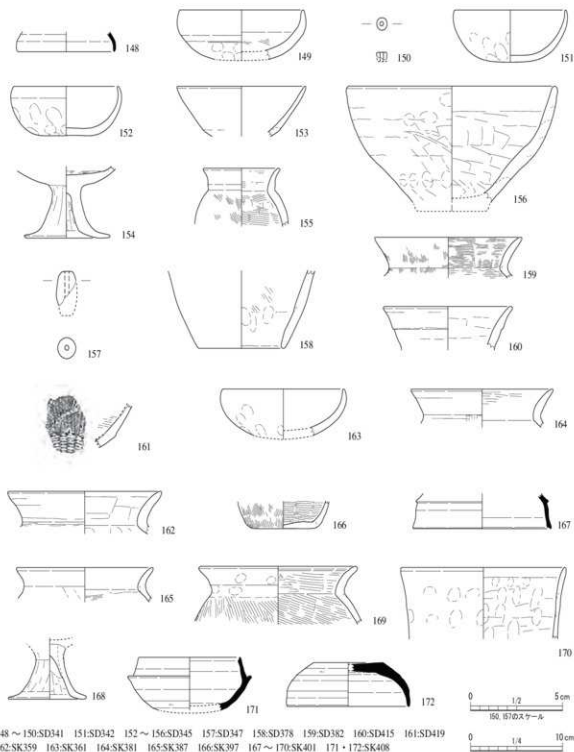


Fig. 38 C区 SD341 ~ 419, SK359 ~ 408 出土遺物

にハケ調整が施されている。

SK401 (Fig. 38) 167は須恵器の坏蓋である。天井部と口縁部の境には稜を有し、口唇部は沈線状に窪む端面をもつ。焼成は生焼けである。6世紀前半のものと考えられる。168は土師器の小型高坏である。脚部はハの字徐に開き、内外面に板ナゲが施される。169は土師器のくの字甕である。内外面はハケ仕上げで、口縁部にはヨコナゲを施している。170は土師器の鉢としたが、小破片が

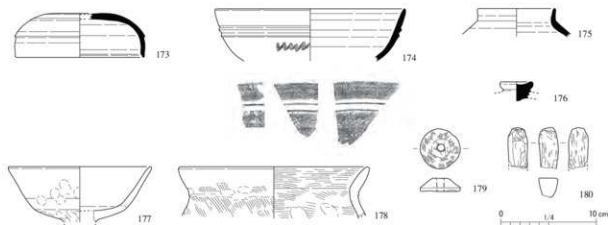


Fig. 39 C区 包含層出土遺物

らの推定であるため確証はない。内外面ともにオサエ・ナデ仕上げで、口縁部だけにヨコナデを施す。168～170は、いずれも6世紀前半の遺物と考えられる。

SK408 (Fig. 38) 171は須恵器の坏身である。口縁部の立ち上りは高く、口唇部は段状を呈する。5世紀末～6世紀初頭のものと考えられる。172は6世紀末～7世紀初頭の須恵器の坏蓋である。口縁部と天井部との境は不明瞭であり、天井部は未調整で植物の茎圧痕がみとめられる。

包含層 (Fig. 39) 173は須恵器の坏蓋である。口縁部と天井部の境には稜があり、口唇部には段が伴う。天井部はケズリ調整で、内面には同心円のスタンプ文が残る。6世紀初頭の有玉窯産と推定される。174は須恵器の無蓋高坏である。2条の突帯と櫛描波状文が施されている。口唇部は尖頭状に作られており、坏部は浅い形状であることから、5世紀後半～6世紀初頭の遺物と考えられる。175は6世紀代の須恵器の短頸壺である。直立する短い口縁部がつき、肩には蓋の痕跡が残る。176は須恵器の摘み蓋である。摘みはボタン状を呈するが、中央は僅かに膨らみ、少し山形状になる。6世紀代のものと考えられる。

177は土師器の高坏である。内面は平滑であり、ミガキ調整が施されていた可能性がある。形態的特徴から5世紀後半の遺物と考えられる。178は6～7世紀代の土師器の甕である。口縁部はヨコナデがみられ、内外面はハケ調整が施される。

179は石製紡錘車である。断面台形をしたものであるが、砥痕を残し凹凸もあって作りは雑である。断面形が台形の紡錘車は、6～8世紀代に見られるが、盛行期の7世紀と捉えるのが自然であると考えられる。石材は黒色片岩あるいは粘板岩である。180は四角柱をした小型の砥石である。約半分を欠損している。石材は泥岩あるいは粘板岩であり、目の細かな上砥である。

4 D区の調査

(1) 検出遺構

D区は開発範囲の南東側で、C区の西側に位置する。基本層序の項で述べた理由から、II b-1層の上面で遺構検出作業を行い、主に古墳時代の溝1条、土坑1基、小穴2基を確認した。

(2) 出土遺物

D区の出土遺物は、SD316から7世紀の須恵器壺体部片、土師器甕片が、SK319から6世紀の土師器の甕片、坏片が出土している。

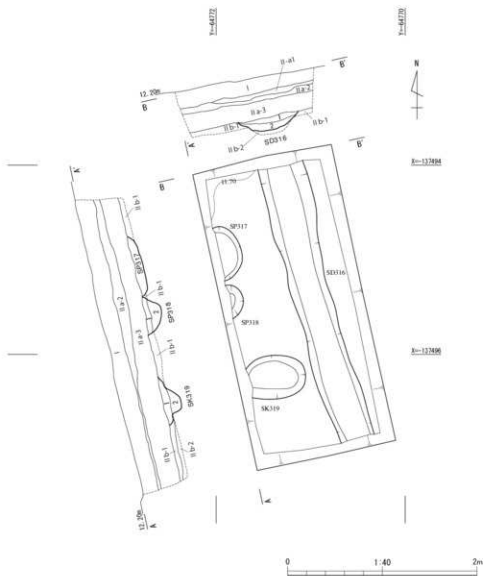


Fig. 40 D区 遺構配置図

第3章 総括

1 発掘調査の成果

恒武西宮遺跡 32 次発掘調査では、近代以降の耕作に伴う擾乱が数基確認されたものの、古墳時代と戦国時代を中心とした遺構や遺物が比較的良好な状態で確認された。しかしながら、確認された遺構については、明確な用途・性格の分かるものは少なかった。今回の調査地は、恒武西宮遺跡では中心近くに、恒武遺跡群の中では中心からやや南に位置するものの、その土地利用については不明瞭であると言わざるを得ないが、確認した遺構からは少なくとも居住域や墓域として利用されたものではなかったと考えられる。

このような状況ではあったが、古墳時代では掘立柱建物 1 棟や大型を含む廃棄土坑数基、溝数条が確認され、その土坑や溝の中には完形あるいはほぼ完形に近い遺物が人為的に配されたと思われる遺構もあり、何らかの祭祀儀礼に関係している可能性が考えられる。また戦国時代の遺構では、道路側溝や屋敷を囲む区画溝が確認され、周辺の調査成果と整合性のある結果が得られた。ただし、屋敷跡については調査区外に位置すると考えられ、今回の調査では確認されなかった。

平安時代から鎌倉時代の遺構と遺物については、平安時代では深く掘られていた事で残ったと考えられる井戸（SE208）1 基が確認されたのみで、鎌倉時代の遺構については明確なものは確認されていない。遺物については、遺物包含層から少量の破片は出土するものの、まとまった状態での出土は確認されなかった。これは、遺物包含層がほぼ削平されていた状況から、近世以降の地形形変にとまらぬ、当時の生活面が既に削平されていた事が原因と考えられる。

以下に今回の調査で確認された主な遺構と遺物について、その特徴を述べる。

掘立柱建物 C 区の東端で 1 棟確認された。出土遺物から 7 世紀と考えられ、SP324・329・331 の 3 基の小穴で構成されている。調査区東外へ広がるため、桁間と梁間については不明であるものの、おおよそ南北方向の軸方向で 2 間 3.64m、各柱間の間隔は 1.70m、1.94m を測る。柱間距離は統一されていない。3 基の柱穴の規模から考えると、2 間×1 間か 2 間×2 間の側柱建物であると考えられる。SP324 と 331 の断面から柱根痕が確認されたが、柱根そのものは残っていなかった。また土層の堆積状況から柱根を再利するために引き抜いた痕跡も確認されなかった。A 区では小穴は数基確認されているが、調査区内で散見される程度であった。一方 B 区では、小穴は調査区東端に比較的多く見られたことから、C 区同様今回調査した範囲の東側に、B 区の掘立柱建物が存在する可能性が考えられる。

溝 A・B 区で検出した溝は、SD66 は出土遺物から古墳時代後半の 7 世紀と考えられ、SD03・11・239・242・243・260 が、出土遺物から 15～16 世紀、特に戦国時代を中心としたものと考えられる。これら以外の溝は概ね東西方向に軸を持つ幅の狭いものが多く、ほとんどが耕作に伴う溝であると考えられる。SD66 は、完形に近い須恵器平瓶や完形の須恵器半球形環部高坏が出土しており、出土状況から人為的に配された可能性が考えられるが、祭祀儀礼に関するかどうかは不明である。SD03・11 は形状や出土遺物、また過去の調査事例から居館ではないものの屋敷地を囲む区画溝と

考えられる事から、調査区東側に16世紀の屋敷跡が広がる可能性が考えられる。SD239は、恒武西宮遺跡3次及び8次調査で確認されたSD32とSD05と比較し、溝の形状、検出位置、延伸方向や出土遺物から、同一の道路側溝遺構と考えられる。C区で検出した溝は、おおよそ東西方向に軸を持つ溝(SD345・347・419)、北西-南東方向に軸を持つ溝(SD342)、東北東-西南西方向に軸を持つ溝(SD341・378)、南北方向に軸を持つ溝の4種が見られ、出土遺物から古墳時代後半の5世紀～7世紀前半と考えられる。また出土遺物の時期から、東北東-西南西方向に軸を持つ溝が6～7世紀と最も新しい。溝の用途については、おおよそ東西方向や東北東-西南西方向に軸を持つ溝は、形状から耕作に関する溝の可能性が考えられるが、これらの軸方向以外の溝については、用途は不明瞭である。またA・B区で確認した戦国時代の溝は、C区では溝の形状や出土遺物からは確認出来なかったが、調査区西端で確認したSX385が遺構埋土からその可能性が考えられるものの、調査区外へと広がる事から詳細は不明である。

土坑 A・B区で検出した土坑は、比較的大型のものが多く遺物も一定量出土している。しかしそれら遺物は小破片がほとんどで、混入したものであり、各土坑の用途については廃棄土坑と考えられる。その中でSK128やSK289は、完形の遺物が人為的に配された状況で出土している事から、何らかの祭祀儀礼が行われた可能性が考えられるものの、その他祭祀に係る遺物が共伴していない事からやや根拠に乏しい。しかし、同じA・B区より滑石製模造品の勾玉形や有孔円盤、白玉が出土していることも事実である。C区で検出した土坑は、A・B区で検出した土坑と様相はやや異なり、大型のものが少なく、小型の土坑が多い。また出土遺物も破片であり、完形で出土したものは無い。

小穴 A・B区で検出した小穴は柱根痕の有無に係らず、現状掘立柱建物を構成するものではなく、一括で且つ完形ないしそれに近い状態で遺物が出土しなかったため、これらの詳細な用途は不明である。しかし、B区東側で検出した小穴群については、調査区東外で小穴が確認できれば、掘立柱建物を構成する可能性が考えられる。

出土遺物 古墳時代から戦国時代に及ぶ遺物が出土している。中でも古墳時代中期から飛鳥時代の遺物が中心であり、奈良時代以降の遺物の出土量は少ない。また完形での出土は極めて少なく、ほとんどが破片で出土している事も今回の調査の特徴である。古墳時代中期から平安時代の遺物としては、須恵器・土師器・灰釉陶器が挙げられる。石製品には古墳時代中期の祭祀遺物である滑石製模造品の勾玉形と有孔円盤と白玉があり、古墳時代後期から飛鳥時代のものには装身具である土製の霽玉や丸玉、生産用具の石製紡錘車や砥石が挙げられる。これら石製品は、過去の調査でも出土例が多く、恒武西宮遺跡を理解する上での特徴的な遺物と考えられる。土製品には古墳時代の手づくね土器や古代及び中世の土鍾が挙げられる。その他、桃核、鉄滓が出土している。

外来系土器として、古墳時代中期には大阪府にある陶邑窯産の初期須恵器が出土している。また、東駿河系土師器の壺や坏身があり、飛鳥・奈良時代の遺物には畿内系土師器の坏身、伊勢系土師器の甕、東三河産の製塩土器などが少量ではあるが出土している。

中世の遺物は13～16世紀の遺物が出土しているが、戦国時代(16世紀代)を中心としている。青磁碗、山茶碗、天目茶碗、灰釉緑釉皿、常滑鉢、土師器羽釜、内耳鍋、カワラケなどがいずれも小片で少量出土している。

2 恒武西宮遺跡の変遷

恒武西宮遺跡は、古墳時代～中世にかけての複合遺跡である。今回おこなった32次発掘調査では、近代以降の耕作に伴う擾乱の影響も一部で見られたが、比較的良好に遺構が残存しており、古墳時代と戦国時代を中心とした遺構・遺物を確認した。なかでも、古墳時代後期と考えられる掘立柱建物や中世の屋敷地の区画溝等が検出されたことが大きな成果と言える。そこで、今回の調査区における時代ごとの調査成果と、これまでの調査成果から見た恒武西宮遺跡とその周辺遺跡の様相をまとめていきたい。

古墳時代 古墳時代中期～終末期の遺構・遺物が確認された。周辺の調査では古墳時代前期の遺構・遺物が検出されているが、今回の調査では明確な遺構及び遺物は確認されなかった。近年の発掘調査において、今回の調査区の北東から南東側にかけて古式土師器が出土していることから、周辺に集落が展開している可能性が考えられる。古墳時代中期の遺構・遺物は少数ながら確認されたが、主体となるのは古墳時代後期から終末期にかけてのものである。遺構内からの出土遺物は小片のものが多く、性格を明らかにできたものは多くはないが、廃棄土坑や掘立柱建物跡が検出された。当該地の北側及び北西側では、過去の発掘調査（恒武西宮遺跡1・3・6次、恒武西浦遺跡1次）において、古墳時代中期～後期の集落跡が確認されている。古墳時代中期から後期初頭の集落は、5世紀代の自然流路である山ノ花大溝の東岸周辺に形成され、7世紀になると集落域はさらに東側に広がる傾向がみられる。出土遺物も6～7世紀代のものが増加する傾向がみられ、人口増加に伴い、集落域が東へと広がっていったことが想定される。なお、今回の調査区の東側では、これまでに建物跡等は確認されておらず、加えて面的調査が行われていない等の不明確な点も多いため、当該地が集落の縁辺部にあたる可能性もあるが、今後集落域がさらに東側から南側にかけて広がる可能性が考えられる。

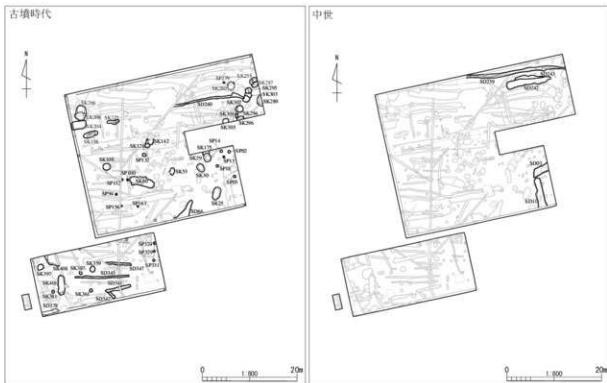


Fig. 41 恒武西宮遺跡32次調査区の変遷

また、注目すべき遺物として滑石製模造品が出土した。恒武遺跡群内では山ノ花遺跡において、5世紀代の自然流路内から木製祭祀具と一緒に多くの滑石製模造品が出土しており、恒武西宮遺跡でも1次調査において、滑石製模造品が複数点出土している。なお、滑石製模造品は、恒武西宮遺跡におけるその他の調査（3次調査F区、21次調査SD47、26次調査SK04）においても散発的に出土しており、いずれも5～6世紀代に位置づけられている。こうした散発的な出土状況は混入品の可能性も考えられるが、小規模な祭祀行為が継続的行われていたと見られる（2021 鈴木京太郎）。今回の調査で確認した滑石製模造品も共伴遺物等から、5～6世紀代に位置づけることができ、当該地周辺においても小規模な祭祀行為が行われていたと考えられる。

鎌倉時代 今回の調査では、鎌倉時代と考えられる明確な遺構は確認されなかった。遺物も包含層や遺構内から山茶碗等の小片が極めて少量確認されたのみである。恒武西宮遺跡における過去の発掘調査では、井戸跡（恒武西宮遺跡3次SE05、恒武西宮遺跡6次SE601）が確認されており、集落跡の存在が想定される。しかし、依然として当遺跡における鎌倉時代の様相は不明な点が多いと言わざるを得ないが、当該地の東側で行われた23次調査では山茶碗が確認されていることから、東側周辺に居館跡等が存在する可能性が考えられる。

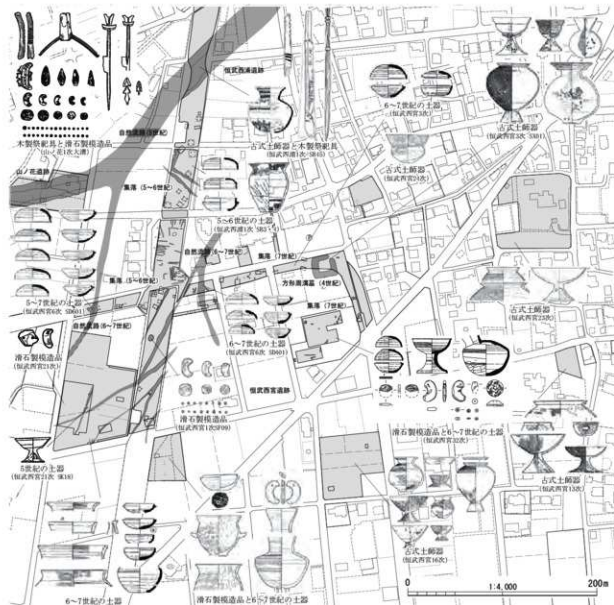


Fig. 42 恒武西宮遺跡周辺の古墳時代の様相

戦国時代～近世 調査区の南東で戦国時代～近世初頭にかけての屋敷地を区画する溝を確認した。区画溝は幅が1.5m程であり、出土遺物は16世紀代の内耳鍋の小片を少量確認した。戦国時代の屋敷地は、過去の発掘調査において、今回の調査区の北側から北西側にかけて確認されており、今回検出した区画溝は、周辺での調査事例と出土遺物から考えると一般的な屋敷地と捉えられ、居館の可能性は見出しがたい。なお、明確な遺構は確認されていないものの、近年当該地の東側で行われた発掘調査において、戦国時代の遺物が出土しており、加えて今回の発掘調査で調査区の南東側で区画溝を検出したことから、同時代の屋敷地が東側から南側にかけて広がる可能性がある。

また、道路側溝と考えられる溝を検出した。検出した溝は、今回の調査区の東側近接地で行った3・8次調査で検出した溝（3次調査SD32、8次調査SD05）と形状及び出土遺物の年代が酷似することから同一遺構と見られ、さらに西進することが確認された。恒武西宮遺跡周辺では、戦国時代に形成された地割が現在に受け継がれている状況が確認でき（鈴木一有2002、井口2009）、今回の調査において道路側溝の延長部が検出されたことは、現在まで地割が踏襲されていることが追認されたと言える。

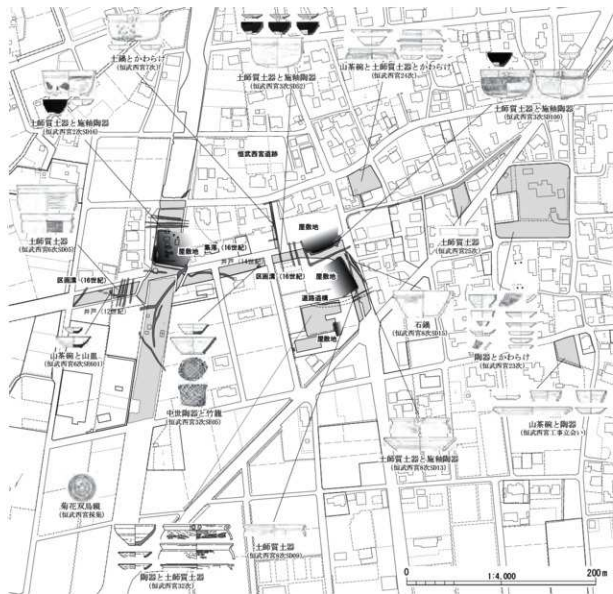


Fig. 43 恒武西宮遺跡周辺の中世の様相

【参考文献】

- 井口智博 2009 「恒武西宮遺跡における中世集落」『恒武西宮遺跡8次』
- 太田好治・鈴木一有 2001 「浜松市の中世遺跡にかかわる基礎資料」『浜松市博物館報』第14号
- 鈴木一有 2001 「浜松市域における中世集落の消長と地域開発」『浜松市博物館報』第14号
- 鈴木一有 2002 「戦国時代にかんする諸問題」『恒武西宮遺跡』
- 鈴木京太郎 2021 「第4章 詳細報告 3 恒武西宮遺跡 26・28・29次調査報告（2）26次調査の成果」
『令和元年度 浜松市文化財調査報告』
- 鈴木正貴 1996 「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕 そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2000 『恒武西宮・西浦遺跡』
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2002 『恒武西宮遺跡Ⅱ 笠井若林遺跡』
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004 『恒武東覚遺跡』
- (財) 浜松市文化協会 1998 『山ノ花遺跡』
- (財) 浜松市文化協会 2002 『恒武西宮遺跡』
- (財) 浜松市文化協会 2009 『恒武西宮遺跡8次』
- 浜松市教育委員会 2001 『海東遺跡/法ヶ崎遺跡』
- 浜松市教育委員会 2003 『浜松市遺跡調査集報』
- 浜松市教育委員会 2004 『有玉古窯』
- 浜松市教育委員会 2009 『浜松市遺跡調査概報』
- 浜松市教育委員会 2011 『平成21年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 2012 『平成22年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 2016 『平成26年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 2017 『平成27年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 2018 『平成28年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 2018 『恒武西宮遺跡6』
- 浜松市教育委員会 2019 『平成29年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 2020 『平成30年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 2021 『令和元年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 2022 『令和2年度 浜松市文化財調査報告』

出土遺物観察表

凡例

「残存率」 全体における残存している割合を% (5%きざみ) で示す

「反」 反転して図化したもの

大きさの単位は「cm」 重量の単位は「g」

「色調」は『標準土色粘』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠している

遺物観察表(1)

Fig	番号	実測 番号	調査 区分	遺構・部位	種類	類別	部位	残存	反転	口縁 長さ	厚さ	底径 幅	色調	構成	備考
26	1	81	B	S061	土師器	甕	底部	5米	-	-	(3.3)	-	褐色	良	外面カゴメ・ナデ 内面粗いハケ
26	2	270	B	S066	渡志器	平瓶	頸～底部	70	-	-	(14.5)	-	灰色	良	内外面回転ナデ 外面ケズリ・上部2条沈線、下部1条沈線
26	3	10	B	S066	渡志器	高坏	突形	100	-	14.0	12.4	10.7	灰白色	良	内外面回転ナデ 内面節部しぼり 外面節部3条沈線、ケズリ後ナデ
26	4	65	B	S069	土師器	蓋椀餅坏	口縁部	10	反	(13.8)	(3.9)	-	にぶい褐色	良	内外面 底面により不明
26	5	66	B	S073	渡志器	坏身	口縁～体部	10	反	(12.8)	(3.2)	-	灰色	良	内外面 回転ナデ
26	6	174	B	S096	渡志器	ハンソウ	口縁部	10	反	(9.4)	(2.3)	-	灰白色	良	内外面 回転ナデ
26	7	132	B	S0144	土師器	甕	口縁部	10	反	(18.9)	(3.7)	-	にぶい褐色	良	外面オサエ後ナデ・タテハケ 内面ヨコハケ・ナデ
26	8	156-3	B	S0147	渡志器	坏身	口縁～体部	10	反	(14.6)	(3.4)	-	灰白色	良	内外面 回転ナデ
26	9	156-1	B	S0147	土師器	高坏	坏部	20	反	(15.0)	(4.0)	-	褐色	良	内外面 回転ナデ
26	10	156-2	B	S0147	土師器	高坏	坏部	20	反	-	(3.8)	-	にぶい褐色	良	外面後ナデ後ヨコナデ・オサエ 内面ヨコナデか・ハケ
26	11	246	B	S0149	土師器	小鉢	口縁部	25	反	(15.8)	(4.8)	-	褐色	良	内外面ヨコナデ 外面オサエ 内面ナデ
26	12	247	B	S0150	土師器	台付甕	口縁部	10	反	(23.6)	(4.7)	-	にぶい褐色	良	内外面 ヨコハケ後ヨコナデ
26	13	429	A	S0216	渡志器	有台坏身	口縁～底部	20	-	14.3	3.9	-	灰白色	良	内外面回転ナデ 外面底部ケズリ 内面底部同心円スタンプ
26	14	430-1	A	S0216	土師器	甕	底部	20	反	-	(3.5)	(5.6)	にぶい褐色	良	内外面 ハケ・ナデ
26	15	430-2	A	S0216	土師器	鉢	口縁部	10	反	(11.0)	(2.5)	-	にぶい褐色	良	外面ヨコナデ・ハケ後ナデ 内面ハケ後ナデ
26	16	370	A	S0226	土師器	台付甕	口縁部	10	反	(31.1)	(3.4)	-	にぶい褐色	良	内外面ヨコナデ 外面オサエ・ハケ 内面粗いハケ
26	17	360	A	S0239	土師器	内耳鍋	口縁部	20	反	(21.4)	(4.7)	-	にぶい黄褐色	良	内外面ヨコナデ 外面オサエ・ナデ・ハケ 内面ハケ
26	18	340	A	S0239	土師器	内耳鍋	口縁部	10	反	(23.6)	5.2	-	にぶい黄褐色	良	内外面ヨコナデ 外面オサエ・ケズリ 内面ハケ後ナデ
26	19	456	A	S0242	石製品	勾玉形	-	-	3.8	0.55	2.4	褐色	-	重量0.1 滑石	
26	20	355	A	S0260	石製品	丸玉	突形	100	-	0.75	0.5	0.75	黒褐色	-	重量0.3 滑石か
26	21	319-1	A	SE208	灰輪陶器	碗	底部	10	反	-	(2.8)	(9.9)	灰白色	良	内外面回転ナデ 外面回転ケズリ
26	22	319-2	A	SE208	渡志器	皿	口縁～底部	10	反	(16.0)	2.3	(13.5)	灰白色	良	内外面回転ナデ 外面底部回転ケズリ
26	23	319-3	A	SE208	土師器	皿	口縁～底部	10	反	(19.4)	1.6	-	灰黄褐色	良	内外面ヨコナデ 外面オサエ・ナデ
26	24	319-4	A	SE208	土製品	土練	-	-	(3.1)	1.0	1.0	灰黒色	-	重量2.9	
27	25	201	B	SK25	土師器	鉢	口縁～体部	15	反	(19.8)	(6.6)	-	褐色	良	内外面口縁部ヨコナデ 内外面オサエ・磨減
27	26	47	B	SK28	石製品	白玉	突形	100	-	0.6	0.25	0.6	淡褐色	-	重量0.1 滑石
27	27	48	B	SK29	渡志器	坏身	口縁～底部	15	反	(8.7)	(3.2)	-	灰色	良	内外面回転ナデ 外面底部回転ケズリ
27	28	158	B	SK29	渡志器	高坏	坏部	30	反	(15.4)	(5.1)	-	灰白色	良	内外面回転ナデ 外面ケズリ
27	29	276	B	SK29	土師器	甕	底部	20	一部反	-	7.3	5.5	にぶい褐色	良	外面タテハケ 内面ヨコハケ
27	30	49	B	SK30	渡志器	坏身	天～口縁	60	反	(11.0)	(3.4)	-	灰色	良	内外面回転ナデ 外面天頂部内出角
27	31	194	B	SK30	土師器	鉢	口縁～底部	60	一部反	(12.1)	5.0	4.2	淡黄褐色	良	内外面口縁部ヨコナデ 外面ハケ後オサエ・ナデ 内面ハケ
27	32	71	B	SK30	土師器	甕	口縁～胴部	15	反	(17.7)	(6.0)	-	淡黄褐色	良	内外面口縁部ヨコナデ 外面オサエ・タテ板ナデ 内面オサエ・板ナデ
27	33	205-1	B	SK53	土師器	甕	口縁部	25	反	(14.9)	(5.5)	-	褐色	良	内外面ヨコナデ 外面タテハケ 内面ヨコハケ
27	34	205-2	B	SK53	土師器	甕	底部	5米	-	-	(2.1)	-	褐色	良	外面カゴメ 内面ナデ
27	35	87	B	SK57	土師器	高坏	坏部	20	反	(14.0)	(5.0)	-	にぶい褐色	良	内外面ヨコナデ 外面オサエ後ナデ
27	36	252	B	SK59	土師器	直口甕	口縁部	20	反	(9.5)	(4.8)	-	褐色	良	外面ナデ 内面板ナデ
27	37	55	B	SK68	土師器	平づくね	口縁～底部	50	一部反	(6.3)	3.8	3.0	にぶい褐色	良	内外面 オサエ
27	38	96-1	B	SK80	渡志器	坏身	口縁～底部	25	反	(10.0)	3.8	(4.0)	灰色	良	内外面ヨコナデ 外面底部回転ケズリ・「一」のへら記号
27	39	96-4	B	SK80	土師器	甕	口縁～体部	15	反	(14.8)	(4.5)	-	にぶい褐色	良	内外面口縁部ハケ後ヨコナデ 外面タテハケ 内面板ナデ
27	40	96-2	B	SK80	土師器	甕	口縁部	15	反	(11.8)	(4.0)	-	明褐色	良	内外面 ハケ後ヨコナデ
27	41	96-3	B	SK80	土師器	甕	口縁～体部	15	反	(16.6)	(6.6)	-	にぶい褐色	良	内外面口縁部ハケ後ヨコナデ 外面タテハケ 内面 ハケ
27	42	96-6	B	SK80	土師器	甕	把手	5	-	-	-	-	淡褐色	良	外面ナデ 把手部外径(23.0)
27	43	96-5	B	SK80	土師器	鉢	口縁～体部	15	反	(13.4)	(6.5)	-	明褐色	良	内外面口縁部ヨコナデ 外面タテハケ 内面板ナデか・オサエ
27	44	96-8	B	SK80	渡志器	壺	口縁～胴部	5	反	(9.4)	(4.6)	-	灰色	良	内外面回転ナデ 外面波状文
27	45	96-9	B	SK80	土師器	坏身	底部	20	反	-	(1.3)	(3.6)	黄褐色	良	外面オサエ・ナデ 底部植物痕か 内面磨減により不明 数量数

遺物観察表(2)

Fig.	番号	実測 番号	調査 地区	遺構・層位	種別	類別	部位	残存	反転	口縁 長さ	器高 長さ	底径 幅	色調	焼成	備考
27	46	96-7	B	SK80	石製品	叩石	完形	100	-	10.7	3.1	4.6	-	-	重量249 輝綠岩か
27	47	280	B	SK88	土師器	甕	底部	40	一部反	-	(8.1)	6.0	にぶい褐色	良	内外面オサエ・ナデ・ハケ 内面ハケ・オサエ
27	48	283	B	SK108	土師器	甕	底部	50	反	-	(4.1)	(5.6)	にぶい褐色	良	外面タテハケ・オサエ 内面ヨコハケ
27	49	90	B	SK126	須恵器	坏蓋	天〜口縁	25	反	(12.8)	(4.5)	-	青灰色	良	内外面回転ナデ 外面天頂部回転ケズリ
27	50	375	A	SK126	土師器	甕	底部	5.6	-	-	(2.0)	-	にぶい黄褐色	良	外面カゴメ・コウ状(4方) 内面ナデ
27	51	225	B	SK128	土師器	壺	口縁〜底部	95	-	14.1	17.3	5.8	褐色	良	内外面口縁部ヨコナデ 外面タテハケ・オサエ 内面ヨコハケ・オサエ
27	52	92	B	SK133	土師器	甕	口縁部	10	反	(17.3)	(4.2)	-	にぶい褐色	良	内外面ハケ後ヨコナデ 内面オサエ
27	53	258	B	SK133	土師器	甕	口縁〜底部	30	反	(17.8)	(3.8)	-	にぶい褐色	良	内外面口縁部ヨコナデ 外面タテハケ 内面ヨコハケ
27	54	261	B	SK142	土師器	製塩土器	体部	5	-	-	(2.6)	-	淡黄褐色	良	外面オサエ・ナデ 内面ナデ
27	55	267	B	SK172	土師器	甕	口縁部	30	反	(17.4)	(5.6)	-	にぶい褐色	良	外面ヨコナデ・タテ板ナデ 内面板ナデ
27	56	285	B	SK176	須恵器	坏蓋	天〜口縁	20	反	(10.0)	3.2	-	灰色	良	内外面回転ナデ 外面天頂部回転ケズリ 内面天頂部内当具
28	57	306	A	SK204	陶器	常滑鉢	口縁部	30	反	(24.6)	(5.2)	-	灰色	良	内外面回転ナデ 外面オサエ
28	58	321-1	A	SK204	土師器	坏身	口縁部	30	反	(11.1)	(3.1)	-	灰色	良	内外面 回転ナデ
28	59	321-2	A	SK204	土師器	鉢	口縁〜体部	20	反	(11.4)	(4.4)	-	にぶい黄褐色	やや不良	内外面ヨコナデ 外面ナメハケ 内面板ナデか
28	60	321-3	A	SK204	土師器	鉢	口縁〜体部	10	反	(10.4)	(3.4)	-	にぶい黄褐色	良	内外面ヨコナデ 外面オサエ 内面ハケ
28	61	402	A	SK204	土師器	甕	口縁部	20	反	(15.8)	(6.1)	-	にぶい褐色	良	内外面口縁部ヨコナデ 外面ハケ 内面ハケ・板ナデ
28	62	321-4	A	SK204	土師器	甕	口縁部	20	反	(16.4)	(3.1)	-	にぶい褐色	やや不良	内外面 回転ナデ
28	63	321-5	A	SK204	土師器	高型形	脚部	30	一部反	-	(3.3)	(6.2)	にぶい黄褐色	やや不良	内外面 ヨコナデ・オサエ・ナデ
28	64	320	A	SK204	石製品	有孔内罐	-	-	(1.2)	0.3	2.3	緑灰色	-	重量1.6 滑石	
28	65	307	A	SK206	陶器	壺	口縁部	20	反	(10.7)	(1.8)	-	灰白色	良	内外面 回転ナデ
28	66	432	A	SK206	須恵器	長頸壺	口縁部	40	一部反	9.8	(10.7)	-	灰白色	やや不良	内外面 回転ナデ
28	67	433	A	SK206	須恵器	舞台風壺	頸部〜底部	80	一部反	-	(14.0)	-	灰色	良	内外面回転ナデ 外面2条波線・3・回転ケズリ
28	68	403-1	A	SK206	土師器	高型形	脚部	30	反	-	(3.8)	(5.5)	にぶい黄褐色	良	外面ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面ヨコナデ・オサエ
28	69	403-2	A	SK206	須恵器	高坪	脚部	20	反	-	(5.2)	(10.0)	灰白色	良	内外面回転ナデ 長方形カシ方
28	70	376	A	SK221	須恵器	高坪	坏部	10	反	(15.6)	(5.5)	-	灰白色	良	内外面回転ナデ 外面波状文
28	71	434	A	SK221	土師器	鉢	口縁〜底部	95	-	7.3	3.8	3.7	にぶい褐色	良	内外面口縁部ヨコナデ 外面ハケ・オサエ後ナデ 内面ハケ・ヨコナデ
28	72	448	A	SK255	須恵器	坏身	口縁〜底部	90	-	7.8	2.8	4.9	灰色	良	内外面回転ナデ 外面底部回転ケズリ
28	73	381-2	A	SK255	須恵器	坏身	坏部	30	反	(7.9)	(2.7)	-	灰色	良	内外面回転ナデ 外面ケズリ
28	74	446	A	SK255	須恵器	高坪	脚部	30	-	-	(6.4)	-	灰白色	良	内外面 回転ナデ
28	75	381-4	A	SK255	土師器	甕	口縁部	10	反	(15.4)	(4.0)	-	にぶい褐色	良	内外面ハケ後ヨコナデ 内面オサエ・ナデ
28	76	447	A	SK255	土師器	把手平鍋	口縁〜体部	30	-	(28.4)	(15.5)	-	にぶい褐色	良	内外面口縁部ハケ後ヨコナデ 外面タテハケ・オサエ 内面ヨコハケ・オサエ
28	77	381-3	A	SK255	土師器	ハソウ	底部	10	反	(22.4)	(3.5)	-	にぶい黄褐色	良	内外面ヨコナデ 外面ハケ 内面ヨコハケ
28	78	337	A	SK271	須恵器	坏身	口縁〜体部	15	反	(12.3)	(4.1)	-	灰白色	良	内外面回転ナデ 外面回転ケズリ
28	79	435-2	A	SK280	土師器	坏身	口縁〜底部	15	反	(14.4)	(5.4)	-	褐色	良	内外面口縁部ナデ 内面オサエ・ナデ
28	80	435-1	A	SK280	土師器	高坪	脚部	80	-	-	(8.7)	7.7	褐色	良	外面オサエ・タテナデか 内面ナデ・ヨコ位のナデか
28	81	365	A	SK280	土師器	台付壺	口縁部	10	反	(29.8)	(4.9)	-	にぶい黄褐色	良	外面ハケ・オサエ後ヨコナデか 内面ハケ後ヨコナデ
28	82	385	A	SK288	土師器	壺	口縁部	10	反	(26.4)	(2.8)	-	淡黄褐色	良	内外面ヨコナデ 外面ハケ 内面ヨコナデか 折返し口
28	83	437	A	SK289	須恵器	坏身	完形	100	-	8.7	3.2	5.1	灰色	良	内外面回転ナデ 外面ケズリ・底部に「一」のへり記号
28	84	449	A	SK289	須恵器	坏蓋	完形	100	-	9.8	4.1	-	灰色	良	内外面回転ナデ 外面天頂部回転ケズリ 内面天頂部縁直
28	85	436	A	SK289	須恵器	坏蓋	完形	100	-	9.4	3.9	-	灰色	良	内外面回転ナデ 外面ケズリ
28	86	368	A	SK289	須恵器	坏蓋	天〜口縁	10	反	(9.5)	3.5	-	灰色	良	内外面回転ナデ 外面天頂部ケズリ 内面天頂部内当具
29	87	438	A	SK294	須恵器	坏身	口縁〜底部	60	-	9.8	4.3	5.0	灰色	良	内外面回転ナデ 外面ケズリ・底部に板目痕 内面底部内当具
29	88	439	A	SK294	土師器	高坪	口縁〜脚部	65	反	(16.7)	(10.3)	(10.4)	褐色	良	内外面口縁部ヨコナデ 外面オサエ・ナデ 内面板ナデ後ナデ・ヨコナデ・脚部板ナデ

遺物観察表(3)

Fig.	番号	実測 番号	調査 区分	遺構・層位	種類	類別	部位	残存	反転	口径 長さ	器高 長さ	底径 幅	色調	構成	備考
29	89	450	A	SK295	土師器	壺	口縁~体部	30	反	(18.6)	(7.1)	-	にぶい褐色	良	内外蓋口縁部ハケ後ヨコナデ 内外 体部ハケ後ナデ・オサエ
29	90	389-9	A	SK296	須恵器	坏身	口縁~底部	30	反	(7.6)	3.1	-	灰色	良	内外蓋口縁ナデ 外面ケズリ・底部 破目痕 内面底部指線圧痕
29	91	389-8	A	SK296	須恵器	坏身	口縁~底部	50	反	(8.0)	2.4	-	灰色	良	内外蓋口縁ナデ 外面ケズリ
29	92	389-2	A	SK296	須恵器	坏身	口縁~底部	40	反	(8.3)	2.5	(3.6)	灰色	良	内外蓋口縁ナデ 外面底部に「x」 のへう記号 内面底部折ナデ
29	93	413	A	SK296	須恵器	坏蓋	天~口縁	50	-	8.8	3.4	-	灰白色	良	内外蓋口縁ナデ 外面ケズリ
29	94	389-1	A	SK296	須恵器	坏蓋	天~口縁	30	-	9.5	(3.5)	-	灰色	良	内外蓋口縁ナデ 外面ケズリ 内面 天頂部内面真直
29	95	389-3	A	SK296	須恵器	広口壺	口縁部	10	反	(14.0)	(3.7)	-	灰色	良	内外蓋 口縁ナデ
29	96	389-5	A	SK296	土師器	坏身	口縁部	30	反	(12.2)	(2.6)	-	明赤褐色	良	内外蓋ヨコナデ 外面オサエ 内面 線文
29	97	389-6	A	SK296	土師器	鉢	口縁部	20	-	11.2	(4.9)	-	にぶい黄褐色	良	内外蓋口縁部ヨコナデか 外面ハケ 後オサエ 内面ハケ
29	98	389-4	A	SK296	土師器	台付甕	台部	30	反	-	(5.4)	(12.1)	灰黄褐色	良	外面ハケ後ナデ 内面ハケ後ヨコナ デ・ナデ・オサエ
29	99	389-7	A	SK296	石製品	碇石	-	-	-	(5.8)	(1.2)	(6.0)	-	-	重量36 砂岩
29	100	414	A	SK298	土師器	壺	口縁部	30	反	(14.8)	(3.4)	-	にぶい褐色	良	内外蓋ヨコナデ 内面オサエ・ナデ
29	101	451-1	A	SK301	須恵器	坏蓋	天~口縁	70	-	10.0	3.9	-	灰色	良	内外蓋口縁ナデ 外面天頂部口縁ケ ズリ・「-」のへう記号
29	102	452-1	A	SK301	土師器	鉢	口縁~底部	70	-	10.0	9.1	4.8	淡黄褐色	良	内外蓋口縁部ヨコナデ 外面オサエ エ・ナデ 内面板ナデ・ハケ・オサエ ナデ
29	103	440	A	SK301	土師器	台付甕	体部~台部	40	-	-	(12.7)	12.4	褐色	良	内外蓋 ハケ・オサエ
29	104	441	A	SK301	土師器	台付甕	台部	20	-	-	(6.6)	13.7	灰黄褐色	良	外面ハケ後ナデ 内面ハケ・ナデ・ 指オサエか
29	105	442	A	SK302	須恵器	坏身	完形	100	-	7.9	3.3	-	灰色	やや不良	内外蓋口縁ナデ 外面ケズリ
29	106	416	A	SK302	土師器	鉢	口縁~底部	20	反	(11.7)	(4.4)	-	にぶい黄褐色	良	内外蓋口縁部ヨコナデ 外面オサエ 内面ナデ
29	107	443-1	A	SK302	土師器	坏身	口縁~底部	90	-	10.2	5.5	4.5	にぶい黄褐色	やや不良	内外蓋口縁部ヨコナデ 外面オサエ 内面ハケ・ナデ
29	108	443-2	A	SK302	土師器	坏身	口縁~底部	20	反	(11.0)	4.0	-	にぶい黄褐色	やや不良	外面ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面 線文により不明
29	109	445	A	SK304	土師器	高坏	坏部	60	反	(16.2)	(6.2)	-	褐色	良	外面オサエ 内面線文により不明
29	110	444	A	SK304	石製品	碇石	-	-	-	(5.1)	2.2	2.9	淡黄褐色	-	重量29.0 凝灰岩
29	111	454	A	SK305	土師器	壺	口縁~体部	50	-	15.4	(17.8)	-	褐色	良	内外蓋口縁部ヨコナデ 外面タテハ ケ・オサエ 内面ヨコハケ・オサエ
29	112	288	B	SP179	土師器	カワラケ	底部	60	反	-	(1.9)	(5.3)	淡褐色	良	内外蓋線文により不明 底部欠切
29	113	422	A	SP293	土師器	壺	口縁部	10	反	(17.0)	(3.6)	-	明赤褐色	やや不良	内外蓋 ハケ後ヨコナデ
30	114	120	B	SX47	陶器	天目茶碗	口縁~底部	25	反	(13.2)	6.8	(4.2)	灰色	良	内外蓋口縁ナデ 外面底部口縁ケ ズリ
30	115	348	A	SX47	土師器	羽釜	口縁部	20	反	(20.2)	(1.9)	-	にぶい黄褐色	良	外面ヨコナデ 内面板ナデ
30	116	311	A	SX47	土製品	土師	-	-	-	(2.8)	0.95	0.95	にぶい褐色	-	重量2.8
30	117	140	B	SX47	土製品	土師	-	-	-	(3.2)	0.9	0.9	にぶい褐色	-	重量2.9
30	118	21	B	包含層	須恵器	坏身	口縁~体部	10	反	(10.3)	(3.6)	-	灰色	良	内外蓋 口縁ナデ
30	119	295-4	A	包含層	須恵器	坏身	口縁~体部	10	反	(12.8)	(3.7)	-	褐色	良	内外蓋口縁ナデ 外面底部口縁ケ ズリ
30	120	12	B	包含層	須恵器	坏身	口縁~底部	40	反	(11.2)	(3.9)	(5.4)	灰色	良	内外蓋口縁ナデ 外面底部口縁ケ ズリ・「=」のへう記号 内面底部関 心内スタンプ
30	121	27	B	包含層	須恵器	坏蓋	口縁~体部	20	反	(12.5)	(4.2)	-	灰褐色	良	内外蓋口縁ナデ 外面天頂部口縁ケ ズリ
30	122	295-2	A	包含層	須恵器	坏蓋	天~口縁	50	-	9.4	3.8	-	灰色	良	内外蓋口縁ナデ 外面天頂部口縁ケ ズリ・「x」のへう記号
30	123	295-1	A	包含層	須恵器	坏蓋	完形	100	-	8.9	3.6	-	灰色	良	内外蓋口縁ナデ 外面天頂部口縁ケ ズリ
30	124	297	A	包含層	須恵器	坏蓋	天~口縁	60	反	(9.4)	(3.2)	-	灰色	良	内外蓋口縁ナデ 外面天頂部口縁ケ ズリ
30	125	18-2	B	包含層	須恵器	高坏	坏部	5	反	-	(4.8)	-	灰褐色	良	内外蓋口縁ナデ 外面線文・帯模 線文
30	126	294	A	包含層	須恵器	高坏	坏部	40	反	(14.4)	(6.6)	-	灰色	良	内外蓋口縁ナデ 外面ケズリ
30	127	13-2	B	包含層	須恵器	壺	口縁~底部	5	反	(13.0)	(5.2)	-	灰色	良	内外蓋 口縁ナデ 外面 線文
30	128	290	B	包含層	須恵器	壺	口縁部	10	反	(12.0)	(2.7)	-	灰白色	良	内外蓋 口縁ナデ
30	129	163	B	包含層	須恵器	長頸壺	体部~底部	60	反	-	(8.6)	(7.8)	灰色	良	内外蓋口縁ナデ 外面口縁ケズリ
30	130	193	B	包含層	須恵器	壺蓋	口縁~体部	85	-	9.4	(3.0)	-	灰白色	良	内外蓋 口縁ナデ 外面天頂部 ケ ズリ 内面天頂部 指線圧痕
30	131	167	B	包含層	須恵器	壺	口縁部	20	反	(24.8)	(5.8)	-	灰白色	良	内外蓋口縁ナデ 外面平行の線跡 外面線文により不明 内蓋口縁部線 文 内面底部ナデ・オサエ
30	132	457	A	包含層	土師器	直口壺	口蓋部	30	反	(9.3)	(8.1)	-	褐色	良	

遺物観察表(4)

Fig.	番号	実測 番号	調査 区分	遺構・層位	種別	細別	部位	残存	反転	口径 長さ	高さ 厚さ	底径 幅	色調	焼成	備考
30	133	5-2	B	包含層	土師器	壺	口縁～頸部	5未	反	(20.7)	(4.6)	-	褐色	良	内外面ヨコナデ 内面ハケ 折返し口縁
30	134	22	B	包含層	土師器	壺	底部	30	反	-	(2.0)	(10.0)	淡黄褐色	良	外面オサエ 外面底部本葉痕 内面磨滅により不明 敷束系
30	135	74	B	包含層	土師器	鉢	口縁～体部	20	反	(13.8)	(3.8)	-	褐色	良	内外面ヨコナデ 外面オサエ 内斜口縁
30	136	19	B	包含層	土師器	高坏	坏部	30	反	(15.8)	(4.9)	-	淡黄褐色	良	内外面 板ナデ後ヨコナデ
31	137	18-1	B	包含層	土師器	高坏	脚部	60	一部反	-	(6.3)	(9.7)	褐色	良	内外面ヨコナデ 外面ヨコナデ後タテ板ナデ 内面ナデ・ケズリ
31	138	164	B	包含層	土師器	高坏	脚部	75	-	-	(12.8)	-	灰褐色	良	外面接合部オサエ・ナデ 上半板ナデ後ヨコナデ 下半タテハケ・ナデ 内面シズリ・ケズリ・板ナデ 内外面口縁部板ナデ後ヨコナデ 外面底部オサエ後タテハケ後ナデ・底部オサエ・ナデ 内面板ナデ・ナデ・ハケ
31	139	405	A	包含層	土師器	壺	口縁～底部	80	一部反	(14.8)	26.2	-	にぶい赤褐色	良	内外面ヨコナデ 内面ヨコハケ
31	140	296-2	A	包含層	土師器	伊勢型壺	口縁部	5	反	(17.2)	(4.3)	-	淡黄褐色	良	内外面ヨコナデ 内面ヨコハケ
31	141	166	B	包含層	土師器	壺	体部～底部	65	-	-	(5.5)	7.2	褐色	良	外面ハケ・オサエ 内面ナデ
31	142	296-3	A	包含層	土師器	台付壺	台部	30	-	-	(8.5)	14.6	にぶい黄褐色	良	外面オサエ・ハケ
31	143	295-3	A	包含層	土師器	手づくね鉢	口縁～底部	60	一部反	(2.9)	3.2	-	にぶい褐色	良	内外面オサエ・ナデ 内面ナデ
31	144	13-1	B	包含層	灰胎陶器	碗	底部	15	反	-	(1.6)	8.1	灰色	良	内外面回転ナデ 外面回転ケズリ
31	145	296-1	A	包含層	中国青磁	蓮蓬弁文碗	底部	35	一部反	-	(1.8)	(4.9)	灰色	良	内外面回転ナデ 外面底部回転ケズリ
31	146	5-1	B	包含層	石製品	磁石	-	-	-	(9.0)	2.8	4.7	白色	-	重量108 磁灰岩
31	147	20	B	包含層	石製品	卵石	完形	100	-	12.1	2.7	4.0	2.0	-	重量198 緑色片岩
38	148	465-2	C	S041	滑石器	坏蓋	口縁部	10	反	(10.4)	(1.9)	-	灰色	良	内外面 回転ナデ
38	149	465-1	C	S041	土師器	坏身	口縁～底部	30	反	(13.4)	(4.5)	-	淡黄褐色	良	内外面口縁部ヨコナデ 外面オサエ・ナデ 内面ハケ後ナデ
38	150	463	C	S041	石製品	臼玉	-	-	0.55	(0.35)	0.55	灰白色	-	重量0.1 滑石	
38	151	560	C	S042	土師器	坏身	口縁～底部	30	反	(12.0)	4.7	-	褐色	良	外面オサエ 内面磨滅により不明
38	152	469-1	C	S045	土師器	坏身	口縁～底部	30	反	(11.2)	4.5	(5.8)	褐色	良	外面口縁部磨滅 外面オサエ 内面磨滅により不明
38	153	469-2	C	S045	土師器	高坏	坏部	30	反	(13.9)	(4.6)	-	明赤褐色	良	内外面 磨滅により不明
38	154	561	C	S045	土師器	高坏	脚部	50	一部反	-	(6.5)	9.1	にぶい褐色	やや不良	内外面底部ヨコナデ 外面板ナデか・磨滅により不明 内面坏部ハケ・ナデ・脚部ケズリ
38	155	469-3	C	S045	土師器	鉢	口縁～胴部	20	反	(8.2)	(5.3)	-	にぶい黄褐色	良	内外面口縁部ヨコナデ 外面ハケ後ナデ 内面ハケ・オサエ
38	156	469-4	C	S045	土師器	大鉢	口縁～胴部	20	反	(22.5)	(10.6)	-	にぶい褐色	良	外面オサエ・ナデ・板ナデ 内面ヨコナデ・板ナデ
38	157	464	C	S047	土製品	薬玉	-	-	(1.5)	1.0	1.0	褐色	-	重量1.4	
38	158	510	C	S078	土師器	瓶	底部	20	反	-	(7.1)	(9.0)	褐色	良	外面磨滅により不明 内面ハケ・オサエ
38	159	471	C	S082	土師器	壺	口縁部	10	反	(15.8)	(3.7)	-	にぶい赤褐色	良	内外面 ハケ後ヨコナデ
38	160	520-1	C	S0415	土師器	壺	口縁部	10	反	(13.6)	(4.0)	-	褐色	良	内外面ヨコナデ 内面ヨコ位板ナデ 複合口縁
38	161	541	C	S0419	土師器	壺	底部	5未	-	-	(3.9)	-	にぶい褐色	やや粗	外面タテハケ・カゴメ 内面ハケ
38	162	483	C	SK359	土師器	壺	口縁部	30	反	(16.5)	(3.9)	-	淡黄褐色	良	外面ヨコナデ 内面ヨコ位板ナデ・オサエ
38	163	485	C	SK361	土師器	坏身	口縁～体部	20	反	(13.0)	(4.3)	-	褐色	良	外面オサエ・ナデか 内面磨滅により不明
38	164	488	C	SK381	土師器	壺	口縁部	30	反	(15.3)	(3.5)	-	にぶい褐色	良	外面ヨコナデ・ハケ 内面ヨコハケ・磨滅
38	165	491	C	SK387	土師器	壺	口縁部	20	反	(14.8)	(3.2)	-	褐色	良	外面ヨコナデ・板ナデか 内面磨滅・ハケ
38	166	478	C	SK397	土師器	壺	底部	30	反	-	(2.5)	(7.0)	にぶい褐色	良	内外面ハケ 内面底部ナデ
38	167	476-1	C	SK401	滑石器	坏蓋	口縁部	10	反	(14.9)	(3.2)	-	灰色	不良	内外面 回転ナデ
38	168	476-2	C	SK401	土師器	高坏	脚部	30	-	-	(5.0)	(8.4)	明赤褐色	良	内外面ヨコナデ 外面板ナデ・ナデ 内面ケズリ
38	169	547	C	SK401	土師器	壺	口縁部	20	反	(16.8)	(5.3)	-	淡黄褐色	良	外面ヨコナデ・オサエ・ハケ 内面ハケ
38	170	476-3	C	SK401	土師器	鉢	口縁部	20	反	(17.7)	(6.5)	-	にぶい褐色	良	内外面ヨコナデ 外面オサエ 内面オサエ後ヨコ位ナデ
38	171	496-2	C	SK408	滑石器	坏身	口縁～底部	30	反	(11.0)	(5.1)	-	灰色	良	内外面回転ナデ 外面底部回転ケズリ
38	172	496-1	C	SK408	滑石器	坏蓋	天～口縁	50	反	(13.2)	4.0	-	灰色	良	内外面回転ナデ 外面天頂部回転ケズリ 内面天頂部静止ナデ
38	173	458-1	C	包含層	滑石器	坏蓋	天～口縁	30	反	(13.3)	4.6	-	灰色	良	内外面回転ナデ 外面天頂部回転ケズリ 内面天頂部同心円ステップ
39	174	480-2	C	包含層	滑石器	高坏	坏部	25	反	(19.8)	(5.5)	-	灰白色	良	内外面回転ナデ 外面波状文
39	175	458-2	C	包含層	滑石器	短脚壺	口縁部	20	反	(8.0)	(3.0)	-	灰色	良	内外面 回転ナデ
39	176	458-3	C	包含層	滑石器	高坏蓋	楕	5未	反	-	(2.0)	-	灰色	良	内外面 回転ナデ

遺物観察表(5)

Fig.	番号	実測 番号	調査 区分	遺構・層位	種別	細別	部位	残存	反転	口径 長さ	器高 厚さ	底径 幅	色調	構成	備考	
39	177	400-1	C	包含層	土師器	高坏	坏部	20	反	(14.9)	5.8	-	にぶい褐色	良	外面ヨコナデ、オサエ、ナデ ミが平か	内面
39	178	563	C	包含層	土師器	甕	口縁～頸部	20	反	(19.7)	(5.4)	-	褐色	良	内外面口縁部ハケ後ヨコナデ 内外面頸部ハケ、オサエ	内面
39	179	424	C	包含層	石製品	紡錘形	-	-	-	4.2	1.4	4.2	-	-	重量29.0	黒色片岩
39	180	458-4	C	包含層	石製品	砥石	-	-	-	(4.3)	2.0	2.0	黒色	-	重量25.0	粘板岩(定形)

圖 版

PLATE



1 A区 完掘全景 (南西から)



2 B区 完掘全景 (南西から)



1 C区 完掘全景（北東から）



2 D区 完掘全景（南から）



1 B区 SD03, SD11 完掘状況 (北から)



2 B区 SD66 完掘状況 (北東から)



3 B区 SD66 須恵器平瓶 (2) 出土状況 (北西から)



4 B区 SD66 須恵器高坏 (3) 出土状況 (西から)



1 A区 SD239 完掘状況 (東から)



2 A区 SD242 滑石製勾玉 (19) 出土状況 (北東から)



3 A区 SE208 土層断面 (西から)



1 B区 SK29 完掘状況（北から）



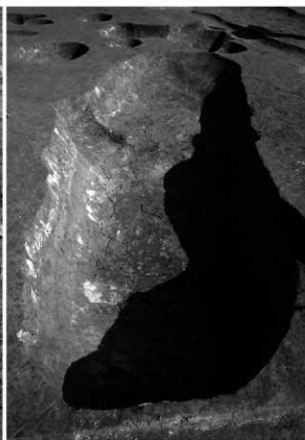
2 B区 SK29 土層断面（西から）



3 B区 SK29 土師器甕（29）出土状況（西から）



4 B区 SK30 完掘状況（北西から）



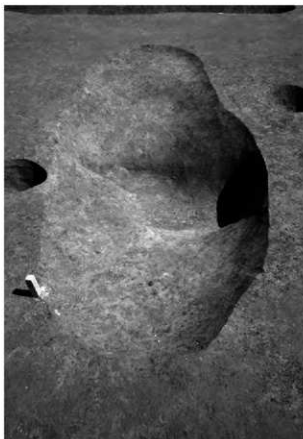
5 B区 SK80 完掘状況（西から）



1 B区 SK128 土層断面 (西から)



2 B区 SK128 完掘状況 (西から)



1 A区 SK198 完掘状況 (東から)



2 A区 SK204 完掘状況 (西から)



3 A区 SK206・SK266 完掘状況 (南から)



1 A区 SK221 遺物出土状況（西から）



2 A区 SK221 完掘状況（西から）



3 A区 SK255 遺物出土状況（北西から）



1 A区 SK280 完掘状況 (北西から)



2 A区 SK289 完掘状況 (北西から)



3 A区 SK289 土層断面 (西から)



4 A区 SK289 須恵器 (83~85) 出土状況 (西から)



1 A区 SK294 遺物出土状況（北東から）



2 A区 SK295 土師器甕（89）出土状況 東から



3 A区 SK298・SK302 遺物出土状況（東から）



1 A区 SK305及び周辺 遺物出土状況(西から)



2 A区 SK296, SK301 土師器台付甕出土状況(北から)



3 A区 SK305 土師器甕(111) 出土状況(北から)



4 A区 SK305周辺 土師器甕(132) 出土状況(東から)



5 A区 SK305周辺 土師器甕(139) 出土状況(北から)



1 C区 SD342 完掘状況 (南東から)



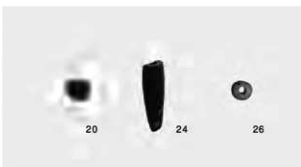
2 C区 SD345 完掘状況 (東から)



3 C区 SH01 完掘状況 (北東から)



主要出土遺物





64



66



67



71



72



74



76



80





99



105



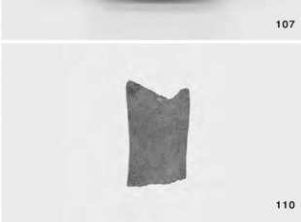
101



107



102



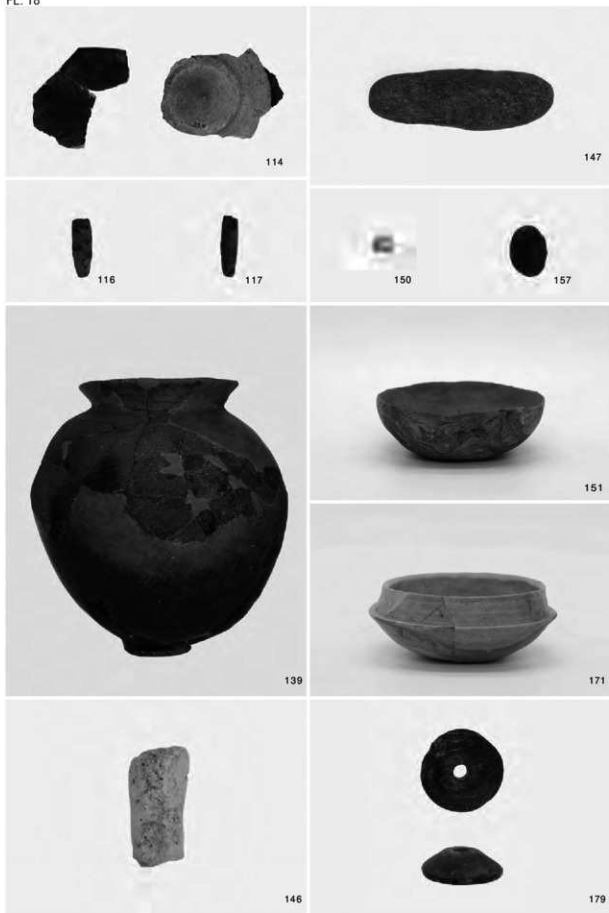
110



104



111



報告書抄録

書名(ふりがな)		恒武西宮遺跡 7(つねたけにしみやいせき)						
編著者名		川西啓喜(編)、田中昌樹						
編集・発行機関		浜松市教育委員会(浜松市市民部文化財課が補助執行) 浜松市市民部文化財課 〒430-8652 浜松市中区元城町103-2 TEL(053)457-2466 FAX(050)3730-1391						
発行年月日		2022年11月30日						
ふりがな 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つねたけにしみやいせき 恒武西宮遺跡	静岡県 浜松市 東区 恒武町	22132	2-02-12	34度 75分 94秒	137度 79分 51秒	2022年1月12日 ～ 2022年3月25日	1,400㎡	自動車整備 センター新設 工事に伴う 埋蔵文化財 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
恒武西宮遺跡	集落跡	古墳時代 戦国時代		溝 土坑 小穴		土師器 須恵器 土製品 石製品 (勾玉・白玉・ 紡錘車・有孔円板)	6世紀後半～7世紀前半 を中心とする集落跡であり、 大型の土坑群や井戸1基を 確認。土坑を中心に土師器・ 須恵器(初期須恵器含む)、 石製模造品が出土。 戦国時代の遺構は、東西 及び南北方向に延びる溝を 数条確認。	
要約	<p>恒武西宮遺跡は、天竜川の堆積作用によって形成された沖積平野の中でも東を南流する豊田川、西を南流する安間川に挟まれた微高地に位置する遺跡である。</p> <p>今回の調査により6世紀後半から7世紀前半にかけての遺構と遺物が出土した。この時期の遺構として掘立柱建物跡1棟、廃棄土坑、溝、小穴を確認した。土坑からは石製模造品である有孔円盤や白玉、完形の須恵器坏身や坏蓋、7世紀の完形の土師器壺が出土している。</p> <p>戦国時代の遺構では、数は少ないものの、東西及び南北方向の溝を数条確認し、道路遺構や屋敷の区画溝を確認した。</p>							

恒武西宮遺跡 7

2022年11月30日

編集・発行機関 浜松市教育委員会
(浜松市市民部文化財課が補助執行)
印 刷 中部印刷株式会社

Tsunetake-nishimiya Site

The 32nd Excavation Report

A Report of Archaeological Investigation
In Western Shizuoka, Japan



November, 2022

Hamamatsu Municipal Board of Education